熊本県文化財調査報告　第28集

高橋南貝塚

1978

熊本県教育委員会

熊本県文化財調査報告　第28集

高橋南貝塚

本　　文

1978

熊本県教育委員会

序　文

熊本市街を貫流する坪井川は、流域住民に大きな恩恵を与えていると同時に、雨期には幾度となく氾濫し多大な被害を与えております。

このようなことから、熊本県土木部では昭和43年度から坪井川の改修事業を策定し、年次的に改修が進められております。

昭和49年、改修工事予定地域内に高橋南貝塚が新たに発見されました。県土木部河川課、熊本市教育委員会とも協議のうえ、事業の主旨に鑑み、発掘調査を実施し、記録保存を図ることにいたしました。

調査は熊本県教育委員会が実施いたしましたが、ご理解とご協力をいただきました県土木部河川課、熊本土木事務所、熊本市教育委員会をはじめとする関係各位、ならびに調査に対して指導・助言を寄せられました専門調査員の先生方のご支援に対して深く感謝いたします。

昭和53年3月31日

熊本県教育委員会

教育長　林田正恒

例　言

1．本書は、坪井川河川改修事業に伴い、昭和50・51年度に発掘調査を実施した高橋南貝塚の調査報告である。

2．本書の執筆は隈　昭志・松本健郎が行った。また、専門調査員の先生方からの玉稿を付論として上梓した。

3．掲載図の作成は松本・上妻信寛・倉原謙治・文化財収蔵庫員が行い、製図は松本が行った。掲載写真は松本・白石巌によるものである。

4．本書の図版の遺物番号は挿図と対照番号を付した。（1－1→第1図1）

5．本書の編集は、熊本県教育委員会文化課が行った。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　　説

1．調査にいたる経緯……1

2．調査の組織……2

3．調査の経過……3

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と自然環境……5

2．遺跡の歴史的環境……7

第Ⅲ章　調　　査

1．調査の概要……16

2．貝層と層位……16

3．遺　　構……20

4．遺　　物……20

第Ⅳ章　調査の成果と問題点

1．出土遺物について……62

2．貝塚形成の年代と背景……64

3．近世の高橋と自然環境の復原……64

付論1．高橋南貝塚出土の貝類について……69
菊 池 泰 二（九州大学理学部）

付論2．高橋南貝塚出土の鉄滓……72
大 澤 正 己（北九州郷土史研究会）

付論3．高橋南貝塚出土木製品の樹種鑑定……77
大 迫 靖 雄（熊本大学教育学部）

付論4．高橋南貝塚出土の動物遺存体……85
木村幾多郎（九州大学医学部）

挿 図 目 次

第1図　遺跡の位置……5

第2図　遺跡周辺地形図……6

第3図　周辺遺跡分布図……8

第4図　調査前地形図と調査区……折り込み

第5図　調査区地層断面図……折り込み

第6図　白磁実測図……21

第７図　青磁実測図……24
第８図　青磁実測図……26
第９図　青磁実測図……28
第10図　青磁実測図……29
第11図　土師器(坏)実測図……31
第12図　土師器(坏)実測図……32
第13図　土師器(皿)実測図……33
第14図　土師器(皿)実測図……34
第15図　土師器(皿)実測図……35
第16図　土師器(皿)実測図……36
第17図　土師器実測図・土師器底部拓影……36
第18図　瓦器実測図……39
第19図　須恵質土器実測図……41
第20図　土鍋実測図……42
第21図　須恵質土器・陶器実測図……44
第22図　褐釉陶器実測図……45
第23図　土鍋実測図……46
第24図　下駄実測図……48
第25図　下駄実測図……49
第26図　木製品実測図……50
第27図　木製品実測図……52
第28図　木製品実測図……54
第29図　滑石製石鍋実測図……55
第30図　石器・石製品実測図……57
第31図　貝製品拓影……58
第32図　土製品・金属製品・骨角器実測図……59
第33図　古銭拓影……60
第34図　縄文式土器実測図……61

表　目　次

第１表　周辺遺跡一覧表……９
第２表　ブロックサンプル貝類個体数……18
第３表　ブロックサンプル貝類構成比……19
第４表　土師器坏一覧表……37
第５表　土師器皿一覧表……37
第６表　下駄一覧表……49

第７表　箸状木製品一覧表……51

付１—第１表　高橋南貝塚出土貝類の量的構成……
付２—第１表　鉄滓の化学組成……75

図　版　目　次

図版１　遺跡周辺空中写真
図版２　(1)(2)遺跡の遠景、(3)調査前の状況
図版３　(1)(2)調査地全景
図版４　(1)(2)貝層の状況、(3)(4)遺物出土状況
図版５　(1)大潮満潮時の調査区、(2)貝層の状況
図版６　(1)石列、(2)杭列
図版７　白　　磁
図版８　青　　磁
図版９　土師器(坏)
図版10　土師器(坏・皿)
図版11　土師器(皿)・瓦器・須恵質土器
図版12　須恵質土器
図版13　須恵質土器・陶器(常滑焼)
図版14　陶器(常滑焼)・褐釉陶器・土師質土器
図版15　木製品(下駄)
図版16　木製品(下駄)
図版17　木製品(下駄)
図版18　木製品(下駄)
図版19　木製品(下駄・椀・櫛)
図版20　木製品(箸状木製品・底板・用途不明木製品)
図版21　木製品(蓋・底板・用途不明木製品)
図版22　石製品(滑石製石鍋・磨製石斧・砥石・用途不明石製品)
図版23　貝製品・土製品・金属製品・骨角器
図版24　古銭・縄文式土器
図版25　自然遺物(貝類・桃)
図版26　飽託郡高橋町の絵図(熊本県立図書館蔵)

第1章　序　　説

1．調査にいたる経緯

坪井川は鹿本郡植木町の東南にその源を発する。南下して途中阿蘇外輪山から西流する堀川を合わせ、熊本市中心部を南西に貫流して熊本城の外堀を形成しながら、白川と平行して西流し、上高橋町で金峰山系の山岳地（標高600～700ｍ）を源として南流した井芹川を合せて、有明海に注いでいる。しかし、元来坪井川は井芹川とともに白川に合流するものであったが、熊本城築城に伴って加藤清正による大幅な改修事業、その後細川忠興による分流などにより人為的に改変されている。そのため、承応二年(1653年)、元文元年(1736年)、寛政八年(1796年)、天保二年(1831年)の白川の洪水に際して相当の被害を惹起しているものと推定される。

その後も、大正３年(1914年)、同11年、昭和３年、同28年、同32年に大洪水に見舞われている。とくに、昭和32年の六・二六水害は、熊本地方の日雨量が480㎜に達し、熊本地方気象台開設以来の記録を作った。このため坪井川上流では山津波を起し、田畑の冠水等、家屋の浸水16,300戸に達した。

坪井川と井芹川の改修は、昭和初期に開始されていた。坪井川は昭和７年～11年、内務省補助工事（中小河川改修工事）で熊本市高橋町井芹川合流点から清水町まで、一方井芹川は昭和６年～10年、農林省補助事業で飽託郡北部町北島から熊本市松尾町下松尾までの改修であった。しかし、改修事業そのものが前述のとおり昭和32年の出水実績には遠く及ばず、大災害となったため、再度の抜本的再改修の必要性が生じ、昭和33年以来実施されて来た改修事業に加えて、昭和44年８月「坪井川改修計画書」(熊本県）が提示され、以後改修事業が始まったわけである。

これに伴って、高橋貝塚周辺について県土木部河川課と協議を行い、昭和49年３月20日、熊本土木事務所、文化課、熊本市教育委員会の三者で、現地において確認をした。その後、改修事業の進捗状況をみて、昭和50年８月18日、上記三者で、具体的な調査内容・工事とのかかわりについて検討して、発掘調査を実施することになった。

発掘届については昭和50年９月22日付け、教文第403号で文化庁へ進達し、昭和50年10月14日付け、委保第５の2260号で通知書を受けている。なお、昭和47年４月文化課が設置され、道路や河川の新設、改修事業に伴う主な調査には、久玉城跡（昭和47年・国道266号改良･牛深市)、江津湖苗代津遺跡（昭和48年・江津湖浚渫・熊本市)、蓮花寺跡・相良頼景館跡（昭和49年～51年，球磨川改修・多良木町)、黒橋貝塚（昭和50年・浜戸川改修・城南町)、沈目立山遺跡（昭和50年～51年･県道宇土～甲佐線改良･城南町)、赤星福士・水溜遺跡（昭和51年･国道325号改良・菊池市)、下城跡（昭和52年～53年･国道218号改良・小国町）があり、下城跡については昭和52年度に試掘調査を終り、昭和53年度に本格的発掘調査を実施する予定である。（隈昭志）

2. 調査の組織

調査の組織及び調査関係者は下記のとおりである。

調 査 主 体　熊本県教育委員会
調査責任者　田辺哲夫（前文化課長）
　　境信三郎（　〃　）
　　合志太助（文化課長）
調 査 総 括　隈　昭志（文化課文化財調査係長）
調 査 庶 務　前田利郎（前文化課長補佐）
　　河野宗忠（　〃　）
　　田中　繁（文化課長補佐）
　　松本　翼（前文化課管理係長）
　　望野正雄（文化課管理係長）
調　査　員　松本健郎（文化課技師）　緒方　勉（文化課参事）
　　村上豊喜（　〃　）　倉原謙治（前文化課調査員）
　　上妻信寛（前文化課技師）　白石　巌（文化課調査員）
専門調査員　松本雅明（熊本大学法文学部）　菊池泰二（九州大学理学部）
　　白木原和美（　〃　）　木村幾多郎（九州大学医学部）
　　工藤敬一（　〃　）　斉藤林次（熊本県文化財保護審議会委員）
　　大迫靖雄（熊本大学教育学部）　原口長之（　〃　）
　　大澤正己（北九州郷土史研究会）
遺物整理協力　上野辰男（文化課主幹・収蔵庫）　山城仁恵（文化課嘱託・収蔵庫）
調 査 協 力　乙益重隆（国学院大学）　鈴木　喬（熊本市教育委員会）
　　亀井明徳（九州歴史資料館）　東　光彦（熊本市立博物館）
　　森下　功（熊本市文化財保護委員）　富田紘一（　〃　）
　　島津義昭・丸山武水・松村道博（以上県文化課）
河　川　課　米川信之（熊本県土木部河川課長）
　　徳永康則（熊本県土木部河川課長補佐）
　　御園文雄（熊本県土木部河川課維持係主幹）
　　加悦重利（熊本県土木部河川課維持係参事）
　熊本土木事務所

専門調査員の先生方から、発掘・整理報告に関して指導を受けた。また、菊池・大迫・斉

藤・大澤・木村の各専門調査員から、専門調査結果に関する玉稿をいただき、本書に上梓した。遺物の整理作業は、熊本県文化財収蔵庫で実施した。また、悪条件の中、調査作業員として献身的な努力を果された諸氏に、ともに深謝する。（松本健郎）

3．調査の経過

調査は昭和51年3月初旬に着手し、現地調査を終了したのは6月末であった。予算の編成上、3月末までを第1次調査、4月～6月を第2次調査とし、その間に約2週間作業を中止したが、調査活動としては一連のものである。

3月2日　現地に調査事務所（プレハブハウス）を設置。松本が調査のための具体的な準備活動を始める。

3月4日　調査用器材等を調査事務所に運搬。調査作業員の手配も終え、明5日からの調査開始に備える。

3月5日　作業員(9名)も現地集合。松本が遺跡の概要、作業についての諸注意を行った後、早速作業を始める。第Ⅳ章1で述べるように、地形に応じて5mのグリットを設定。排土等の関係から、D－6、D－7区から掘開を始める。表採で青磁、土師器、滑石製石鍋等がみられ、遺跡の年代は中世と考えられる。

3月6日～13日　D－6、D－7区はいずれも50～60cmで砂層となり、遺物も近世陶磁をわずかに出土したのみである。A－1、B－1、C－2区の掘開を始める。上記3区ではすべてに貝層があり、土器類からみて中世に属することが確定的になる。雨でA－1、B－1、C－2区が冠水し､作業難行｡代ってD－3、D－4区を掘開。

3月16日　午前9時半頃から、満潮にて水位が上昇。調査区への浸水が始まり、9時50分頃には完全に水没してしまう。水深は70～80cmに及び、午後になってようやく干潮で水位が下がったが、掘開したグリットはプールのように水をたたえ、現場一帯は水分のため調査不能。このような状態が3月21日まで続き、調査活動は中止。以後約2週間おきに訪れる大潮時には冠水し、3～5日間は調査不能。

3月19日　九州大学医学部・木村氏、専門調査のため来訪。

3月下旬　掘開途中のグリットの排水の後、掘開を続ける。遺物は貝層(9層)とその直下黒褐色土(10層)に包含され、青灰色粘土層(11層)は無遺物である。A－1、A－2、B－1、B－2、C－2、D－6、D－7区は掘開を終る。この間、専門調査員松本雅明、白木原和美、工藤敬一、原口長之、斉藤林次、菊池泰二氏ら来訪。調査についての指導助言を受ける。

3月30日　遺物・調査器材類の整理、調査再開までの調査地の保全措置をとり、第1次調査を終了。

3月31日　遺物・調査器材類を一応撤収し、早速第2次調査についての協議を進める。

4月18日　第2次調査開始。A—3、A—4区から掘開を始める。この両区では北側には貝層が認められない。

4月中旬　天候にも恵まれ、調査が進む。B—3、C—3区も掘開を始める。下駄等の木製品の出土も多く、作業には神経をつかい、出土品の保存も大変である。

4月下旬　C－3区に石列が現われる。松本は塚原古墳群報告書作成作業のため、代わって技師・上妻信寛が調査を担当する。4月29日より5月5日まで、飛び石連休のため現場作業は中断する。

5月6日　作業再開。C－3区に現われた石列を追いかけ、B－4、C－4区を掘開。C－4区に石列がのびる。大潮ごとに冠水し、排水が大変である。

5月中旬　B－4、C－4区とも貝層が厚く掘開に手間どる。つづいてA－5、A－6区を掘開し始める。A－6区にはわずかに貝層がみられるのみで、貝塚の西限がつかめる。A－6・A－5区に近代の井戸の下部が現われ、湧水に悩まされる。

6月上旬　B－5、B－6区の掘開。B－5区を中心とする地域は最も貝層が厚く、約80cmの純貝層がみられる。

6月中旬　掘開作業を終え、調査終了に向け、実測・撮影等を行う。松本も調査に復帰し、さらに調査員・倉原謙治も調査活動に従事する。

6月下旬　降雨のため現場が冠水し、4日間作業を中断。しかも、露出していた石列が崩壊したり土砂に埋没したりで実測を断念したが、その他の作業はすべて終了した。

6月30日　出土遺物、調査器材を撤収し、4カ月におよぶ現地調査を終了した。(松本)

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

1．遺跡の位置と自然環境（第1・2・3図）

熊本市街の西郊に金峰山（標高665m）がある。別名を一の岳と呼ばれ、県民に親しまれている。高橋南貝塚は金峰山の南の麓、熊本市高橋町上高橋の坪井川右岸の河川敷に所在する。

金峰山は、周辺の山塊とともに金峰火山群を形成する。北に連なる二の岳(標高685.4m）・三の岳(標高684m）もその一群である。金峰山はトロイデともカルデラとも言われ[註1]、周辺の火山群とともに古琉球火山帯（新第三紀末～第四紀）の活動の産物と考えられている。阿蘇溶結凝灰岩が、金峰火山群の一部を覆っているところから、金峰火山群は阿蘇カルデラよりも古いと考えられている。

金峰山麓は果樹園の造成が進み、東部斜面は柑橘類・ブドウ・ナシが多い。西側斜面の河内・天水地区は柑橘類が中心で、温州ミカンの一大産地となっている。

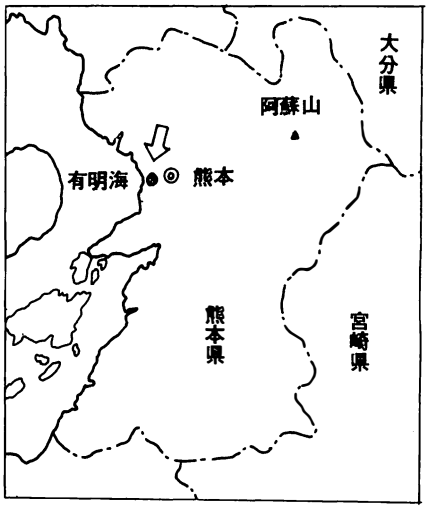
金峰山頂からは、東に熊本市街から遠く阿蘇の連山を望み、西の眼下には有明海[註2]が広がり、かなたに島原半島が横たわる。南の直下には坪井川、さらに南に白川、緑川が流れ、広大な熊本平野[註3]が展開する。

熊本平野は四方を山に囲まれ、盆地状の地形を呈し、気候も内陸性気候に近い。平野は熊本市の東部の洪積台地と、白川・緑川を中心とした河川堆積によって形成された沖積低地に二分される。熊本市街の占地も、白川の扇状地状の砂堆上にある。

熊本平野の西方海岸地域は、白川・緑川の堆積作用という好条件に恵まれ、干拓地も多い。

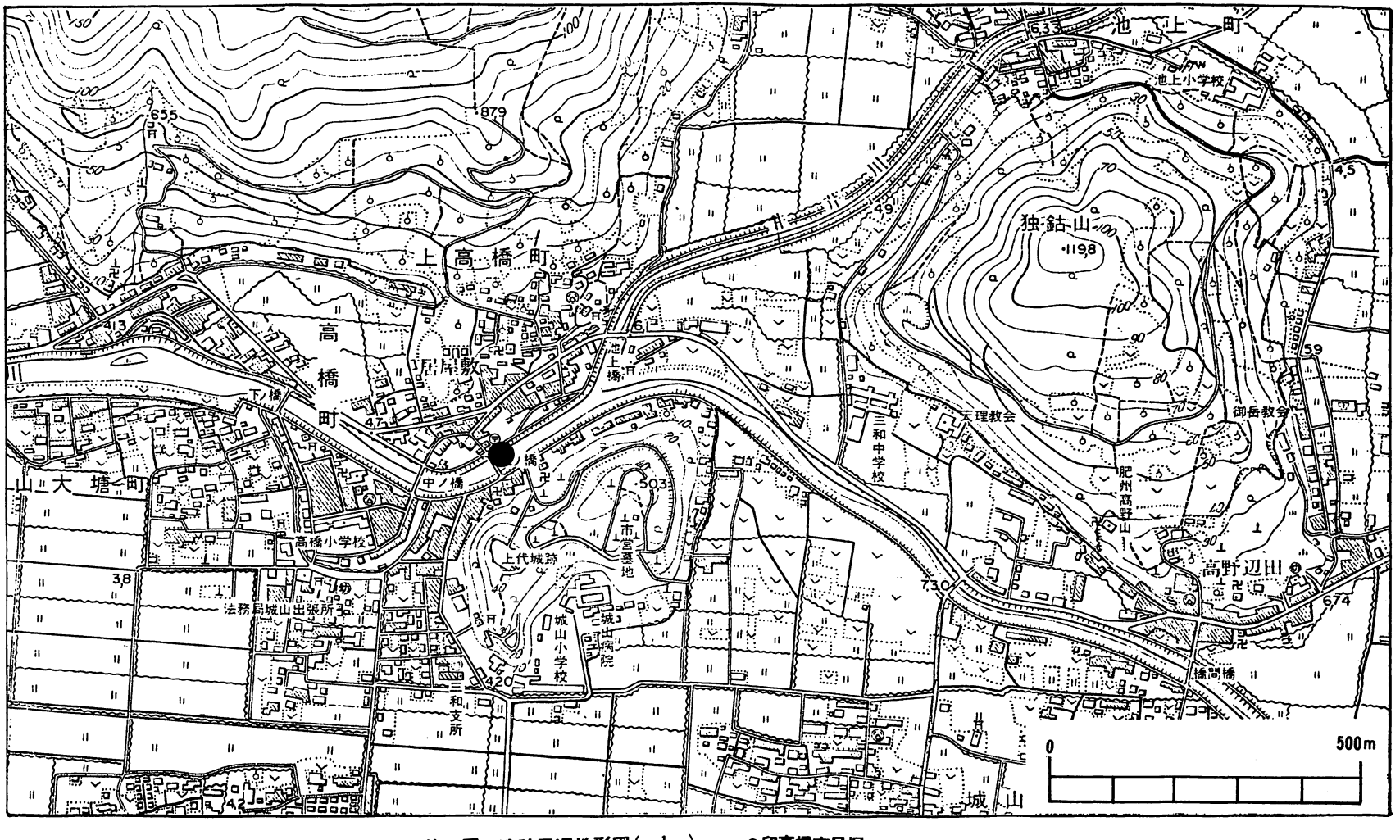
坪井川は熊本市の北方、合志台地の西部に源を発し、熊本市街を貫流し、熊本駅の南で西に折れ、金峰山の南麓沿いに西流して有明海に流入する。その間、上高橋で井芹川と合流する。高橋南貝塚は、坪井川・井芹川の合流点の下流約170mに位置する。

高橋南貝塚の対岸に独立丘陵の城山（標高50.3m）があり、その西斜面に高橋稲荷神社が鎮座する。日本五大稲荷の一つに数えられ、2月の初午の日は盛況を呈する。（松本）



第1図　遺跡の位置

註1．カルデラ説には次のものがある。
岩本政教他『熊本県の地理』日本地理集成Ⅲ、昭和39年。



第2図　遺跡周辺地形図（$\frac{1}{10000}$）　●印高橋南貝塚

渡辺一徳「金峰カルデラ」『熊本の自然』所収、熊本日日新聞社、昭和52年。

松本唯一「風土」『熊本県史・総説論』所収、熊本県、昭和40年、はトロイデ説をとっている。

註2．長崎・佐賀・福岡・熊本の各県にまたがり、約1,696km²。海図では島原海湾と記載されているが、一般には有明海と呼ばれている。

註3．筑後平野に次ぐ九州第二の平野で、一大穀倉地帯をなしている。面積約775km²。

2．遺跡の歴史的環境（第3図）

金峰山の山麓には各時代の遺跡が点在する。中でも南麓は、熊本市で最も遺跡の密度の高い地域の一つに数えられる。この南麓には大小の丘陵が発達し、これらの丘陵の頂部、斜面、裾部に多くの遺跡が所在する。この地域の遺跡を年代的にみると、先土器時代の遺跡は現在のところ確認されておらず、縄文・弥生・古墳・古代・中世と続くが、とくに古墳が多くみられる。

縄文時代

縄文時代の遺物を出土する遺跡は、千原台遺跡の他、高橋周辺に2・3の遺跡が知られている。最も注目すべきは高橋貝塚[註1]である。金峰山南麓の丘陵南端に位置し、カキ・ハイガイ・ハマグリを主体とする貝塚であり、かって土器・磨製石斧・人骨数体が出土したと伝えられる[註2]が、詳細は不明である。出土した土器から、年代は縄文中～後期[註3]と考えられている。現在民家や道路の下になり、ほとんど壊滅状態である。

高橋貝塚の周辺に浦田坂遺跡・高坊遺跡があり、磨製石斧やすり石等が出土しているが、実態は不明である。

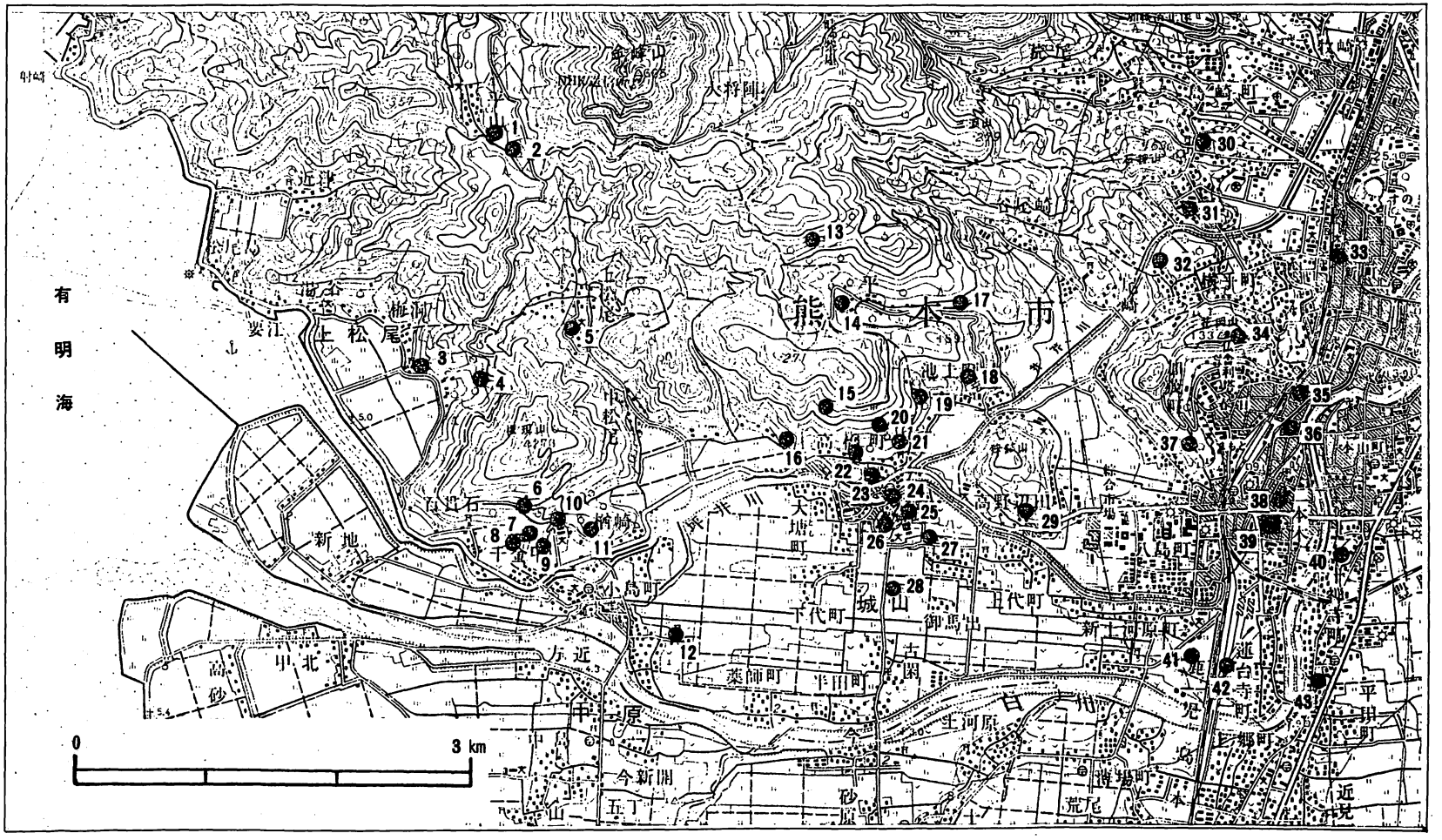
島崎町・千原台遺跡[註4]は、昭和24年に東光彦氏による発掘が実施された。この地域の縄文時代遺跡では最大規模のものである。少量の押型文土器を出土し、この地域の最古のものである。三万田式・御領式・黒川式等、後晩期の土器を多量に出土し、磨製石斧・打製石斧・石鏃・石錘・石匕等、石器類も多い。また、部分的に竪穴住居址が確認されている。また、量は少ないが、弥生式土器(後期)、土師器・須恵器も出土している。この遺跡は、宅地化のため昭和25年頃までに消滅した。

千原台遺跡の近くの石神原遺跡[註5]から、弥生時代・古墳時代の土器・石器とともに、磨製石斧・打製石斧・石鏃・すり石等の縄文後晩期の石器群が採集されている。昭和初期に採集されたものであるが、これに対応する土器が見い出せない。

弥生時代

弥生時代前期の遺跡はこの地域では確認されておらず、中期も石神原遺跡の中に中期の土器が若干含まれる程度である。

弥生後期になると遺跡数も増えてくる。石神原遺跡では中期から後期にかけての土器が多量に出土し、甕棺が知られている。確認されていないが、住居址も存在する可能性が大きいと指



第3図　　周辺遺跡分布図

第1表　周辺遺跡一覧表(第3図対照)

番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名	番号	遺跡名
1	平山遺跡	12	御坊山遺跡	23	高橋貝塚	34	花岡山石棺群
2	平山廃寺	13	金子塔	24	高橋南貝塚	35	北岡神社古墳 北岡横穴群
3	西竹洞石棺群	14	百塚(初期池	25	城山古墳群	36	石塘遺跡
4	小林石棺群	15	二本松古墳群	26	高橋稲荷山石棺群	37	万日山古墳群
5	上松尾城跡	16	皆代古墳群	27	じゅうしげ山古墳	38	春日町遺跡
6	千金甲古墳群	17	堂床(初期池辺	28	中代遺跡	39	飽田国府跡
7	高城山古墳群	18	後期池辺寺跡	29	高野辺田の洞仏	40	世安池田遺跡
8	千金甲貝塚	19	二軒小屋古墳	30	石神原遺跡	41	道城方遺跡
9	北内潟貝塚参考地	20	高坊古墳	31	千原台遺跡	42	南新宮遺跡
10	権現平古墳群	21	高坊遺跡	32	戸坂遺跡	43	平田遺跡
11	楢崎山古墳群	22	浦田坂遺跡	33	新馬借遺跡		

摘[註6]されている。

戸坂遺跡[註7]は、標高20～30mの台地上に立地し、弥生終末期を主体とする遺跡である。住居址があったものと考えられるが、採土工事等によって遺跡は消滅している。

戸坂北原遺跡[註8]では、採土工事に伴って内行花文鏡の破片が採集されており、一緒に採集された土器から、弥生終末期と考えられている。鏡片は全体の約$\frac{1}{8}$程で、破片の一辺は鋭く研磨されており、所謂鏡片加工の一例である。

また、中代遺跡は沖積平野の微高地にあり、立地的に特異な遺跡である。弥生後期を主体とし、土師器・須恵器を出土するというが、詳細は不明である。

古墳時代

古墳時代の集落址では、石神原遺跡に古式土師器の一群があり、住居址に伴うものと考えられている[註6]。その他、土師器・須恵器を出土する遺跡は点々と存在するが、的確に把握されたものはない。

古墳時代の遺跡は古墳（群）が圧倒的に多く、一大群集地を形成している。古式のものは少なく、後期に属するものが多い。

熊本駅の北西の花岡山に一群がある。花岡山(標高133m）の山頂から東側斜面にかけて、7基の箱式石棺群が知られている。3号石棺の近くから、石栓をした土師器壺が出土し、中には勾玉(2)・ガラス玉(22)・赤色ガラス玉(1)・碧玉製管玉(1)が収められていた[註9]。7号石棺[註10]は昭和43年年、富田紘一・坂本経昌・島津義昭氏によって調査され、2体の人骨を出土している。

花岡山から東南に派生する万日山にも数基の古墳があったが、明治・大正・昭和にかけて破壊されたものが多い。その中で、昭和36年、乙益重隆氏によって調査された万日山古墳[註11]は実態が明確である。直径約18m、高さ約4mの円墳で、切石による整美な横穴式石室である。鉄刀

片(2)・鉄鏃(2)・金環(1)・須恵器坏片(1)・脚付壺(1)等が出土し、７世紀前半の年代が与えられている。

花岡山の東南端の丘陵・北岡神社境内に、北岡神社境内古墳[註12]と北岡横穴群[註13]がある。北岡神社境内古墳は、明治25年に発見され、大正11年に再調査された。３区に区分された特殊な構造の石棺を有し、鳥文鏡(1)・勾玉(1)・鉄器・人骨２体が出土している。北岡横穴群は、北岡神社の南側崖面にあり、明治時代に金環・勾玉・鉄鏃類を出土したという。すでに消滅して現存しない。

高橋町の一帯に古墳の一群がある。二軒小屋古墳・高坊古墳・小松山古墳群・二本松古墳群・堂の園古墳・皆白古墳群が一連の山麓線にあり、高橋稲荷の鎮座する城山には城山古墳群・高橋稲荷山石棺群がある。これらの古墳は戦後、とくに果樹園造成等で破壊消滅したものが多い。

二軒小屋古墳[註14]はもと２基あったというが、現存するのは１基である。円墳で直径約15ｍ、高さ約５ｍ。全長約8.5ｍ、玄室の奥行４ｍ、幅3.9ｍの横穴式石室が開口している。安山岩の割石・自然石で構築され、奥壁に沿って石屋形がある。古くから開口し、遺物等は知られていない。

高坊古墳は破壊[註15]が著しく、横穴式石室の一部が残されているにすぎない。

小松山古墳群[註16]は円墳（１号墳）と数基の箱式石棺から構成されるが、昭和41年に果樹園造成で消滅した。１号墳は直径約15ｍの円墳で、内部主体は横穴式石室である。玄室は方形プランで、長い羨道がつく。調査時、すでに大きな破壊を受けていたが、管玉・須恵器等が出土し、築造の時期は６世紀初頭とされている。２号石棺は昭和41年に果樹園造成中に出土し、長辺の両側壁を小口積にした石棺であることが確認されている。

二本松古墳群は円墳５基と箱式石棺４基からなる。円墳はかなりの急斜面に築かれ、直径が10ｍ前後の小型の古墳である。第１・２号墳の内部主体は横穴式石室であったことが確認されているが、昭和41年の果樹園造成によって消滅した。

堂の園古墳[註18]は、昭和42年、果樹園造成中に発見され、小松山２号石棺と同様な小口積の箱式石棺が確認され、鉄剣(1)が出土している。また、この近くから、桃畑の追肥中、須恵器等が出土し、熊本市教育委員会による試掘が実施されている。試掘の結果、土師器・須恵器・鉄器等が出土した[註19]。遺構は確認されていないが、出土品の組合せは古墳の副葬品に類似し、すでに破壊された古墳が存在した可能性が大きい。

皆代古墳群[註20]は、現在は半壊状態の横穴式石室が１基遺存するにすぎないが、乙益重隆氏によれば、昭和34年頃までは数基の円墳が群集していたという。

城山は最高点50.3ｍで、金峰山南麓と城山の間を坪井川が流れ、独立丘稜となっている。この城山には２箇所の頂部があり、東を「城山」(50.3ｍ)、西を「ときの声」(46ｍ）と呼んでいる。この丘陵の城山に城山古墳群、ときの声に高橋稲荷山石棺群がある。日本五大稲荷として著名

な高橋稲荷は、ときの声の西斜面に位置する。

城山古墳群[註21]は一の塚・二の塚・三の塚の３基の円墳からなる。一の塚は直径約40ｍ、高さ5.6ｍの円墳で、内部主体等は不明である。この地域で最大級の古墳である。二の塚は墳丘の周囲が削られているが、現存直径17ｍ、高さ2.9ｍを測る。大正時代に発掘されたが、詳細は不明である。三の塚も墳丘はかなり削られ、上部の壊れた横穴式石室が残る。割石小口積、単室の横穴式石室で、奥壁に沿って石屋形を設ける。玄室のプランはほぼ方形で、金環(2)・直刀片・馬具？片が熊本市立博物館に収蔵されている。

高橋稲荷山石棺群は、ときの声に点在するが、現在はほとんど残っていない。昭和37年～38年、熊本市水道局の上水道配水池建設でも数基の箱式石棺が出土したという。また、高橋稲荷神社の境内の工事でも石棺が破壊されている。現在、裏山の遊歩道横の崖面に半壊した箱式石棺が１基残っているにすぎない。ただ注目すべきは、高橋稲荷神社付近の箱式石棺からの出土品として、内行花文鏡・滑石製勾玉が熊本大学資料館に保管されている。

高城山・楢崎山の周辺にも古墳の一群がある。円墳23基、箱式石棺17基からなる。千金甲・高城山・楢崎山の３支群に分かれている。

これらのうち、千金甲古墳群[註22]については、京都大学の調査・報告[註23]以来、著名な装飾古墳として知られている。高位のものから第１～５号墳と呼ぶが、京大報告では第１号を甲号、第３号を乙号、その他を丙号として紹介してある。第１号は円墳、内部主体は安山岩の割石小口積の横穴式石室で、凝灰岩の板石で石障をめぐらす。この石障の内壁に著名な装飾文（同心円・靭等）が施されている。羨道部は埋没しているが、玄室のプランは方形で、単室である。３号墳（京大報告の乙号）も円墳で、全長約6.2ｍの横穴式石室を内部主体とする。玄室のプランは逆梯形で、奥壁に沿って石屋形を設ける。１号墳と同じく装飾古墳である。２号墳は１号墳と３号墳の間に位置する円墳で、内部主体は割石小口積の横穴式石室。石室全長5.7ｍ、玄室の奥行3.4ｍ、幅3.5ｍの方形プランで、奥壁に沿って石屋形を設ける。４号墳は石棺で、京大報告には確認されているが、現在は見当らない。５号墳は墳丘が失われ、横穴式石室が露呈しかけている。安山岩の割石と塊石を併用した石室で、玄室奥行2.5ｍ、幅2.1ｍ、羨道は埋没している。奥壁に沿って石屋形がある。

千金甲古墳群の東方に高城山古墳群[註24]がある。円墳９基と箱式石棺13基が確認されたが、破壊消滅したものが多い。工事中に発見、調査された３号墳は、直径約15ｍ、高さ２ｍ以上あったものと思われ、舟形石棺、箱式石棺各１基を埋蔵していた。舟形石棺は全長2.37ｍ、壮年前期の女性骨１体、方格規矩鏡・刀子・繊維類が副葬されていた。箱式石棺は舟形石棺から約60㎝はなれ、ブルドーザーによる破壊が著しく、男性骨１体分がわずかに遺存していたにすぎない。その他の古墳については充分な調査が行われておらず、消滅したものも多い。

高城山古墳群のさらに東に楢崎山古墳群[註25]がある。箱式石棺３基と円墳10基が確認され、箱式

石棺1基[註26]と円墳2基が発掘調査された。

1号箱式石棺は昭和43年調査。粉状になった人骨片の他、内反りの太刀(1)・鉄剣(2)・刀子(が出土している。

円墳については同じく昭和43年、乙益重隆氏等によって5号・7号の発掘と他の古墳の測量等が実施された。5号墳は直径約17m、高さ約2.5m。石室の上部は破壊されているが、隅丸方形プランの横穴式石室（単室）を内部主体とする。遺物として多数の鉄器・鉄製品と玉類がある。7号墳は墳丘の一部を削られているが、直径約15m、高さ4～5mの円墳で、横穴式石室を内部主体とする。割石小口積の石室は、上部を破壊されているが、奥壁に沿って石屋形が遺存する。すでに盗掘を受けていたが、玄室から人骨の他、金環(1)・須恵器片(4)が出土している。

金峰山の南西麓にも2群の石棺群が知られている。いずれも丘陵先端近くに立地する。

西竹洞石棺群[註27]は箱式石棺2基からなる。昭和43年、熊本市立博物館によって調査されている。

小林石棺群[註28]は石蓋土壙墓1基（1号）と、箱式石棺3基からなる。1号（石蓋土壙墓）は土壙の長さ1.15m、幅40cm、蓋石は数枚の板石を使用している。2号・3号石棺は一部を破壊されているが、2号石棺から鉄剣(1)、3号石棺から鉄剣(1)、刀子(1)が出土している。

奈良・平安時代

この時代の遺跡は数こそ少ないが、古代史上に重要な位置を占めるものである。

飽田国府は、熊本市二本木町に比定されている。塔の心礎や布目瓦、土師器・須恵器等が出土し、古府中・在庁邸・車屋敷・宮寺等の地名が残っている。松本雅明氏により数次の調査が実施されているが、全容は明らかではない。肥後の国府は三時期が考えられており、松本氏によれば、当初益城郡（益城国府）におかれていたが、8世紀半ばに託麻郡（託麻国府）に移され、さらに9世紀半ばに洪水によって飽田郡（飽田国府）に移されたとされている[註29]。これに対しては木下良氏の反論[註30]があり、託麻国府→益城国府→飽田国府の変遷を提唱された。

池辺寺跡は、金峰山の東南麓に所在する古代寺院跡である。「続日本紀」によると、和銅年間(708～714)、肥後の国司に道君首名という人がいて、味生池という灌漑用水池を開削したという。この池の近くにあったところから池辺寺の名が生まれたといわれる。味生の池は加藤清正によって埋立られ、水田化され現存しない。

従来、池辺寺跡は、池上町の妙観山の尾根付近と考えられていたが、これに疑問をいだき、新説を提出したのは松本雅明氏である。松本氏は、従来誤読の多かった「金子塔」の解読に成功、さらに「柿ノ木ビラ」(別称「堂床」）付近からの布目瓦出土に着目し、初期池辺寺の一端を明らかにされた[註31]。

さらに乙益重隆氏は、松本説を踏まえて、「百塚」地点など周辺遺跡の調査成果を提示し、「百塚」地点を初期池辺寺の根本中堂と比定し、「堂床」には池辺寺に付属した三重塔を中心とした遺構があったもの[註32]としている。

これらを総合すると、初期池辺寺は、平安時代[註33]、「平」の集落付近の自然地形を利用して建立された山岳伽藍配置の寺院で、室町初期以降前記の妙観山付近に移ったものと考えられる。

この地域の数少ない生産遺跡に、高橋町・石阿弥陀須恵器窯跡[註34]がある。正確な調査は行われていないが、甕・壺・高坏等が出土しており、奈良時代と考えられている。

中　　世

中世遺跡は顕著ではない。発掘調査が実施されたのは高橋南貝塚が最初で、今後の課題となろう。

中世城[註35]として、前記「ときの声」にある上代城址、楢崎山の中腹に楢崎城址、松尾町に上松尾城址、平山に俗に「城山」と呼ばれる城址がある。

また、周辺の中世石造物としては次のようなものがある。

坪井川・井芹川の合流点の東に独立丘陵の独鈷山(118m）がある。この独鈷山の南斜面に穴薬師と呼ばれる洞仏[註36]がある。薬師如来座像の石仏4体がある。このうちの2体は鎌倉時代の刻銘を有し、他の2体は江戸時代の模刻である。

向って右端のものには

　元応元年九月十五日　法印　豪明生年八十一

向って左端のものに

　正中二　乙丑三月一日　安置之　豪斉　四十五

とある。元応元年は1319年、正中二年は1325年である。これが、高橋南貝塚の最も近くに所在する最古の石造物である。

初期池辺寺については既に述べたが、この近くにある金子塔[註37]は建武4年（1318年）のものである。高橋南貝塚の東北方に近接する聖徳寺跡には室町・戦国期と考えられる五輪塔の残欠、天正15年（1588年）銘の板碑がある。これに隣接する民家の庭にも五輪塔の残欠や文明11年（1480年）の板碑がある。

中高橋の民家の庭にも五輪塔の残欠が数基分あり、中には鎌倉～室町初期にさかのぼるものもあるようである。（松本）

註1．今村克彦「高橋貝塚」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註2．安達寿男『高梁史話』　高橋町公民館、昭和28年。

註3．今回の高橋南貝塚の発掘でも、縄文土器・磨製石斧が出土し、土器はすべて縄文時代後期前半の特色を備えている。

註4．東光彦「千原台の遺跡について」『熊本史学』第5号、昭和28年。
東光彦「千原台遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註5．平野清香『熊本市史』　熊本市役所、昭和7年。
東光彦「石神原遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註６．東光彦「石神原遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註７．東光彦「戸坂遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註８．乙益重隆「戸坂町北原出土の内行花文鏡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註９．乙益重隆・富田紘一「花岡山箱式石棺群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註10．富田紘一「花岡山頂７号箱式石棺」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註11．乙益重隆「熊本市万日山古墳」『考古学集刊』第３巻第３号、昭和42年。

註12．梅原末治・古賀徳義・下林繁夫「熊本県下にて発掘せられたる主要なる古墳の調査」『 熊本県史跡名勝天然記念物調査報告第一冊』、大正14年。

註13．松本健郎「熊本県横穴地名表」『熊本史学』第48号、昭和51年。

註14．上野辰男「二軒小屋古墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註15．今村克彦「高坊古墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註16．佐藤伸二「小松山１号墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。
原口長之「小松山２号石棺」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註17．今村克彦「二本松古墳群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註18．田中好美「堂の園１号墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註19．富田紘一「上高橋堂園遺跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註20．乙益重隆「皆白古墳」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註21．東光彦「城山古墳群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註22．原口長之「千金甲古墳群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註23．梅原末治・浜田耕作「肥後に於ける装飾ある古墳及び横穴」『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第一冊、大正６年。

註24．原口長之「高城山遺跡群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註25．乙益重隆・原口長之他「楢崎山古墳群の調査」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註26．富田紘一「楢崎山１号箱式石棺」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註27．東光彦「西竹洞箱式石棺」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註28．東光彦・富田紘一「小林箱式石棺群」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註29．松本雅明「益城国府」『城南町史』所収、昭和40年。
松本雅明「飽田国府」『熊本市南部地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和51年。

註30．木下良「肥後国府の変遷について」『古代文化』27巻９号、昭和50年。

註31．松本雅明「池辺寺考」『『熊本史学』第17号、昭和34年。

註32．乙益重隆「池辺寺廃寺址」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註33．池辺寺の創建に関して、松本氏は註31論文で「11世紀」とし、乙益氏は註30論文で「平安前期」としている。

註34. 今村克彦「石阿弥陀須恵器窯跡」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註35. 熊本の中世城については、昭和50年度より熊本県教育委員会により「中世城調査」が実施されており、その成果については本年度出版の予定である。また、すでに出版されているものに次のものがある。鈴木喬編『熊本の城』熊本日日新聞社、昭和50年。

註36. 乙益重隆「高野辺田の洞仏」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、熊本市教育委員会、昭和44年。

註37. 註31に同じ。

〔付　記〕

本稿脱稿後、御坊山遺跡（第3図12）から弥生前期の甕棺群が出土していることを知った。また、高橋南貝塚の上流地点の河川改修により、2地点から縄文～中世の遺物が出土している。1つは合流点の坪井川右岸、高橋東神社の南側で、改修工事の排土中より縄文後期の土器片多数と磨製石剣が昭和52年7月に福田正文氏により採集されている。もう1つの地点は、合流点から約200m上流の井芹川左岸で、護岸工事用の掘削溝の断面に包含層が露出した。昭和53年1月、多良木高校教諭・橋本康夫氏により発見され、熊本市文化課・熊本県文化課で予備調査を行い、近く調査予定である。出土土器は縄文後期～中世におよぶ。

第Ⅲ章　調　　査

1．調査の概要（第4図）

発掘調査に着手するにあたり、調査地の地形に応じてグリットを設定した（第4図）。グリットの大きさは、調査対象地区がかなりの面積になるため5m方眼とした。とりあえず調査地の東側に、南北に4列、東西に8列を設定し、南北列は北から南へA～D、東西は東から西へ1～8とし、地区表示はA－1、A－2の如くした。必要に応じて西側へ拡大する予定であったが、数地点を試掘の結果、少量の遺物を出土したのみであったので、西側への拡大は止めた。

設定したグリットのうち、A－7・A－8・B－7・B－8・C－6・C－7・C－8・D－8の各区は掘開しなかった。

遺物等の表示は、上記の地区表示に層位を加えてA－1－9（A－1区の9層）の如く表示し、遺跡略号TSSを前に付した。　　例　TSS　A－1－9

調査の結果、中世の貝塚としては大規模な貝層が検出され、その貝層（9層）と貝層の直下の黒褐色土（10層）から多量の遺物を出土した。土師器の皿・坏が最も多く、青磁・白磁等の輸入陶磁器も多い。また、低湿地にあるため木製品類も良好な状態で出土した。

遺構としては、石列・杭列を検出したのみで、顕著な遺構の検出はなかった。（松本）

2．貝層と層位（第5図）

調査地の層位

発掘調査前の数度の踏査によって、貝層は地表下3m以下位にあることが想定された。そこで、発掘調査に先だち、機械を導入して、上層を2～3m排土した。[註1] したがって、調査時の層位は、すでに上部を削平された後のものである。

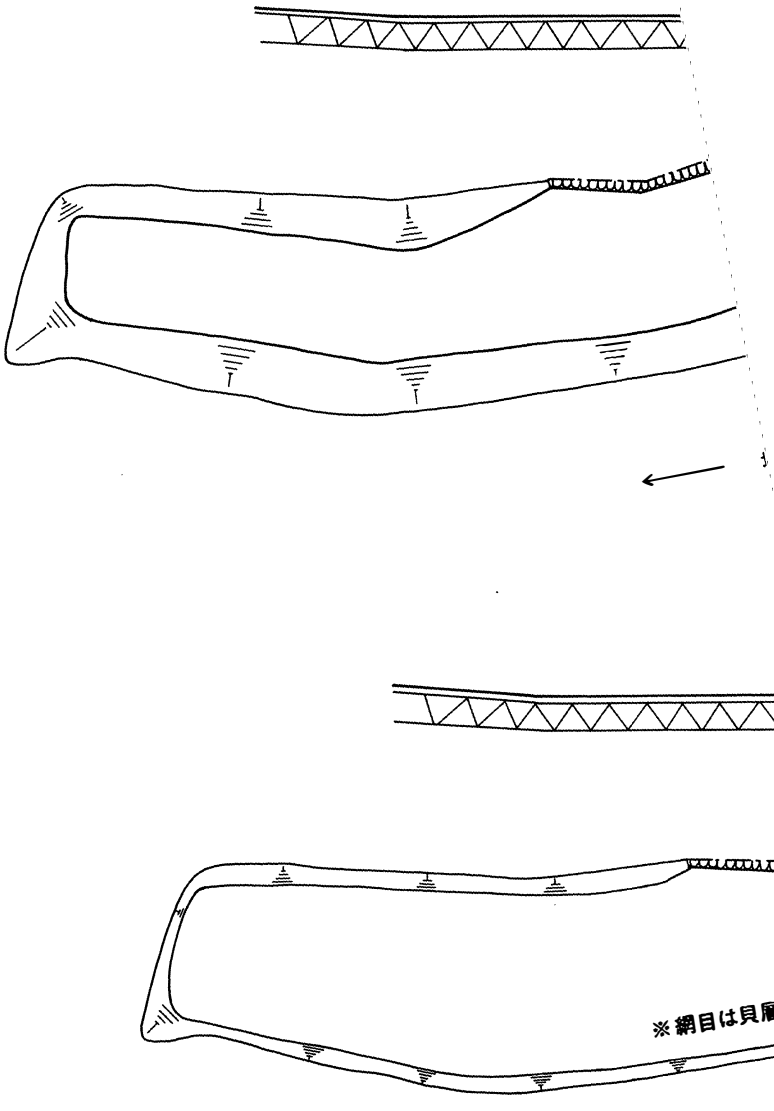
調査の初期の段階で、比較的層序のはっきりしたA－1区東壁の層位を基本として、上から下に1・2……11層とした。この場合、9層が貝層もしくは混土貝層である。10層は有機質を含む黒褐色土で、11層は青灰色の有明粘土層となる。

大部分の調査区は、8層まで、部分的には9層上面が露出するまで排土が行われていた。

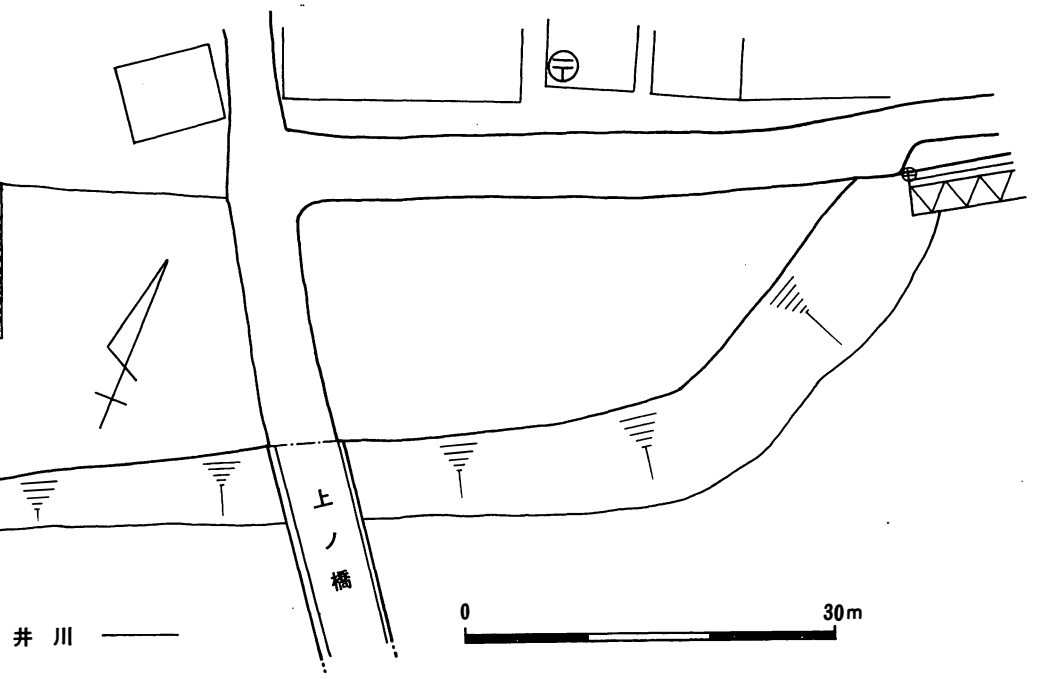
遺物を包含するのは9層（貝層もしくは混土貝層）と10層（黒褐色土）で、11層（有明粘土層）は無遺物層である。また、8層（褐色土）にもわずかに遺物が含まれるが、後世の埋立、撹乱があり、中世と近世の遺物が混在する場合が多かった。

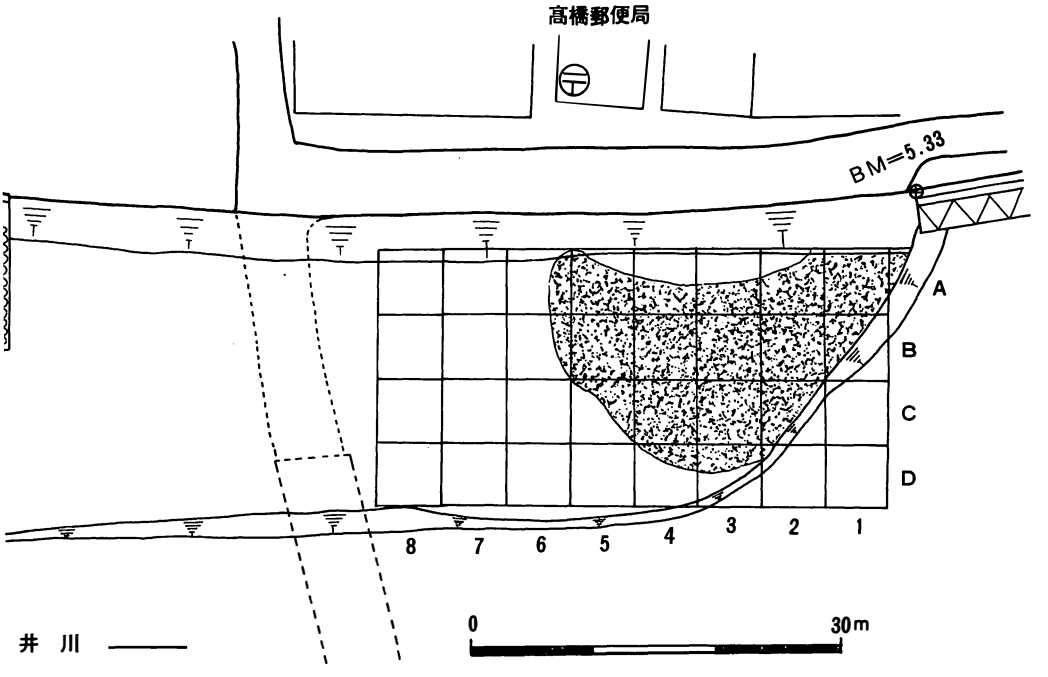
貝　層

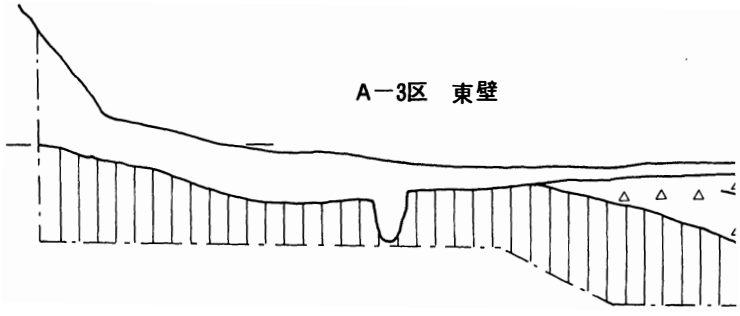
貝層の範囲は第4図に示すとおり、三ケ月形を呈している。東西の最大幅は約28m、南北は

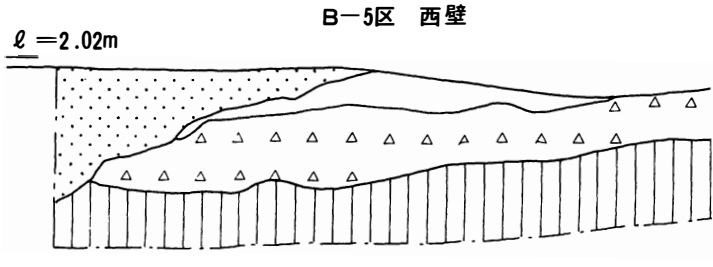


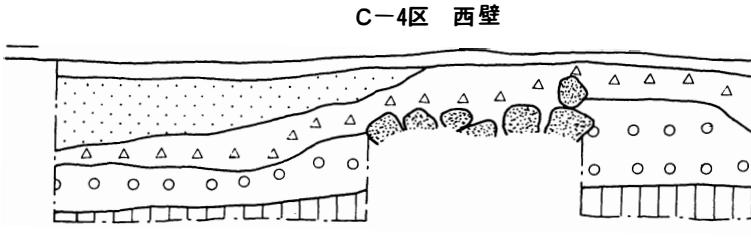
第4図　調査前地形図(上)と調査区(下)

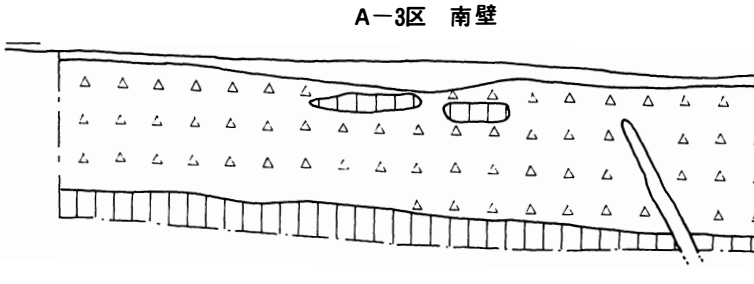

上ノ橋
井 川
0
30m


高橋郵便局
BM=5.33
A
B
C
D
8
7
6
5
4
3
2
1
井 川
0
30m

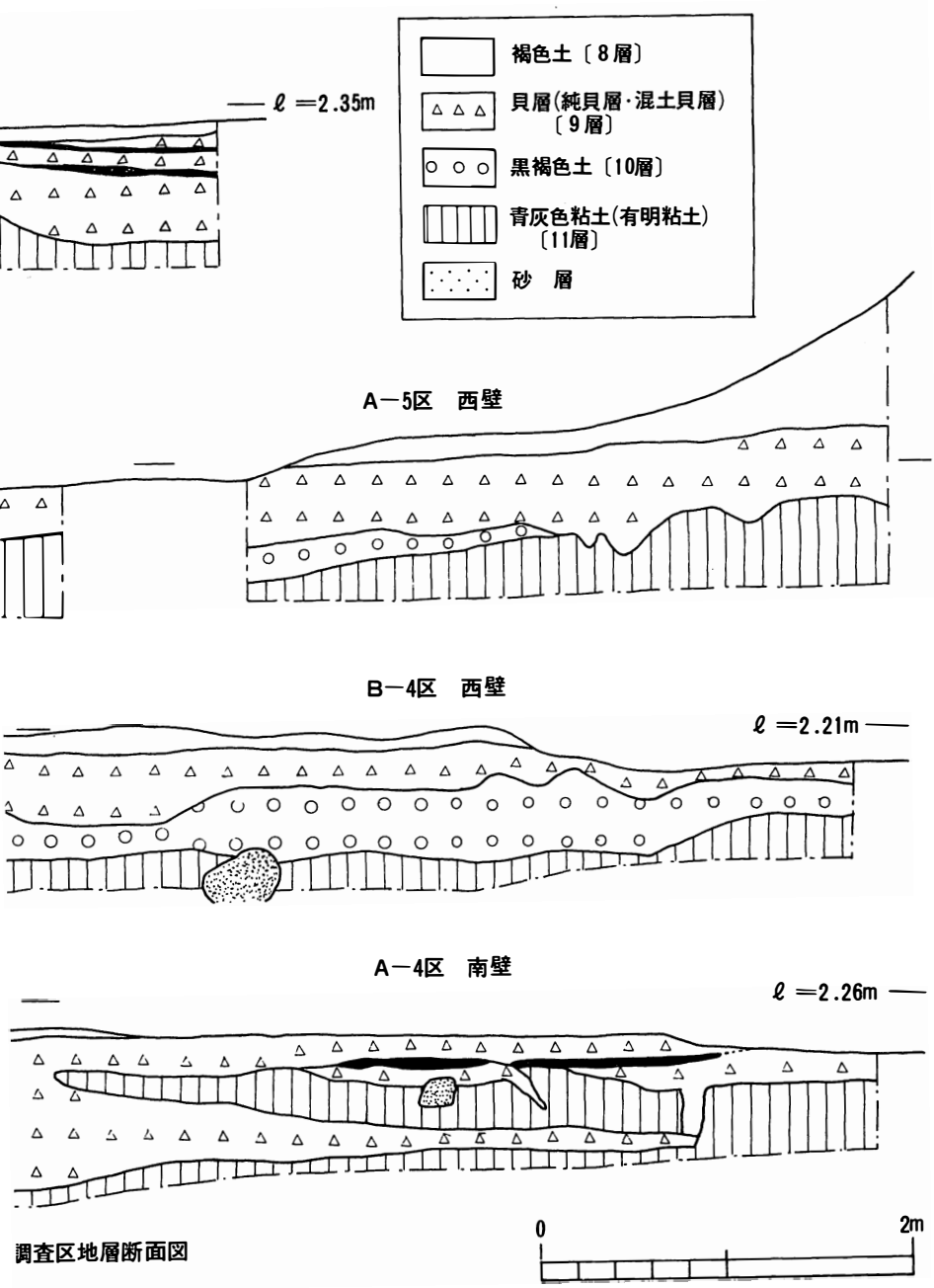








第５図


褐色土〔8層〕
貝層(純貝層・混土貝層)〔9層〕
黒褐色土〔10層〕
青灰色粘土(有明粘土)〔11層〕
砂　層
ℓ =2.35m
A－5区　西壁
B－4区　西壁
ℓ =2.21m
A－4区　南壁
ℓ =2.26m
0
2m

調査区地層断面図

約14.5ｍを測る。この範囲は連続して貝層が認められた。

貝層（９層）の厚さは、薄い所で10㎝、厚い所では約80㎝に達する。ほとんどは混土貝層であるが、Ｂ―３・Ｃ―３・Ｂ―４・Ｂ―５区においては、まったく土を含まない純貝層がみられた。

貝層は全体的に北から南にかけてゆるやかに傾斜する。このことと、前述の貝層の広がりを考えるとき、貝類が遺棄されたのは、主に北側からであったと推測される。

貝類の組成

調査にあたって、調査中目にふれる異なる種の採集と、４カ所のブロックサンプリングを実施した。ブロックサンプリングは30㎝立方で行い、２㎜目のふるいで水洗し、土器類・獣魚骨その他の遺物とを選別した後、同定を依頼するため、九州大学付属天草臨海実験所に送付した。４カ所のサンプルのうち１カ所は保存資料とし、Ｂ―２西壁・Ｂ―５南壁・Ｃ―３東壁の３サンプルを使用した。

同定結果については菊池泰二博士の報文を収録しているので参照されたい。ここでは、その報文をもとに、概要を記す。

上記のように、任意に採集したものと、３カ所のブロックサンプリングで確認された貝類は42種の多きにおよぶ。

二枚貝

ハイガイ・サルボウ・ハマグリ・カガミガイ・マガキ・シオフキ・ナミマガシワ・イタボガキ・オキシジミ・フジナミ・ウネナシトマヤガイ・アオカリガネエガイ・アゲマキ・イタヤガイ・ヒオウギ

巻　貝

イボウミニナ・カワアイ・フトヘナタリ・ヘナタリ・シマヘナタリ・スガイ・コシダカガンガラ・イボニシ・イシダタミ・アカニシ・テングニシ・ハナツメタ・ツメタガイ・バイ・ゴマフタマガイ・ウミニナ・イボキサゴ・ムギガイ・アラムシロ・アマガイ・オカミミガイ・クリイロコミミガイ・クリイロカワザンショウ・ワカウラツボ・カワグチツボ・マルウズラタマキビ・タマキビ

ブロックサンプルにより計数された総個数は、Ｂ―２サンプルで532個、Ｂ―５サンプルは1,112個、Ｃ―３サンプルは641個である。このうち二枚貝は左殻・右殻・双殻の合計になっているので、個体計数には左・右殻のうちいずれか多いものと、双殻のものとの合計数を用いた。その結果は第２・３表のとおりである。

この結果[註2]をみると、Ｂ―２・Ｂ―５区ではハイガイが多く、Ｃ―３区ではマガキが約半数を占め多い。全体的にはハイガイ・マガキが主体を占め、シオフキも量は多くないが全体的に検出される。Ｂ―５・Ｃ―３区においては小型の巻貝クリイロカワザンショウが多いのも特徴的

第2表　ブロックサンプル貝類個体数

	B－2	%	B－5	%	C－3	%
ハイガイ	136	33.74	342	48.85	72	13.06
サルボウ	2		0		2	
ハマグリ	23	5.70	14	2.00	8	
カガミガイ	2		0		0	
マガキ	84	20.84	179	25.57	266	48.27
シオフキ	30	7.44	74	10.57	27	4.90
ナミマガシワ	2		4		0	
オキシジミ	0		3		1	
フジナミ	0		0		1	
ウネナシトマヤガイ	1		7		3	
アオカリガネエガイ	1		0		3	
イタボガキ	0		1		0	
イボウミニナ	31	7.69	1		12	2.17
カワアイ	9		4		3	
フトヘナタリ	44	10.91	3		12	2.17
ヘナタリ	1		0		0	
シマヘナタリ	0		1		0	
スガイ	7		1		9	
コシダカガンガラ	3		0		0	
イボニシ	1		0		0	
イシダタミ	1		0		2	
アカニシ	1		0		0	
ハナツメタ	1		0		0	
ゴマフタマガイ	1		0		0	
ウミニナ	0		1		0	
イボキサゴ	16	3.97	3		6	
ムギガイ	1		0		0	
アラムシロ	3		0		0	
アマガイ	1		0		0	
オカミミガイ	1		6		3	
クリイロコミミガイ	0		7		38	6.89
クリイロカワザンショウ	0		44	6.28	71	12.88
ワカウラツボ	0		5		6	
カワグチツボ	0		0		2	
マルウズラタマキビ	0		0		3	
タマキビ	0		0		1	
計	403		700		551	

第3表　ブロックサンプル貝類構成比

B—2サンプル

ハイガイ (33.74)	マガキ (20.84)	シオフキ (7.44)	ハマグリ (5.70)	イボウミニナ (7.69)	フトヘナタリ (10.91)	その他

B—5サンプル

ハイガイ (48.85)	マガキ (25.57)	シオフキ (10.57)	クリイロカワザンショウ (6.28)	その他

C—3サンプル

ハイガイ (13.6)	マガキ (48.27)	シオフキ (4.90)	クリイロカワザンショウ (12.88)	クリイロコミミガイ (6.89)	その他

である。

ブロックサンプリングはいずれも30cm立方で行っているが、総個数は532（B—2）・1,112（B—5）・641（C—3）とばらつきがある。これは、サンプリング貝層の性格、すなわち純貝層か混土貝層かに起因するものである。B—5サンプルは純貝層で、B—2・C—3サンプルは混土貝層のサンプルである。

貝類の遺存状態は、巻貝類は比較的良好で、二枚貝の方が悪い。ハマグリ・ハイガイのように殻壁が厚いものは良く残っているが、マガキ・シオフキは破砕されたものが多い。また、大型の巻貝のいくつかには、殻の体層あるいは殻頂部を意識的に打ち欠き、身をとり出した痕跡がうかがえるものもある。（松本）

註1．この段階での指導は、文化課参事・緒方勉が行った。

註2．調査現場での観察、すなわち「見た目」とほぼ同じ結果がでているが、小形の巻貝の数などは水洗後の方が多く感じられる。現地での観察では、A—2・B—2・B—3区付近はハイガイ・カキ層、B—4・B—5区を中心としてC—4・C—5区にかけてはハイガイ・シオフキ層、C—3区付近はカキ層と見られた。また、サンプルに現われない事項として、D—2・D—3区に大型のハマグリが多かかったことを付記する。

3．遺　構

今回の調査は貝塚部分が主体であり、顕著な遺構の検出はない。検出した遺構は石列と杭列である。

(1) **石　列**（図版６）

石列はＤ－３区からＣ－３・Ｃ－４・Ｃ－５区にかけて検出された。検出した部分は約14ｍにおよぶ。幅は広狭があり一定しないが、狭い所で70㎝、広い所では1.8ｍを測る。人頭大の自然礫を石塁状に積んでいるが、積み方は雑である。高さは２～３段で40～50㎝を測る。この石列は有明粘土層（11層）と黒褐色土（10層）の上に築かれており、石列の土を貝層が覆っている。このことから、この石列の築成年代は、貝塚形成直前と考えられる。また、石列より南側に砂層の堆積がみられるところから、河岸の堤防的な働きをしていたと考えられる。この石列は、調査中の洪水により崩壊あるいは土砂に埋没し、実測できなかった。

(2) **杭　列**（図版６）

各区に点在して杭列が検出された。比較的多いのは　Ａ－１・Ａ－２・Ａ－３・Ａ－４・Ｂ－４区に各４本、Ｂ－２区に７本があり、総計38本を数える。

杭は加工した多面体（24本）のものと、丸太杭（14本）がある。多面体のものは径が20㎝前後と大きく、丸太杭は直径10㎝未満のものである。ほとんどは８層ないしは９層に上端があり、９・10層を貫き11層（有明粘土層）に達している。多面体のもの、丸太杭とも先端は削られ尖り気味である。

これらの杭列に一定の配列は見られず、性格については不明である。また、上端は欠失するものが多く、打ち込み面が不明であるため、年代を確定することもできない。８層より上の土は、数次に亘って埋立てられたと考えられるので、どの時点での遺構であるのか明らかでない。（松本）

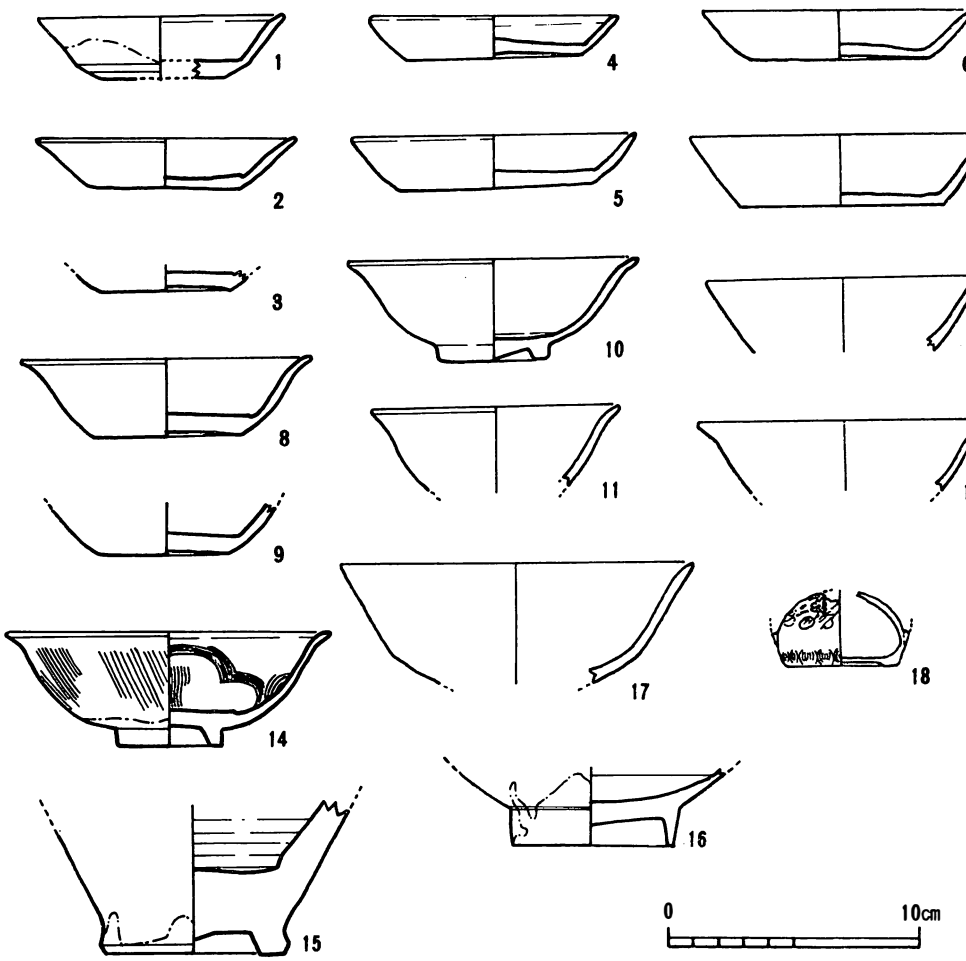
4．遺　物

(1) **白　磁**（第６図）

皿・台付皿・壺・碗・水注・合子が出土した。以下器形別に記述する。

皿　大小深浅、口縁が直延するものと外反するものがある。皿類のすべてがいわゆる口禿である。

１は破片からの復原であるが、口径9.9㎝、器高2.5㎝、口縁はわずかに外反する。体部下位は篦削り調整。外面の体部中位以下は釉がかからない。胎土は灰色味の白色、色調は乳白色を呈する。２は口径10.4㎝、器高2.0㎝。体部から口縁端にかけて外反し、見込みの外周はわずか



第6図　白磁実測図

に窪む。胎土は白色で、色調は乳白色を呈する。釉のかけ方がやや雑で、むらがある。底部にもうすく釉をかける。口禿である。また内外面に細かい貫入が多い。3は底部の約$\frac{1}{3}$大の破片。体部下端は篦削りされ、底はわずかにあげ底となる。底部は無釉。胎土は白色。4は完形品で口径10.0cm、器高1.6～1.8cm。やや雑な整形で、体部から口縁端にかけて直延する。底部はあげ底。口禿の他ほぼ全面に乳白色の釉をかけるが、底部は一部無釉。5は口径11.5cm。器高2.1cm。体部から底部にかけては丸味をもち、体部は直延する。胎土は白色、口禿の他全面に釉がかかる。6は5と類似するが、体部と底部の境は稜を成し、底はわずかにあげ底気味となる。体部から口縁端にかけて直延し、先端は尖る。胎土は褐色がかった白色で、色調は乳白色、整形・施釉ともやや雑。口禿の他全面に釉がかかる。口径10.7cm、器高1.9～2.0cm。7は全体の約$\frac{1}{3}$の破片から復原実測。口径12.0cm、器高2.8cmを測る。口径・器高ともに大きい。底部は平底で、体部から口縁にかけて直延し、先端は丸味を帯びる。見込みの外周はU字状に窪む。胎

土は白色、色調は乳白色。口禿の他全面に施釉。

8は深い皿で、体部は内弯気味に立ち上り反転して先端は外反する。口径11.55cm、器高3.05cm。見込みの外周は窪み、底はわずかにあげ底となる。胎土は白色、色調は乳白色で、口禿の他全面に施釉。底部は篦切り痕が認められ、その上にうすく施釉。9は底部の破片。体部はわずかに内弯気味に丸味を帯びる。体部外面下端から底部にかけては無釉。胎土はわずかに灰色がかった白色、色調は乳白色を呈する。

10は高台付の皿で口径11.75cm、器高4.0cm。体部はわずかに内弯気味に立ち上り、反転して口縁は外反する。体部内面と見込みは一条の浅い沈線で画される。高台は削り出しで、安定感のある形をしている。胎土は白色、口禿を除き全面に施釉され、色調は乳白色を呈する。

11・12・13は体部以上の破片で、底部を欠失する。11はやや口径が小さく、10cmを測る。体部はわずかに内弯気味、口縁下で反転して外反する。胎土は白色、色調は乳白色を呈する。口禿である。9のような底部か、10のような高台付の可能性も考えられる。12は口径10.95cm。体部はわずかに屈曲したのち直延する。胎土は白色で、色調は灰色がかった白色を呈する。10のような高台付か。13は口径11.8cm。体部はわずかに内弯したのち反転して外反する。8と同じ大きさ、形態であり、平底か。胎土白色、色調は乳白色を呈する。

14は口径13.0cm、器高4.5cm。台付皿というよりも台付鉢とするべきか。全体の約$\frac{1}{3}$の破片。体部は内弯気味に立上り、口縁下で大きく外反する。高台は削り出しで体部下端から削り込む。高台の径4.2cm、高さ8mmを測り安定感がある。胎土は灰色、色調は緑がかった灰色を呈し光沢がある。体部内面及び外面に櫛描文を施す。

壺(15)　底部から体部下半の破片。底部径7.5cm。器壁厚く、底部中軸線上で2.8cm、体部折損面で1.0cmを測る。高台は削り出しで整形され、外方に張り出す安定した高台。胎土・色調ともに灰色がかった白色を呈する。内面にも釉がかかるが、高台の下半は無釉。全体にどっしりした重量感がある。四耳壺と考えられる。

碗　16は底部から体部下半の破片。高く器壁の薄い高台が付き、体部の器壁も薄い。高台の径6.4cm、高さ1.5cm。体部内面と見込、体部外面と高台は細い沈線で画される。胎土は白色、色調は黄褐色がかった白色。これに接合できる口縁部は見あたらないが、類例からみて、口縁部は外反するものと考えられる。

17は底部を欠失する。口径14.2cm。体部は中位よりやや下で屈曲し、口縁はわずかに外反する。

水注(18)　小型の水注で、約$\frac{1}{2}$の破片。底部は径4.8cm、わずかにあげ底となる。口縁部を欠くが、現在高3.0cm。器壁は薄く、体部の二面に把手を貼り付けているが、把手の上部は欠失している。体部上面には梅花を陽刻する。胎土は白色、色調は青味を帯びた白色を呈する。内面及び外面上部に墨汁が付着し、墨壺として利用されていたことが判る。

合子　細片で図示できないが、合子の蓋の破片が1点出土している。平面八角形を呈するものと考えられ、上面には鳳凰文が刻されている。青緑色味をおびた白色で、従来青白磁と称されていたものである。

(2) 青　磁

器形別にみると碗が圧倒的に多く、ついで皿、鉢が数点ある。

碗は鎬蓮弁を有するものをA類、平面的な蓮弁を表わしたものをB類、内外面に櫛描文を有するものをC類、見込みに画花文を有するものをD類、片切りの蓮弁を有するものをE類、無文のものをF類とする。

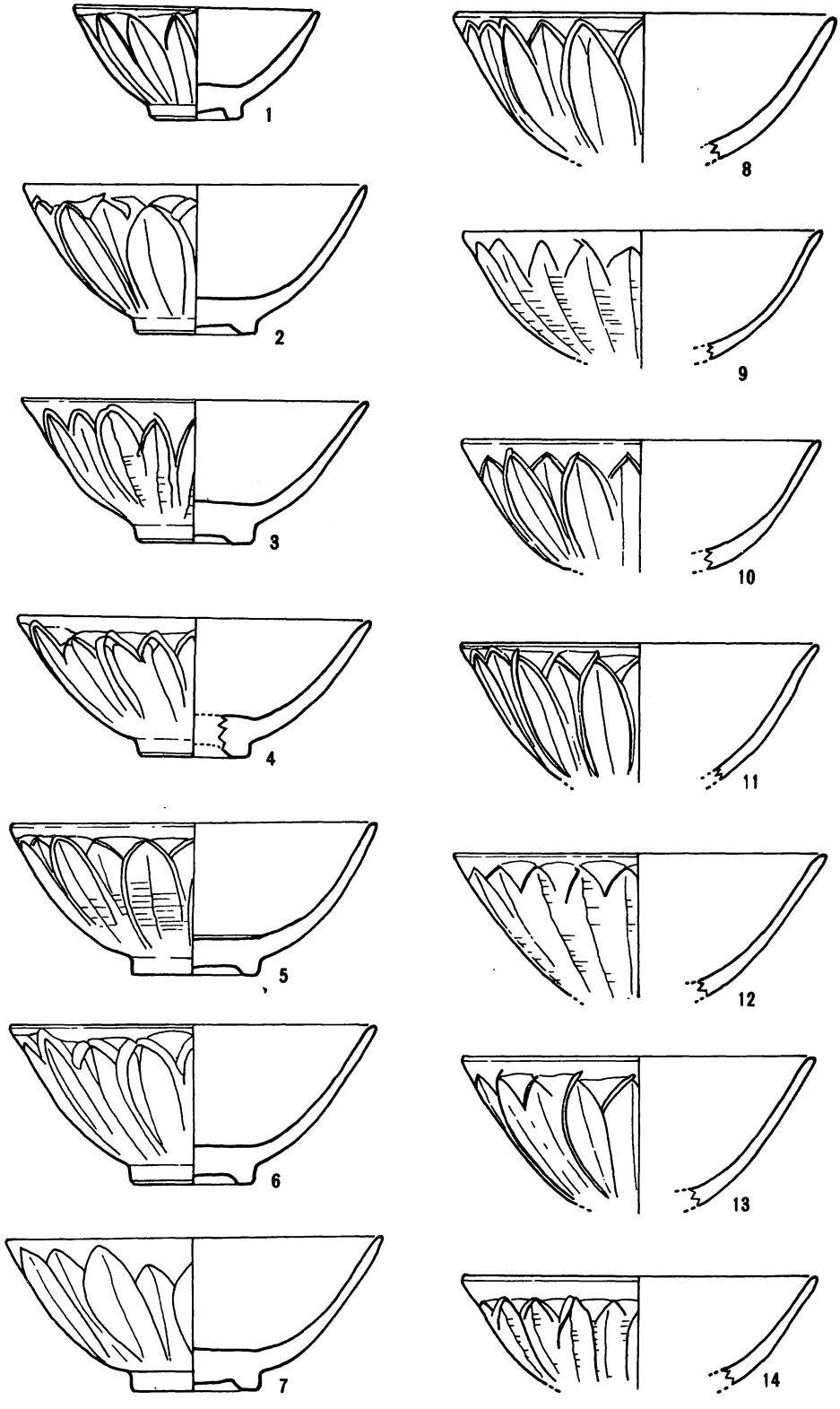
碗A類(第7図1～14、第8図15～18)　篦削りによって削り出された鎬蓮弁を有する碗で、内面は無文である。口径によって大小二種に細分できる。碗では圧倒的にこの類が多く、ついでF類、E類と続く。B・C・D類はきわめて稀である。

1は口径11.5cm、器高4.8cmの小型品。体部はわずかに丸みを帯びて外傾し、見込みと体部内面との境には軽い段をなす。高台は削り出しで径4.2cm、安定感のある高台である。蓮弁は彫りが鋭く、鎬も明瞭である。色調は粉青色を呈し、全体に造りの良い優品である。

2は口径14.4cm、器高6.6cm。体部はわずかに丸味をもち先端は直延する。高台は削り出しであるが、やや安定性に欠ける。幅広の複弁の鎬蓮弁で、彫りは鋭い。色調は光沢のある鶯色を呈する。造りの良い品である。

3は約$\frac{1}{3}$大の破片からの復原図。口径15.5cm、器高6.25cm。見込みと体部との間は明瞭な境界をなし、体部は中位よりわずかに下位でやや屈曲し、中位以上は直線的にのびる。高台は削り出しで整形され、底部は1.5cmと部厚く、安定している。鎬蓮弁は篦削りによる複弁で、部分的に横方向の篦削り痕が残る。胎土は灰色、光沢のある灰色がかった鶯色を呈する。

4は全体の$\frac{1}{2}$の破片。復原口径15.95cm、器高6.0cm。見込みと体部内面には明瞭な境を有し、体部はわずかに丸味をもって外傾する。高台は削り出しによって造られ、どっしりした安定感のある高台である。複弁の鎬蓮弁を有するが、その造作は雑である。胎土は灰色、色調は光沢のある鶯色を呈する。5も約$\frac{1}{2}$大の破片。復原口径16.5cm、器高6.6cmを測る。見込みと体部の境には浅い凹線をめぐらし、体部は内弯気味に立上る。高台は削り出しによって整形されるが、広く、低く安定している。複弁の鎬蓮弁を有するが、整形が丁寧で鋭い。また、横方向の篦削り痕が明瞭に残る。胎土は灰色、色調は鶯色で光沢がある。整形・発色とも良好な品である。6は約$\frac{1}{3}$大の破片であるが、全形を復原し得る。口径16.3cm、器高7.0cm。体部の屈曲は弱く、比較的直線的に外傾する。高台は削り出し整形で、径5.5cm。複弁の鎬蓮弁を有し、胎土は灰色、色調は光沢のある鶯色を呈する。胎土・色調とも2・4・5に類似する。7は口径16.7cm、器高6.8cm。見込みはほぼ水平で、弱い屈曲をもって体部に連なる。体部はわずかな丸みを帯び外傾する。高台は削り出しによる安定した高台で、やや外に張る。高台と体部との境はわずかに



第７図　青磁実測図

0　10cm

窪む。単弁の鎬蓮弁を有し、胎土は灰色、光沢のあるやや褐色味の鶯色を呈する。体部表面に砂粒が付着する。

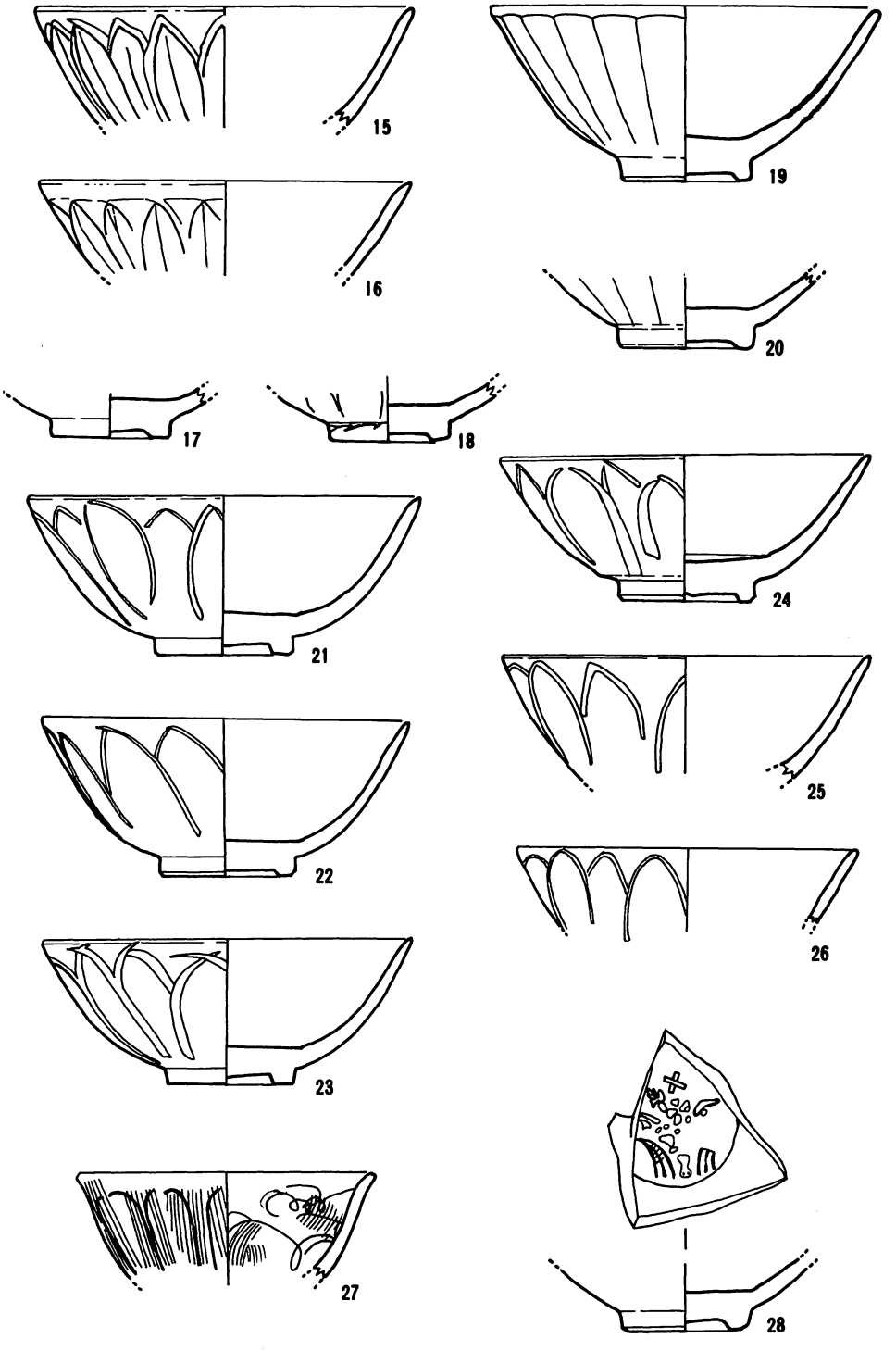
8～16は体部の破片である。8は約$\frac{1}{4}$大の破片で、復原口径17.1cm。体部は中位以下でわずかに丸味を帯び、中位以上は比較的直線的にのびる。複弁の蓮弁を有するが鎬はやや鈍い。胎土は灰色、明るい鶯色を呈し、わずかに光沢がある。9は復原口径16cm。体部は丸味をもち、口縁はわずかに外反する。蓮弁は単弁で、上部のみを表わし、鎬は鋭い。横方向の篦削り痕が明瞭である。色調は鶯色を呈し、体部内面には貫入がある。10は約$\frac{1}{3}$大の破片。復原口径16cm。体部中位以下は器壁が厚く、屈曲も強い。中位以上は器壁が薄く削られ、直線的にのびる。単弁の鎬蓮弁を篦によって削り出しているが、蓮弁は先端のみを表わす。横方向の篦削り痕が明瞭に残る。胎土は灰色、透明度の高い発色で鶯色を呈する。内外面にわずかに貫入がみられる。13は復原口径15.95cm。深みのある器形で、遺存部の器高6.5cmを測る。体部は比較的直線的にのびる。蓮弁は単弁と複弁の折衷様である。胎土は灰色、色調は灰色がかった緑色で、光沢がある。14は約$\frac{1}{8}$大の破片で、復原口径16.1cm、比較的浅めの器形である。体部は丸味を帯びて外傾し、口縁端は肥厚してわずかに外反する。鎬蓮弁は篦削りで、横方向に削り痕が残る。胎土は白色、色調はやや灰色味のある緑色を呈する。釉の透明度は低いが、光沢がある。15は約$\frac{1}{4}$大の破片で、復原口径16.4cm。複弁の鎬蓮弁を有する。胎土は灰色、暗灰色がかった緑色を呈し、わずかに光沢がある。16は単弁の鎬蓮弁を有し、口径16.0cm。胎土は灰色で色調は粉青色を呈し光沢がある。整形・発色とも良好な品である。

17・18は底部のみの破片であるが、形態・色調から碗A類の底部と考えられる。17は胎土灰色、色調は鶯色を呈する。釉は光沢があるが、小さい気泡を多く含んでいる。高台は削り出しで整形され、径5.1cm。畳付は水平で安定している。18は蓮弁の下端が残っている。高台は削り出しで、高台と体部の接するところに篦刻みが連続する。胎土は灰色、光沢のある鶯色を呈する。内外面に貫入が多い。

碗B類(第8図19・20)　簡略化した平面的な蓮弁文を施すもので、口径・器高とも大きいのを特色とする。

19は約$\frac{2}{3}$が欠失する。口径17.0cm、器高7.4cm。蓮弁文は簡略化された平面的なもので、胎土は黄灰色と灰色のむらがある。色調も鶯色と黄褐色がかった鶯色とのむらがあり、内外面に貫入が多い。20は底部から体部下半の破片で、整形は全体的に雑である。黄褐色がかった鶯色を呈するが、発色にむらがあり、19と共通点が多い。

碗C類(第8図27)　内面に櫛描文、外面に蓮弁と櫛描文を描く小型の碗。1点だけの出土である。口径13.0cm。体部は内弯気味に立上り、反転して口縁は外反する。外面は篦による蓮弁の上をさらに縦に櫛目をつける。内面は沈線と櫛描文が連続する。深みのある鶯色を呈し、光沢も多く、釉の透明度も高い。



第８図　青磁実測図

碗D類(第8図28)　見込みに画花文を描く碗。外面にわずかに鎬蓮弁文が観察され、あるいはA類の亜類とするのが妥当か。胎土は灰色、色調は鼠色を呈し、わずかに光沢がある。

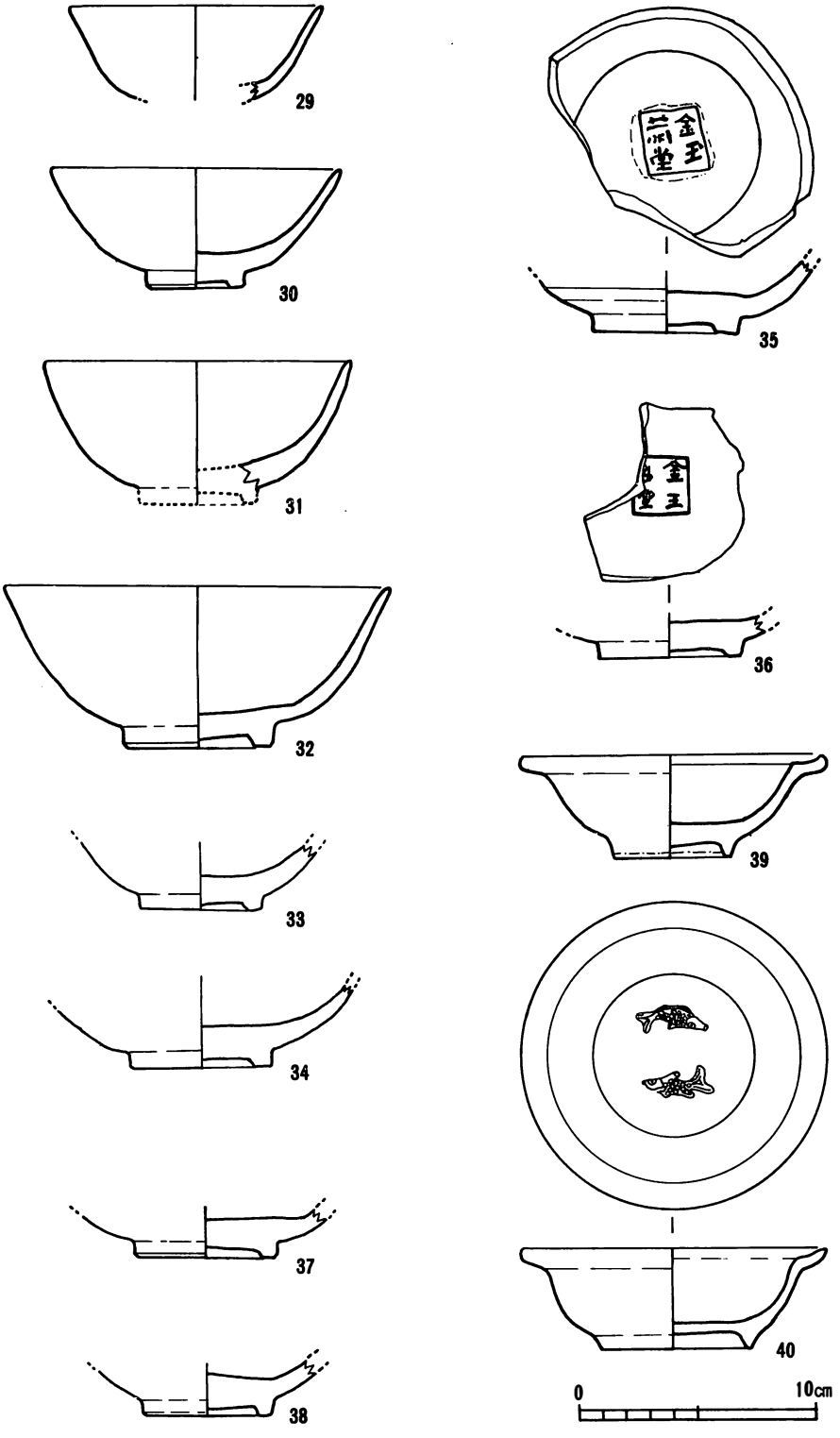
碗E類(第8図21～26)　片切りの蓮弁文を施し、比較的扁平で安定した高台、色調は黄褐色がかった緑色が多い。

21は約$\frac{1}{8}$大の破片で、復原口径17.0cm、器高6.7cm。見込みはほぼ水平で、体部との境はわずかに窪む。体部は内弯気味に立上り、先端は尖り気味。高台は削り出しで、低く安定した高台。畳付の部分は両側から削り込む。胎土は灰色、黄褐色気味の緑色を呈し、内外面にわずかに貫入がみられる。22は21よりわずかに小さく、口径15.9cm、器高6.6cm。安定した削り出し高台から内弯気味に立上り、口縁近くは比較的直延する。蓮弁の切込みはやや雑である。黄褐色がかった緑色を呈する。23は口径16.1cm、器高6.2cm。形態は24に酷似するが、蓮弁の付け方が異なる。蓮弁の左右の線は交わった後も左右にのび、×印状となる。胎土は灰色、色調は黄褐色がかった緑色を呈する。高台は削り出しで、広く、低く安定性がある。口縁から体部にかけて約$\frac{1}{8}$を欠失する。24はほぼ完形で、口縁から体部にかけてわずかに欠失する。口径16.2cm、器高6.0～6.3cmを測る。見込みと体部の境は有段となり、体部はわずかに丸味を帯びて外傾する。高台は低く、やや外に張り出し安定性がある。片切りの蓮弁を付し、色調鼠色、細かい貫入が多い。25は体部のみの破片で、復原口径16.0cm。片切りの蓮弁は雑である。胎土は白灰色でもろい。色調は黄褐色がかった緑で、内外面に細かい貫入が多い。外表に砂粒が付着している。26は約$\frac{1}{8}$大の破片で、復原口径14.95cm。片切りの浅い蓮弁を付し、蓮弁の先端は丸味をもつ。胎土は褐色がかった灰色、色調は黄褐色がかった緑色を呈する。

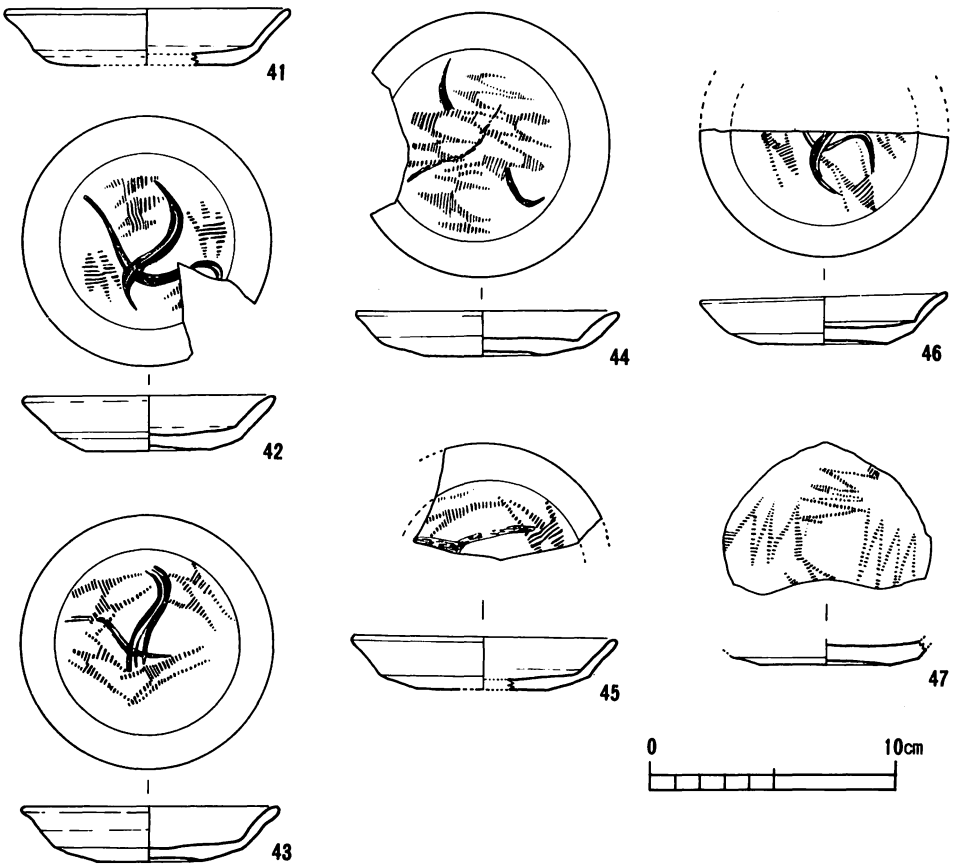
碗F類(第9図29～35)　内外面とも無文のものであるが、中には見込みに刻印を有するものがある。大・中・小がある。

29は小型のもので底部欠失。口径10.8cm。体部は下端で強く屈曲し、中位以上は比較的直線的にのびる。胎土は灰色、色調は灰色がかった緑色を呈し、光沢がある。30は約$\frac{1}{8}$大の破片。口径12.4cm、器高4.9～5.1cm。体部は中位以下は丸く弯曲し、中位以上は比較的直線的にのびる。見込みから体部にかけては境がなく、丸味をもって連なる。高台は削り出し、安定がある胎土は褐色がかった灰色、色調は褐色がかった緑色を呈し光沢がある。内面及び外面上半に細かい貫入がある。31は約$\frac{1}{8}$大の破片。復原口径13.0cm。体部は中位以下は丸味を帯び、中位以上は比較的直線的にのびる。色調は褐色がかった緑色を呈し、光沢がある。内外面に細かい貫入が多い。32は大型のもので復原口径16.3cm、器高6.6～6.8cm。約$\frac{1}{8}$を欠失する。体部中位以下は弯曲し、中位以上は比較的直線的にのびた後、口縁端はわずかに外反する。高台は安定した形・大きさに削り出されている。暗褐色がかった緑色を呈するが、発色にややむらがある。

33・34は体部下半から底部の破片。33は中型の、34は大型のものの底部。33は明るい褐色がかった緑色を呈し、光沢がある。内外面に細かい貫入が多い。34は安定した高台から丸味をも



第９図　青磁実測図



第10図　青磁実測図

って体部が立上る。胎土暗灰色、色調は暗褐色がかった緑色を呈する。

35は無文の碗であるが、見込みに「金玉満堂」の刻印を有する。安定した高台から体部は横に張る。光沢のある鶯色を呈する。刻印は約2.6cmの方形で、「満」の字はやや難読である。

類不明の碗(第9図36～38)　36も「金玉満堂」の刻印を有する碗の底部。体部を欠失するためどの類に属するか速断できない。胎土は灰色、褐色がかった鶯色を呈し、内外面に貫入がある。

37・38も底部のみの破片で、体部を欠失するため断定はできないが、37はE類かF類に、38はA類に属する可能性が強い。

鉢　高台付の小型の浅鉢がある。1点は見込みに双魚文を、他の1点は無文である。

39は無文の鉢で、口径13.0cm、器高4.2cm。高台は径5.0cm。体部は下から丸みをもって立上り、ほぼ直角に横に折れ、さらに折れて上方に突出する。釉薬はきわめて厚く施され、深みのある青緑色を呈する。内外面に貫入がみられる。整形・発色とも良好な優品である。約$\frac{1}{4}$を欠

失する。40は39と同類の鉢であるが、見込みに双魚文を描く。口径12.85cm、器高4.15cm。高台は39よりやや大きく、径6.4cm、先端は尖り気味になる。釉薬はきわめて厚く、光沢のある深みのある緑色を呈する。整形・発色ともに優れたものである。

皿(第10図)　所謂珠光青磁とよばれるもので、大部分は見込みの部分に櫛歯による文様がつくのが特徴である。底部は無釉で、体部はわずかに外反する。同安窯系の所産である。

41は無文で、復原口径11.5cm、器高2.3cmを測る。発色にむらがあり、内外面に貫入がみられる。底部無釉。A－1－10出土。42はわずかに欠損しているが、直径10cm、器高2.2cmを測る。見込みに櫛描文と篦による刻文を有する。A－2－9出土。43は完形品。直径10.3cm、器高2.2cmを測る。見込みには櫛描文と篦による刻文がある。A－2－9出土。44は直径10.7cm、器高1.7cmを測る。見込みには1・2と同様の文様を有するが、篦による刻文は浅い。体部中位以下の篦削りはきわめて雑である。A－2－9出土。45は小破片からの復原。復原口径10.8cm、器高2.1cm。見込みには櫛描文と篦による刻文を有する。A－2－9出土。46は$\frac{1}{2}$大の破片。復原口径9.9cm、器高1.9cm。整形・発色ともに優れている。A－2－9出土。47は底部の破片。見込みには櫛描文だけが描かれる。A－2－10出土。

これらの青磁皿のうち、42～46はA－2区の9層上面から一括して出土したものである。

(3) 土師器

器形では坏と皿がある。

実測した皿の数は371個、坏145個、計516個の多数にのぼる。このうち、完形あるいはほぼ完形に近いものが約半数を占める。さらに、実測不可能な破片の量は莫大なもので、遺物の中では最も量が多い。

坏

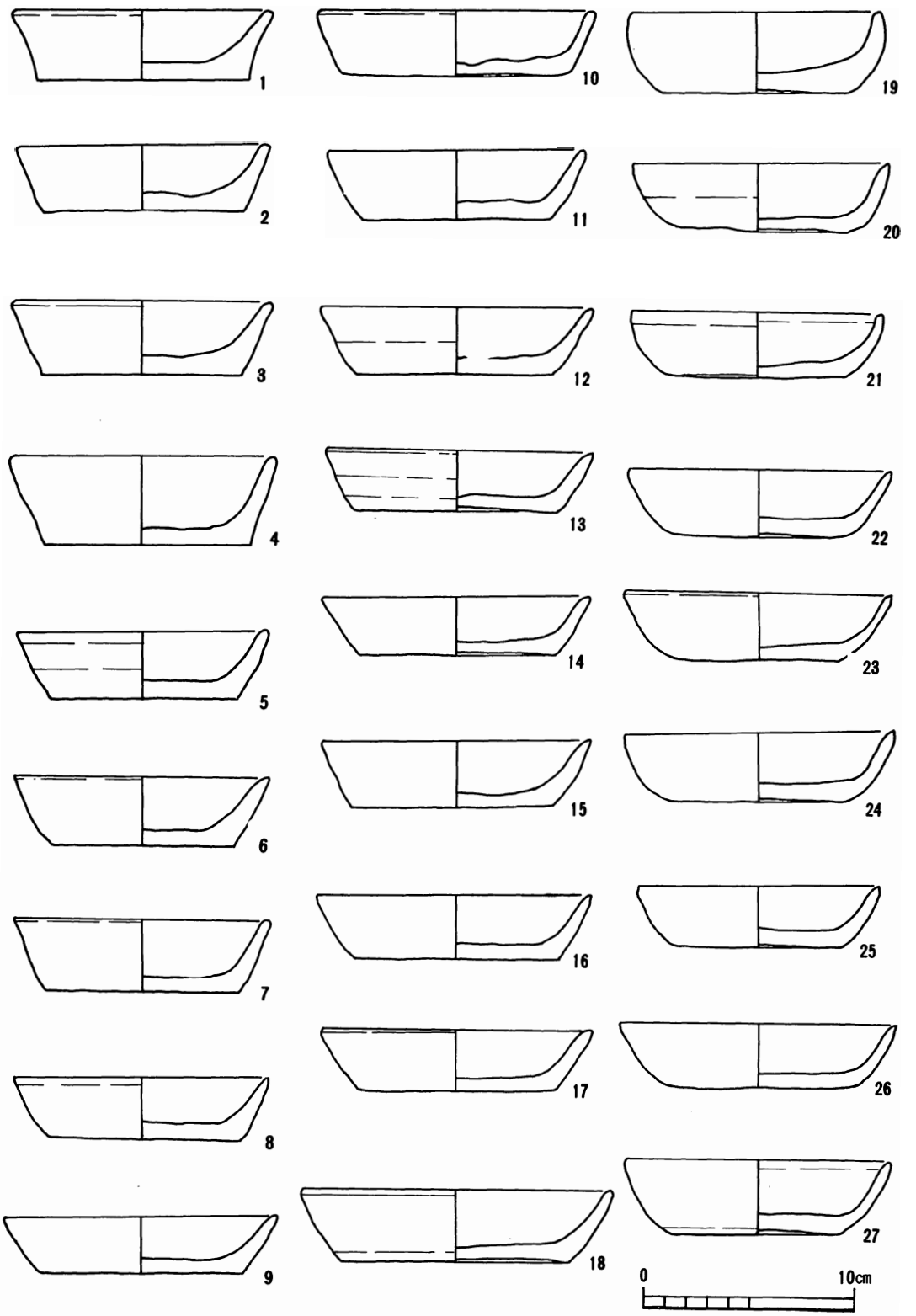
土師器の坏を、形態によりA～F類の6類に分類する。全般的な特徴として、体部内外面は横ナデ、内底面はナデ、底部はすべて糸切り離しで、簾状圧痕のつくものもある。

A類(第11図1～4)　口径12.2～12.8cm、器高3.1～4.1cmを測るもので、形態的には扁平な底部と、底部から直接わずかに外反してのびる体部を特色とする。この類は酸化が充分でないのか灰色がかった褐色を呈する。底部は糸切り離しで、簾状圧痕のつくものはない。

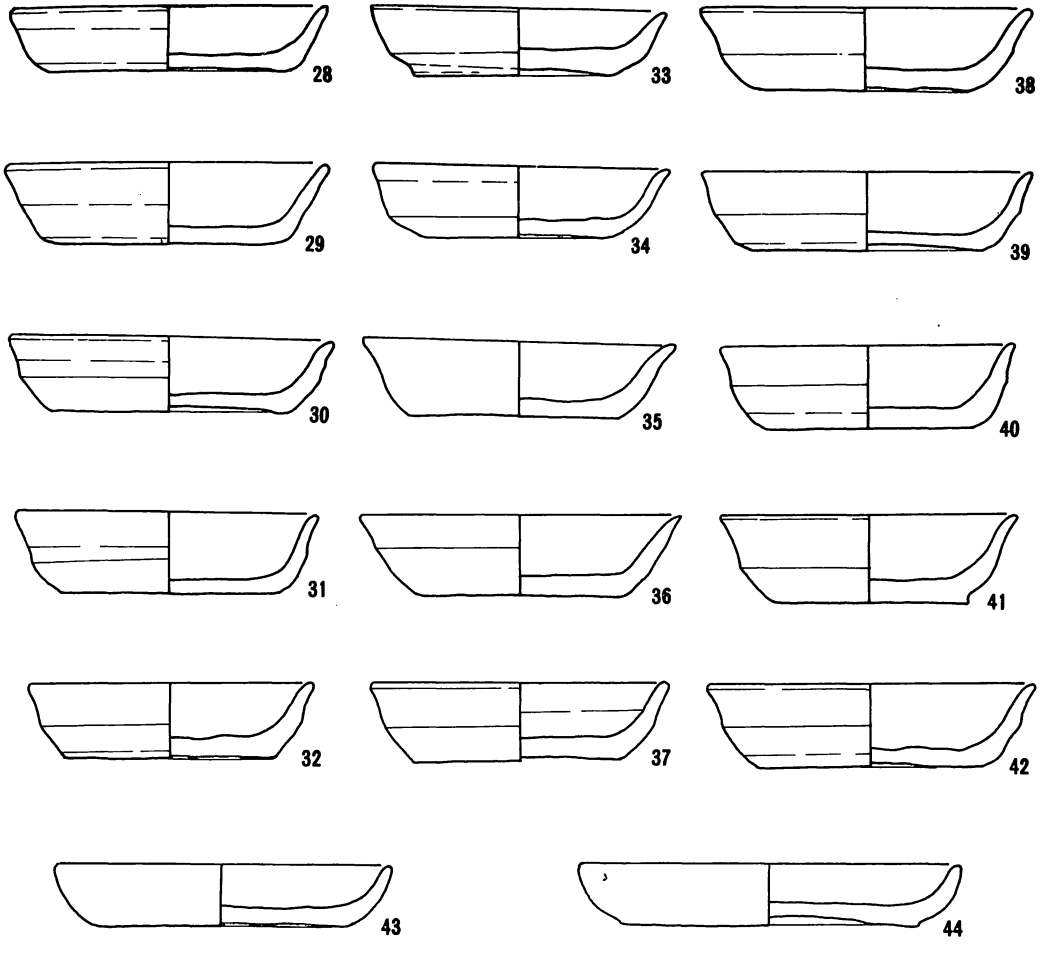
B類(第11図5～18)　口径12.0～13.4cm、器高2.8～3.4cmの範囲内にほとんど含まれるが、やや大口径のもの(18)もわずかに含まれる。体部は比較的直線的に外傾するものである。底部に簾状圧痕のつくものもある。

C類(第11図19～21)　全体に丸味をおびた器形で、体部は内弯する。口径11.9～12.2cm、器高3.1～3.8cmを測る。底部に簾状圧痕のつくものもある。この類は数が少ない。

D類(第11図22～27)　口径11.4～13.1cm、器高2.8～3.5cmを測る。体部は内弯したのち直線的に外傾する。底部には簾状圧痕のつくものもある。



第11図　土師器(坏)実測図



第12図　土師器(坏)実測図

E類(第12図28～42)　口径11.5～13.2cm、器高2.6～3.5cm。体部は内弯したのち反転して外反する。底部に簾状圧痕のつくものが多い。

F類(第12図43～44)　口径13.5～15.3cm、器高2.3～2.4cm、大口径、低器高で、体部は内弯ぎみに立上る。量は少ない。

皿

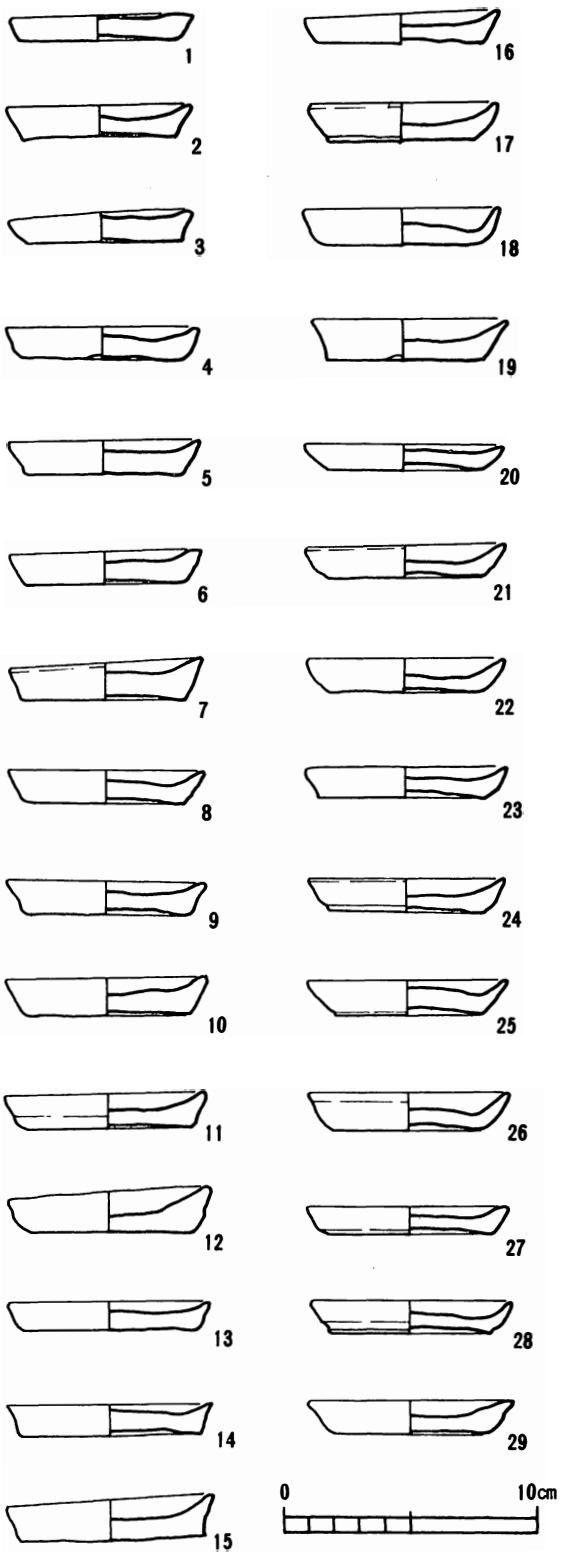
全遺物の中で最も量が多く、完形品も多く含まれる。全般的に造りが雑で、底部はすべて糸切り離しである。簾状圧痕のつくものも多い。体部内外面は横ナデ、内底面はナデ調整である。口径、器高でみると、口径は7.4～9.8cm、器高は0.9～1.7cmの中にすべて含まれる。坏の場合も同様であるが、形態や口径による時間差は認め難い。すなわち、9層と10層出土のものに差異はなく、各種のものが混在する。

器形、胎土、焼成からみて、1～15（第13図）は坏A類と類似し、同一工人の製作によるものと考えられる。ただ、坏A類では簾状圧痕のつくものはないが、皿には簾状圧痕のつくものも認められる。

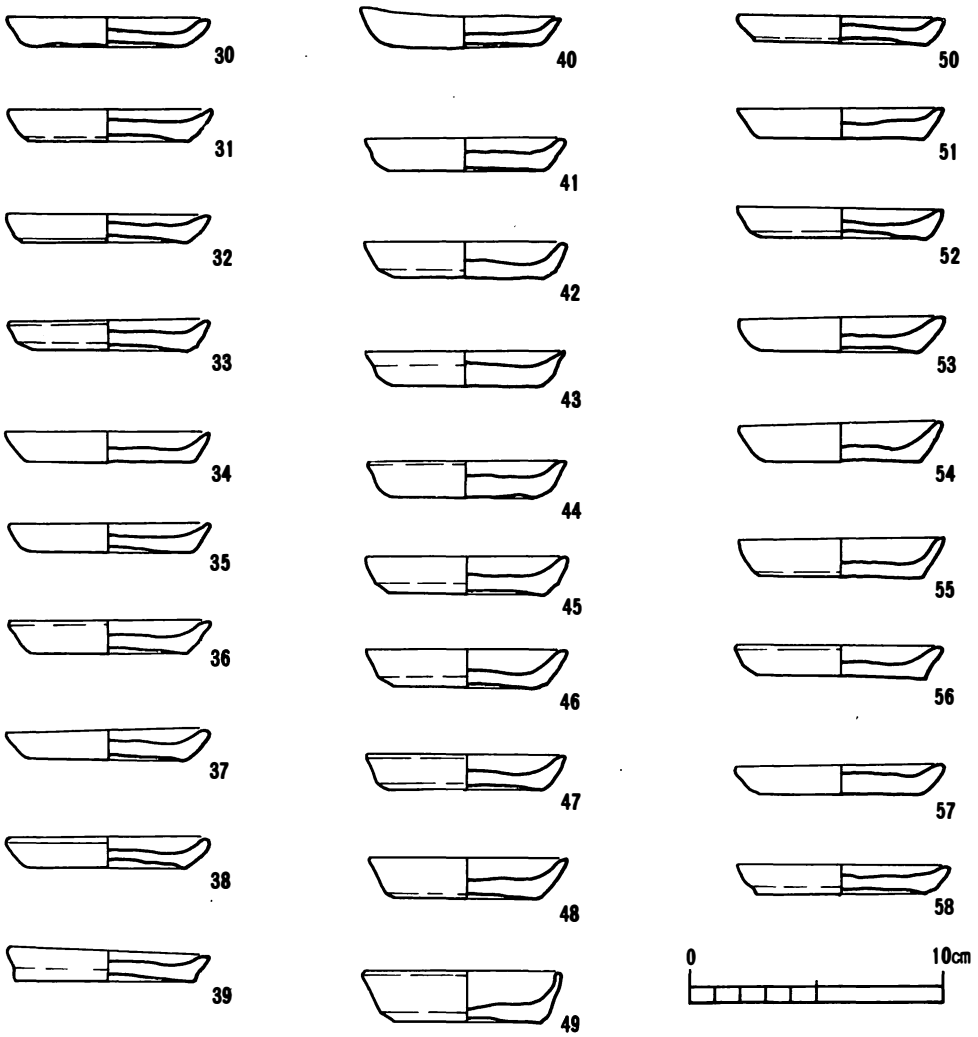
特殊な器形として、高台付の皿と円孔を有する皿がある（第17図）。

高台付皿は数点出土しているが、破片が多い。高さ1.2～1.3cmの高台が付く。

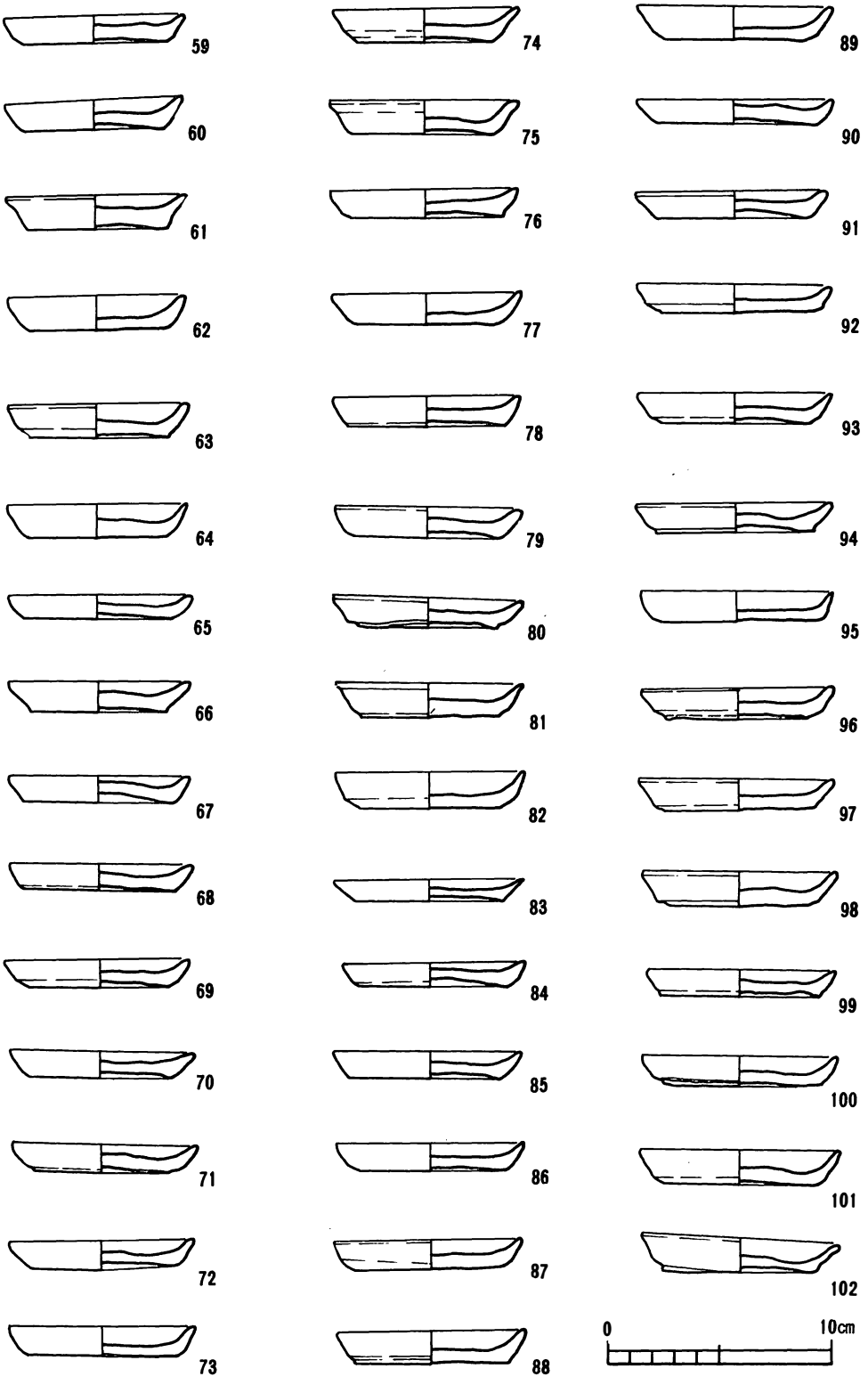
円孔を有する皿は用途不明である。焼成後に穿孔したものが3点出土している。



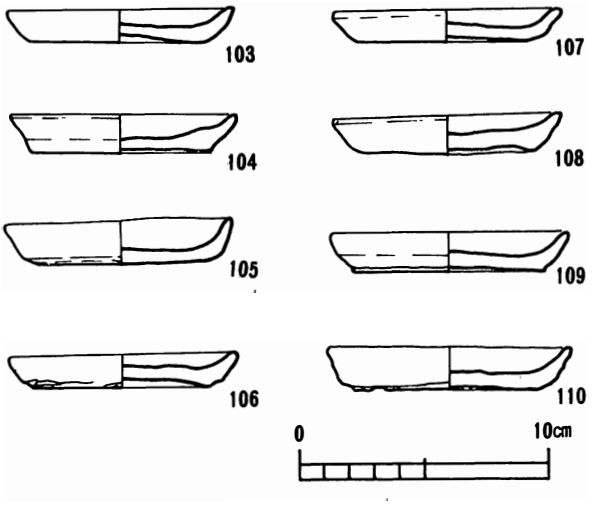
第13図　土師器（皿）実測図



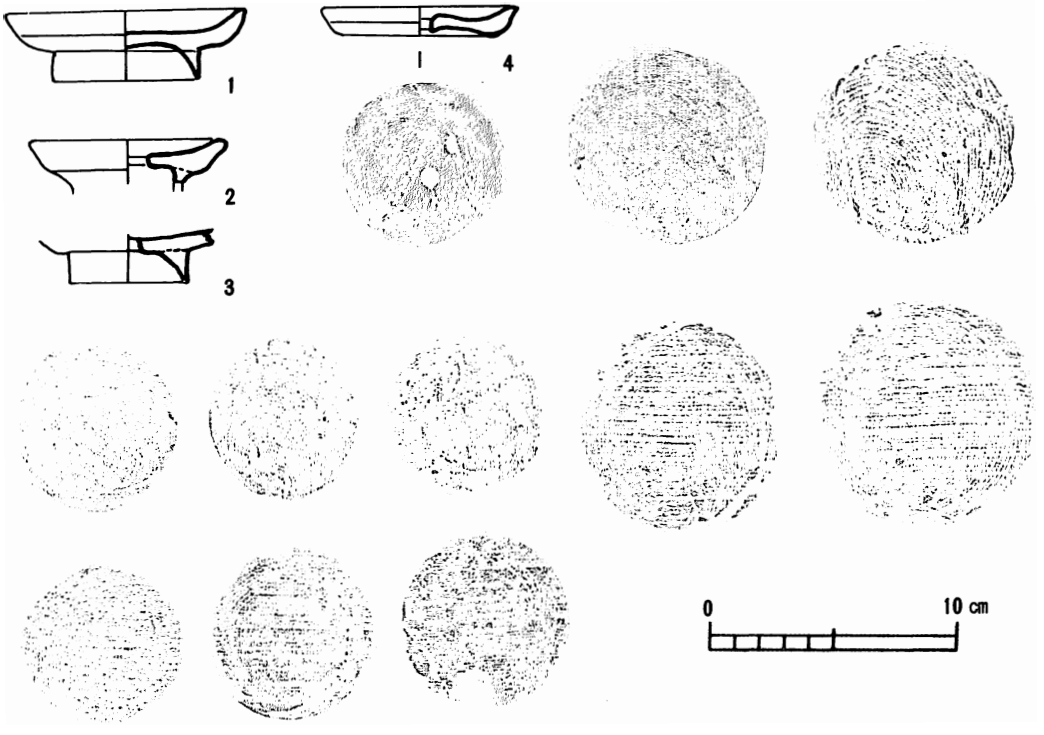
第14図　土師器（皿）実測図



第15図　土師器（皿）実測図



第16図　土師器（皿）実測図



第17図　土師器実測図・土師器底部拓影

第4表　土師器坏一覧表

番号	口径	器高	糸切り痕	簾状圧痕	出土地点	類別	番号	口径	器高	糸切り痕	簾状圧痕	出土地点	類別
1	12.4	3.3	○		C—5—9	A	23	12.6	3.1	○		C—4—9	D
2	12.2	3.1	○		D-4-9上	〃	24	12.8	3.2	○	○	A—1—10	〃
3	12.5	3.4	○		〃	〃	25	11.4	2.8	○	○	B—5—9	〃
4	12.8	4.1	○		〃	〃	26	13.1	3.0	○		C—2—10	〃
5	12.0	3.2	○	○	C—4—9	B	27	12.6	3.5	○		C—4—9	〃
6	12.2	3.3	○	○	B—4—9	〃	28	12.7	2.6	○		B—2—9	E
7	12.2	3.4	○	○	C—4—9	〃	29	13.0	3.2	○	○	〃	〃
8	12.2	3.0	○	○	〃	〃	30	13.6	2.9	○		〃	〃
9	13.0	2.8	○	○	〃	〃	31	12.2	3.2	○	○	〃	〃
10	13.4	3.1	○		B—2—9	C	32	11.5	2.9	○	○	C—4—9	〃
11	12.3	3.2	○		C—4—9	〃	33	12.0	2.7	○		B—1—10	〃
12	13.0	3.1	○		A—2—9	〃	34	12.0	2.8	○		B—2—9	〃
13	12.8	2.9	○	○	C—3—10	〃	35	12.6	3.0	○	○	C—4—9	〃
14	12.8	2.8	○	○	C—3—9	〃	36	13.0	3.2	○		A—2—9	〃
15	12.9	3.2	○		D—4—9	〃	37	12.0	3.0	○	○	C—4—9	〃
16	13.1	3.0	○		B—4—10	〃	38	13.2	3.3	○	○	B—4—9	〃
17	13.0	3.0	○		B—5—9	〃	39	13.2	3.1	○	○	C—4—9	〃
18	14.9	3.4	○		B—2—10	〃	40	11.8	3.2	○	○	〃	〃
19	11.9	3.8	○		B—5—9	D	41	11.8	3.5	○	○	D—3—9	〃
20	12.2	3.2	○	○	〃	〃	42	13.1	3.2	○	○	C—5—10	〃
21	12.0	3.1	○		B—1—10	C	43	13.5	2.3	○		A—5—9	F
22	12.4	3.1	○		B—4—9	D	44	15.3	2.4	○	○	B—2—10	〃

第5表　土師器皿一覧表

番号	口径	器高	糸切り痕	簾状圧痕	出土地点	番号	口径	器高	糸切り痕	簾状圧痕	出土地点
1	7.4	1.0	○		D—4—10	15	8.3	1.6	○	○	B—2—10
2	7.4	1.1	○		D—4—9	16	7.6	1.1	○	○	D—3—9
3	7.4	1.1	○	○	D—4—9	17	7.6	1.4	○	○	A—2—9
4	7.7	1.2	○	○	C—5—8	18	7.7	1.4	○	○	C—4—9
5	7.7	1.3	○	○	C—4—9	19	7.7	1.6	○	○	D—4—10
6	7.8	1.2	○	○	C—3—9	20	7.8	1.0	○	○	A—2—9
7	7.8	1.4	○	○	C—5—9	21	7.8	1.2	○		B—5—9
8	7.9	1.3	○		A—2—9上	22	7.8	1.2	○		A—1—10
9	8.0	1.4	○	○	C—5—9	23	7.8	1.2	○		A—2—9
10	8.0	1.4	○	○	C—4—9	24	7.8	1.3	○	○	D—3—9
11	8.0	1.4	○		B—2—9上	25	7.8	1.3	○		A—2—9
12	8.1	1.6	○	○	A—2—9	26	7.8	1.5	○		A—2—10
13	8.2	1.1	○	○	D—3—8	27	7.9	1.1	○		B—2—9上
14	8.2	1.2	○		C—4—8	28	7.9	1.2	○		A—2—9

番号	口径	器高	糸切り痕	籠状圧痕	出土地点	番号	口径	器高	糸切り痕	籠状圧痕	出土地点
29	8.0	1.3	○	○	C—4—9	70	8.4	1.2	○		B—2—9上
30	8.0	1.0	○		B—5—9下	71	8.4	1.2	○		C—3—9
31	8.0	1.1	○		B—2—9上	72	8.4	1.3	○		B—5—9下
32	8.0	1.1	○		B—2—9	73	8.4	1.3	○		A—1—10
33	8.0	1.1	○		B—2—9上	74	8.4	1.4	○		A—2—9
34	8.0	1.1	○	○	B—1—10	75	8.4	1.4	○		A—5—9
35	8.0	1.1	○	○	A—2—9	76	8.5	1.2	○	○	B—2—10
36	8.0	1.1	○	○	A—2—9上	77	8.5	1.3	○		B—5—9下
37	8.0	1.1	○		C—3—9	78	8.5	1.3	○		A—2—9
38	8.0	1.2	○		A—2—9上	79	8.5	1.4	○	○	B—5—9下
39	8.0	1.2	○		B—2—10	80	8.5	1.4	○		B—2—9
40	8.0	1.2	○		B—1—10	81	8.5	1.5	○	○	A—2—9
41	8.0	1.2	○		A—2—9上	82	8.5	1.6	○	○	B—4—9下
42	8.0	1.3	○		A—1—10	83	8.6	0.9	○	○	A—2—9上
43	8.0	1.3	○	○	D—3—9下	84	8.6	1.0	○		B—2—9上
44	8.0	1.4	○		A—5—9	85	8.6	1.1	○		B—2—9上
45	8.0	1.4	○		C—3—9	86	8.6	1.2	○	○	A—2—9上
46	8.0	1.4	○		A—2—9	87	8.6	1.2	○	○	B—2—9上
47	8.0	1.4	○	○	B—2—9上	88	8.6	1.4	○		B—2—9上
48	8.0	1.6	○	○	C—4—9	89	8.6	1.4	○		B—5—9下
49	8.0	1.9	○	○	C—4—9	90	8.7	1.0	○		A—2—9
50	8.1	1.1	○	○	B—2—9上	91	8.7	1.2	○	○	A—2—9上
51	8.1	1.2	○		A—2—9	92	8.7	1.2	○		A—2—9
52	8.1	1.2	○	○	B—2—9上	93	8.7	1.3	○	○	B—5—9下
53	8.1	1.2	○	○	B—2—9上	94	8.7	1.3	○	○	B—4—10
54	8.1	1.4	○	○	B—2—9	95	8.7	1.3	○		B—5—9
55	8.1	1.5	○		A—2—9上	96	8.7	1.3	○	○	B—2—9
56	8.2	1.1	○	○	A—2—9上	97	8.7	1.4	○		A—2—9
57	8.2	1.1	○		A—2—9	98	8.7	1.4	○		B—5—9下
58	8.2	1.1	○		A—2—9	99	8.4	1.1	○	○	A—2—9上
59	8.2	1.2	○	○	A—2—9	100	8.8	1.3	○	○	B—5—9下
60	8.2	1.3	○		B—2—9上	101	8.8	1.4	○	○	A—2—9上
61	8.2	1.4	○	○	D—3—9	102	8.8	1.5	○		B—5—9
62	8.2	1.5	○	○	B—2—9	103	9.0	1.2	○	○	B—5—9下
63	8.2	1.5	○		B—2—9上	104	9.0	1.4	○		A—2—9上
64	8.2	1.5	○		B—4—9	105	9.0	1.6	○	○	A—1—10
65	8.3	1.0	○		B—2—9	106	9.1	1.3	○	○	B—5—9下
66	8.3	1.2	○		B—5—9	107	9.2	1.2	○	○	B—5—9下
67	8.3	1.2	○	○	A—2—9上	108	9.2	1.5	○		B—4—9下
68	8.4	1.1	○	○	B—2—9上	109	9.6	1.4	○		A—2—9上
69	8.4	1.2	○		B—2—9上	110	9.8	1.7	○	○	B—2—9

(4)瓦器（第18図）

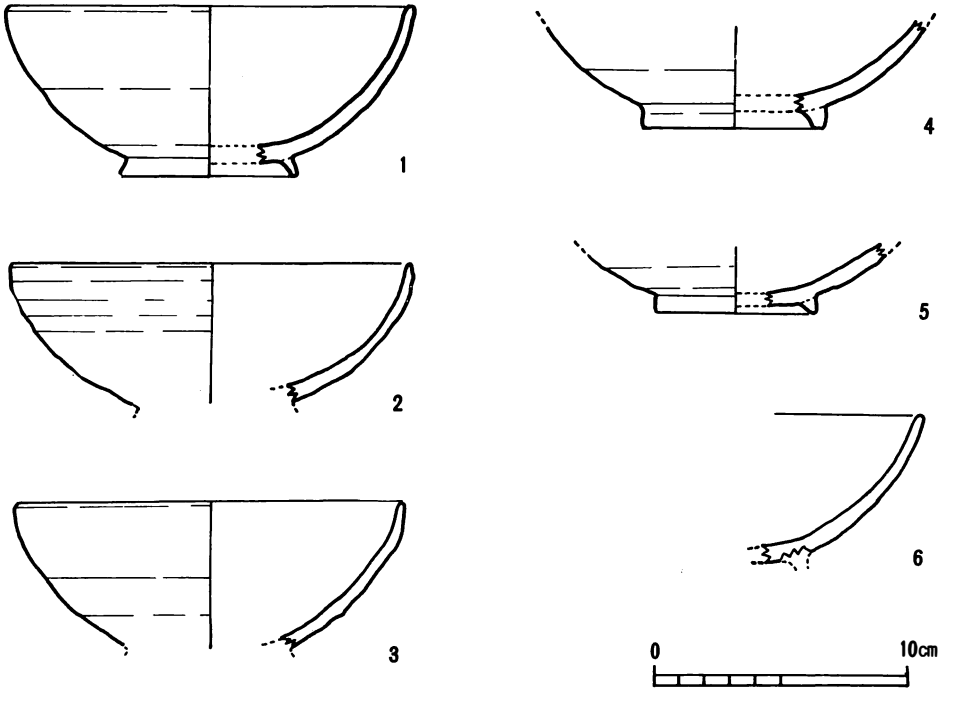
破片ばかりで、約20点出土した。全体的にみると量は少ない。実測できたのは図示した6点である。器形はすべて椀で、他の器形はない。

1は約½大の破片であるが、ほぼ全形を復原し得る。体部は内弯しながら立上る。外開した安定性のある高台が付く。復原口径16.4cm、器高 6.7cm。内面は平滑で、篦磨きによると思われるが、篦磨きの方向は不明である。体部外面の中位以上は横方向にわずかに篦磨きを施す。口縁部近くに炭素を吸着し黒色を呈するがむらがある。他は灰色を呈する。A－2－9出土。

2は復原口径16.1cm。体部は内弯する。内面は平滑であるが、調整不明。外面の中位以上は横方向に篦磨きを施す。中位以下は篦削りの上に部分的に篦磨きを施すが雑である。小破片であるが、遺存部には炭素の吸着はほとんどみられない。A－2－9出土。

3は復原口径15.9cm。体部は内弯する。内面にはナデ痕がみられ、篦磨きは明らかでない。外面中位以上は横方向の篦磨き、中位以下には雑な篦磨きがわずかに施される。指圧痕もあり、調整は雑である。炭素の吸着はわずかである。二次的な火を受けて赤変している。A－2－10出土。

4・5は底部から体部下半の破片。4は外開の安定した高台。内面は平滑であるが調整不明。



第18図　瓦器実測図

外面にはわずかに篦磨きが施されるが雑である。この個体はA－2－9出土のものとB－2－9出土のものが接合した。

5は断面三角形の高台が付く。内面はきわめて平滑であるが、篦磨きは施されない。A－5－9出土。

6は体部の破片。外面の篦磨きが明瞭である。中位以上は丁寧な横方向の磨き、中位以下はやや雑であるが横方向に磨いている。内面は平滑であるが調整不明。口縁部近くにわずかに炭素の吸着がみられる。A－2－9出土。

(5)須恵質土器

須恵器の系譜と考えられる土器の一群で、須恵器質のものと瓦質のものとがある。

器形別にみると、こね鉢、擂鉢の類が多く、次いで甕、土鍋、壺がある。

こね鉢（第19図1～11）須恵質土器の中で最も量が多い。すべてが破損し、完形品は1個もない。図示したものも破片からの復原で、片口の部分を表現していないが、他の破片の中には片口部の破片も含まれており、ほとんどが片口を有するものと思われる。大まかに分けると、口径30cm前後の大型のものと、口径20～23cm前後の小型品の二種がある。

1は約$\frac{1}{3}$大の破片であるが、片口部は欠失する。底部の一部は欠失しているが平底で、体部は直線的に外傾し、口縁部は丸く肥厚する。内外面ともナデ調整を施し、部分的に指ナデ痕が残るが、外面の調整は雑である。口縁部外面は黒色、他は灰色を呈する。須恵器質に近い瓦質。口径29.4cm、器高10.6cm。

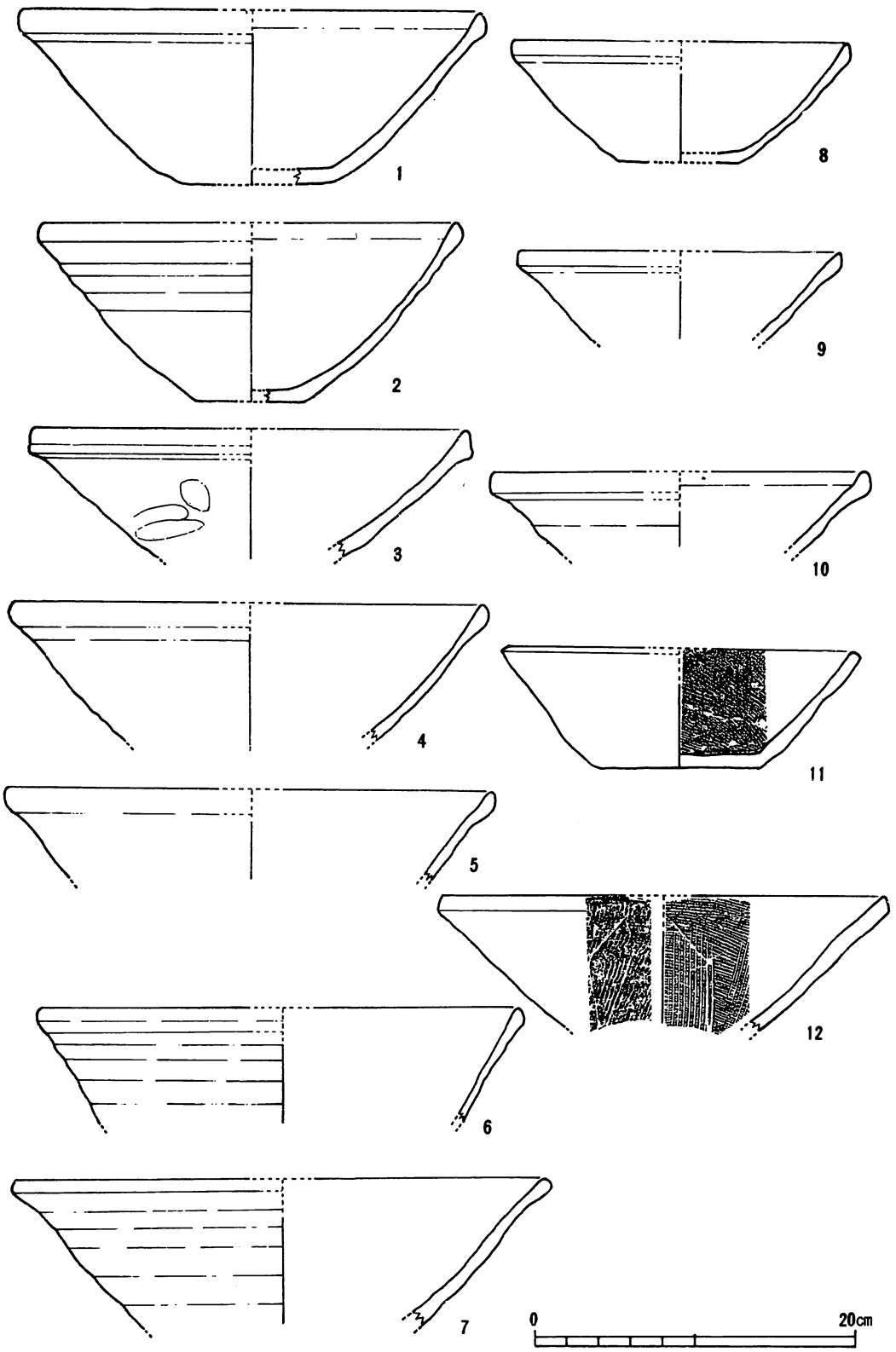
2は約$\frac{1}{4}$大の破片からの復原であるが、ほぼ全形を知り得る。口径25.7cm、底径 6.7cm、器高12cm。平底から体部はわずかに内弯気味に外傾し、口縁部は肥厚する。片口を有すると思われるが欠失する。外面及び内面上半は横ナデを主体とし、内面下半は指ナデによる調整。口縁外面は黒色、他は白灰色を呈し、器壁は全般的に薄い。瓦質。

3は復原口径27.4cm。体部破片からの復原であるが、体部は下端でわずかに丸味を帯び、上方は直線的にのびる。口縁部は横に突出するように肥厚する。全般的に厚手で、焼きもかたく須恵器質を呈する。片口部を欠失するが、わずかにその端の方が観察される。口縁部内外面は横ナデ、他はナデ。外面下半には指圧痕が残る。

4は復原口径29.2cm。体部は直線的に外傾し、口縁部は三角形状に肥厚する。口縁部内外面は横ナデ。体部外面は指調整で凹凸があり雑。体部内面は斜め方向のナデ。瓦質。

5は復原口径30.5cm。須恵器質を呈し、焼きもかたい。片口部の端がわずかに観察できる。内外面とも横ナデを主体とした調整。口縁部は丸く肥厚し、その部分に自然釉がかかり、光沢のある黒灰色を呈する他は暗灰色。。

6は口縁部から体部にかけての小破片からの復原。復原口径29.7cm。体部は器壁が薄く、直線的に外傾する。口縁部はわずかに肥厚し、断面三角形を呈する。内外面とも横ナデ調整。瓦

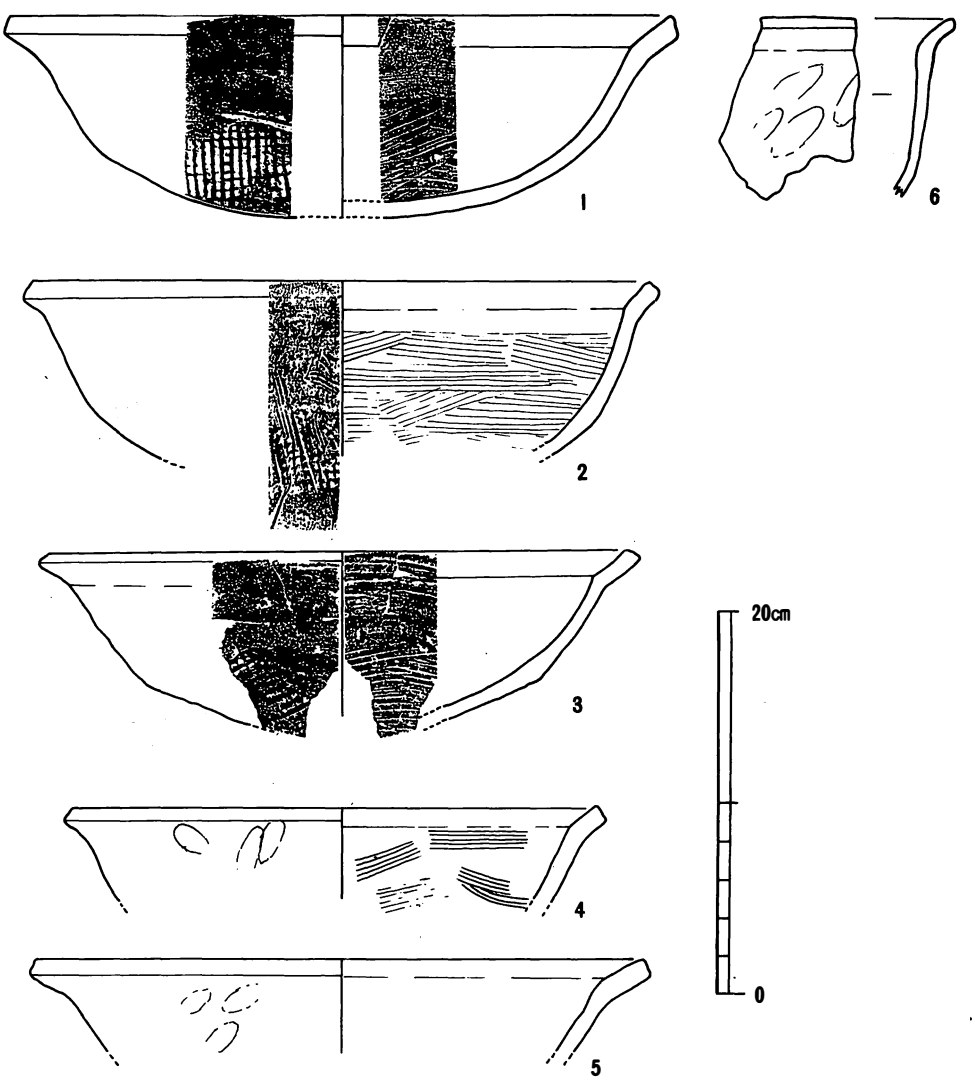


第19図　須恵質土器実測図

質を呈する。

7も口縁部から体部にかけての破片から復原。復原口径33.1cmを測り、こね鉢としては最も口径が大きい。体部は直線的に外傾した後、口縁下からわずかに外反する。口縁部はわずかに肥厚するが顕著ではない。内外面に薄く自然釉がかかる。片口部の端の一部がわずかに観察できる。須恵器質を呈し、焼きもかたい。

8は約$\frac{1}{4}$大の破片であるが、ほぼ全形を知り得る。口径20.6cmの小型品。底部は平底で、径約 7.3cm。体部はわずかに内弯して外傾する。口縁部はわずかに肥厚し、先端は尖り気味。片



第20図　土鍋実測図

口部は欠失する。内外面ともナデ調整。須恵器質を呈する。

9も復原口径19.7cmの小型品。体部は直線的にのび、口縁部直下からわずかに外反する。口縁部はわずかに肥厚し、先端部は尖る。内外面ともナデ調整。器壁は薄く、片口部は欠失している。

10は小破片で、復原口径23.0cm。体部外面は凹凸を有する。口縁部は肥厚し、上部は上につまみ上げたように収まる。暗灰色の須恵器質を呈し、焼きもかたい。

11は約$\frac{2}{3}$大の大きな破片で、ほぼ全形を復原し得る。口径22.2cm、底径10.1cm、器高 7.4cm。体部は直線的に外傾し、口縁は肥厚しない。口縁上面はナデによって平らに整形。片口部の端の部分がわずかに観察できる。底部の器壁は薄い。外面は指整形で凹凸がある。内面全面に刷毛目を施す。瓦質で、焼きはあまり良くない。外面には煤が付着し、煮沸に用いたものである。

擂鉢(第19図12)　2点出土しているが、1点は細片で図示できない。12は復原口径22.4cm。体部は直線的に外傾し、口縁部は肥厚しない。外面は縦方向の櫛目の上をナデで調整。内面は横方向の刷毛目の上に11条1単位の条痕を施す。条痕は全面に施すのではなく、各単位の間にはわずかに間をあける。条痕は向って左側は浅く、右側は深く強く刻まれている。時期的に後出のものと考えられる。

土鍋(第20図)　浅鉢状の土鍋で、すべて瓦質を呈する。いずれも外面には煤が付着し、使用状態を物語っている。

1は約$\frac{1}{3}$を欠失するが、全形を復原できる。口径35.6cm、器高は10.6cmと推定される。平底気味の丸底で、体部は内弯して立上り、口縁下で反転して外反する。体部外面は刷毛目の上をナデ、底部には荒い格子タタキを施す。口縁から屈曲点までの内面は横ナデ。内面は横に櫛目を施した上をナデ。

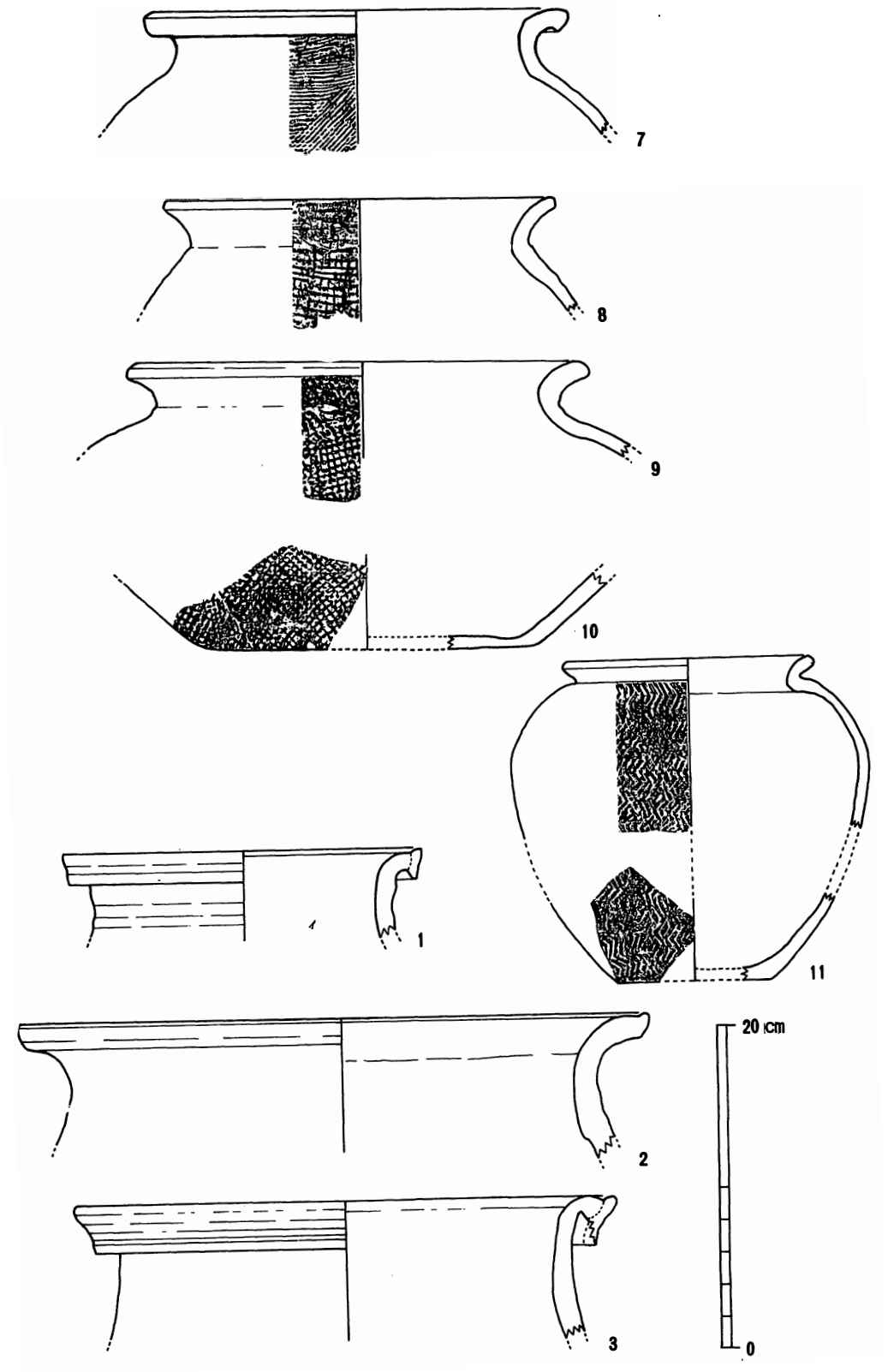
2は底部を欠失する。ひずみがあり、長径34.0cm、短径31.0cmを測る。底部を欠ぐため器高は不明であるが、1より深めの器形である。体部は内弯して立上り、口縁下で反転して外反する。調整は1と同じであるが、底部の格子タタキは摩耗が著しい。

3は小破片からの復原。全体的には1に類似するが、底部から体部への境が明瞭で、内面上半の調整法が異なる。復原口径31.2cm、器高は 9.8cm前後と推定される。

4・5は口縁部の小破片。4は復原口径28.0cm。口縁下の屈曲は弱い。外面には指圧痕が認められ、内面はナデ、部分的に櫛目がみられる。5は復原口径32.7cm。外面には指圧痕があり内面はナデ調整。

6は1～5とは異なった土鍋。小破片で全形は復原できない。深めの鉢形の器形で、口縁部は外反する。瓦質であるが、二次的な火熱を受けており、黒褐色及び赤褐色を呈する。

甕(第21図7～10)　外表に平行タタキ・格子タタキをを施す甕の一群がある。量的にはこね鉢についで多い。全般的に焼きが悪く、もろい。そのためか、破片が多く、全形を窺えるものはな



第21図　須恵質土器・陶器実測図

い。

7は須恵器質に近い瓦質で、この種のものとしては焼きが良い。体部外面には平行タタキが横及び斜めに施される。体部内面はナデられ、器壁は薄い。復原口径26.8cm。

8はやや小型で、復原口径24.8cm。焼きが悪く、器面の剝離が著しい。体部外面は5mm目位の荒い格子タタキを施す。内面は横ナデ。

9は復原口径29.0cm。体部外面には格子タタキを施す。内面は器面の荒れがひどく、調整法不明。口縁部は部厚いが、体部は次第に薄くなる。

10は甕の底部と考えられる。平底で、底部器壁は薄い。体部外面には格子タタキを施す。このタタキは9のタタキに類似する。他にも同様の平底底部の小破片が数片あり、甕形土器の底部はこのような平底で、体部外面全体にタタキを施していたと考えられる。

壺(第21図11) 壺は図示したもの1個体分のみ出土した。破片からの復原であるが、ほぼ全形を知り得る。復原口径15.6cm、体部最大径22.2cm、底部径 9.6cm。上部と下部の接合点はないが、器高は20.0cm前後と推定される。平底で、体部はやや肩が張る。体部外面には山形のタタキを全面に施す。黒灰色の瓦質を呈し、焼成は良い。

(6)陶器(第21図1～3)

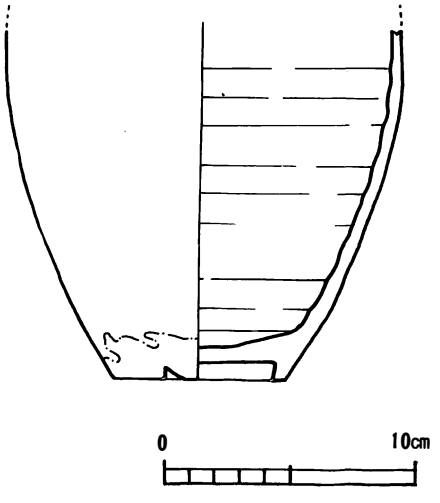
中世陶器と考えられるものがかなりの量出土している。そのうち、明らかに産地を比定できるのは、常滑焼と中国産の褐釉陶器である。その他の大部分は産地不明の陶器で、今後の解明がまたれる。

第21図1～3は常滑焼である。いずれも口縁部破片からの復原。

1は復原口径22.4cm。口縁部を外反させたものに粘土帯を貼り付ける。胎土は黒灰色、色調は暗赤褐色を呈する。

2は復原口径39.6cm。口縁部の粘土帯貼り付けはなく、外反させた口縁の先端を斜め上方につまみ上げる。胎土は灰色、色調は暗赤褐色を呈するが、内外面の一部には緑色の自然釉がかかる。

3は口縁先端を大きく折り曲げ、その先端に粘土帯を貼り付けて口縁部を形成する。復原口径34.0cm。胎土は石英粒子を含み黒灰色。色調は

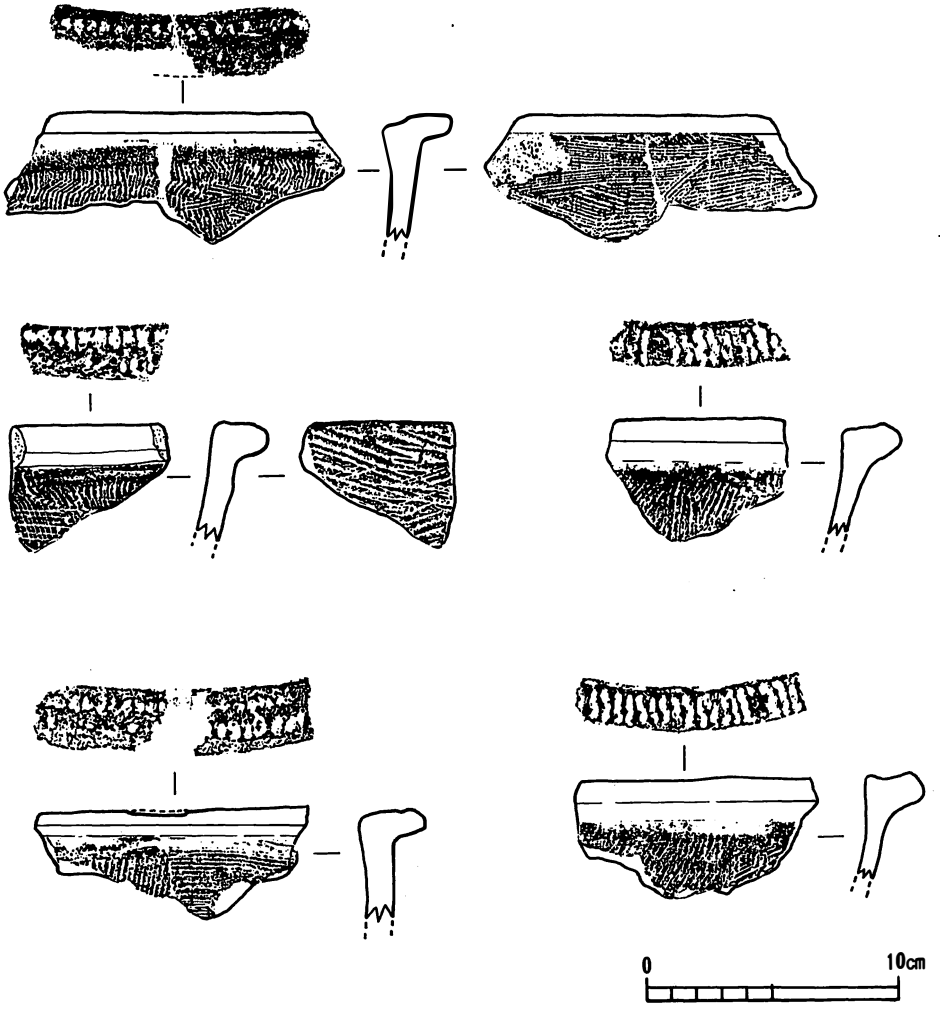


第22図　褐釉陶器実測図

暗赤褐色を呈し、外面はわずかに光沢がある。

この他にも胴部破片で常滑焼と考えられるものが数点ある。これらの中には、常滑焼特有のタタキ文を有するものが含まれる。

褐釉陶器(第22図)は1個体分のみ出土。底部から体部下半にかけての破片で、上部を欠失する。底部は径 6.8cm。削り出しによる高台が付く。 畳付の部分に三角形の刻みを1箇所施す。体部外面は篦削り、内面はナデ調整。胎土はやや黄色がかった白色で、内外面に明褐色の釉をかける。ただ体部下端の一部には鉄釉がかかる。この種のものは最近各地で出土しているが、産地が中国であること以上の詳しいことは判っていないようである。



第23図　土鍋実測図

(7)土師質土器（第23図）

砂粒を含む胎土で、土師質に焼成された土器の一群。

器形ではすべて土鍋である。口縁部は外に折り曲げられ、断面L字形を呈する。すべて小破片であるため、全形を知り得るものはない。口縁上端は凹凸があるが、すべてに縄状圧痕を施す。内面は刷毛目を施すものとナデによる調整のものとがある。外面には、煤が多く付着する。

胴部の破片で、同様な胎土、焼成、調整をもつものがあり、それからするとかなり深めの鉢形を呈するものと考えられる。

(8)木 製 品

下駄・箸状木製品・椀・櫛・底板・蓋などが出土した。以下器種別に記述する。

なお、出土した木製品の材質調査は熊本大学教育学部・大迫靖雄助教授にお願いした。調査結果については付論3を参照されたい。

下駄（第24・25図、第6表）

連歯下駄1点と差歯下駄6点の計7点が出土。うち1点は小児用である。対になるものはない、すべて別個体のものである。

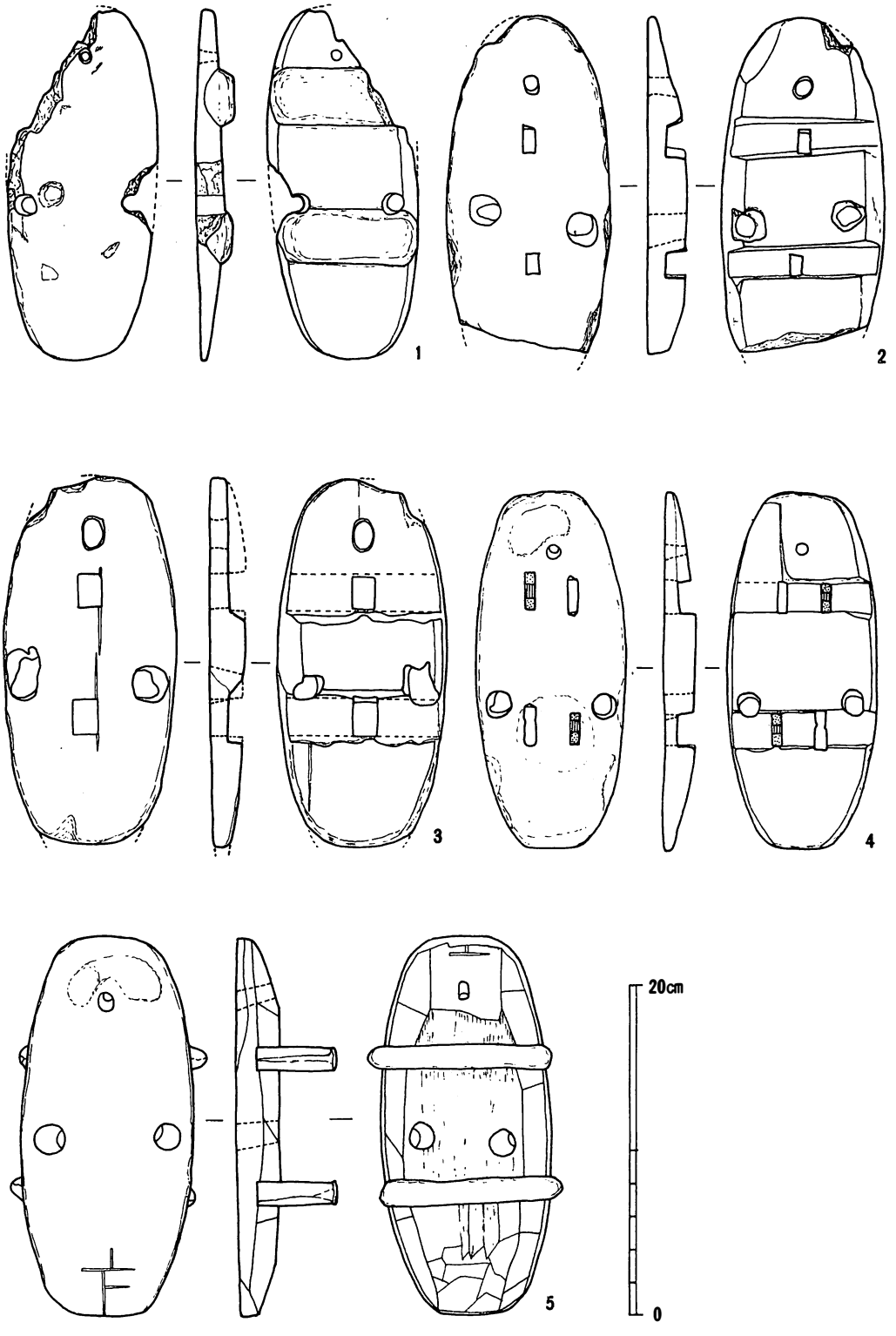
1は長円形の連歯下駄。裏面全体が焼けており、また一部を欠失するが、全形を復原し得る。台部の現存長は21.0cm、幅 9.2cmを測る。台の中心点近くの厚さは 1.6cm前後で、前・後端は薄くなる。とくに後端は薄く、4㎜程度である。歯は低く、下面はかなり摩滅が進んでいる。前壺は台のほぼ中央、後穴は後歯の前端に接する。遺存が悪く、前壺・後穴の穿孔方法は不明である。材質はセンダンの板目材。

2は差歯露卯下駄で、台部の後端と歯部を欠失する。長円形で、台部の中央付近は厚く、前・後端は薄くなる。前壺は台の中央、後穴は後歯より前にある。枘穴は長方形で、前後各1個がある。遺存が悪く、穿孔方法は不明。材質はセンダンで板目材を使用。

3も差歯露卯下駄で、台の一部と歯を欠失する。長円形で、前壺は台の中央、後穴は後歯の前端に接する。前壺は腐触が進み穿孔方法は不明。後穴も腐触しているが、一部に焼箸穿孔の痕跡が認められる。枘穴は前後に各1個あるが、2の枘穴よりも大きい。枘穴は縦2cm、横1cmを測る。材質はスギの板目材を使用。

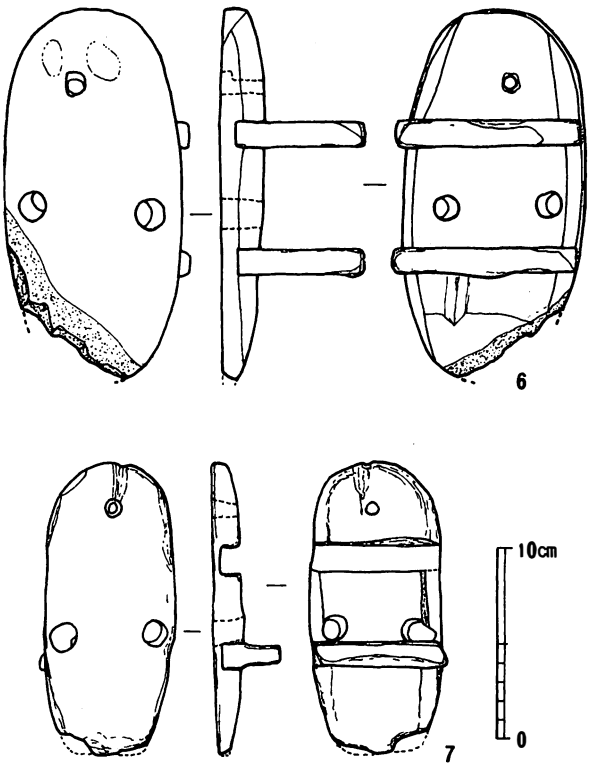
4は差歯露卯下駄。隅丸長方形気味の長円形で、台部は比較的扁平。全長20.5cm、幅 9.2cm。前壺は台の中央、後穴は後歯の前端に接する。前後に各2個の枘穴がある。前後各1個の枘穴には枘が遺存し、これによりクサビを使用していることが窺える。後穴は焼箸穿孔。台部上面の前壺の左側が摩滅して窪み、主に左足に使用されたものと考えられる。材質はスギで柾目材を使用している。

5は完全な形で残り、遺存状態もきわめて良好である。枘穴はなく、差歯陰卯下駄である。台部の平面形は長円形で、舟底状をなす。前壺は台の中央、後穴は後歯より前にある。前壺は



第24図　下駄実測図

ノミ状工具、後穴は焼箸穿孔。台部裏面には加工痕が明瞭に観察できる。歯は前歯・後歯ともに残り、台部下底面から歯の先端まで約3.5cmを測る。歯の先端は丸くつぶれ、かなり使用されたことを物語っている。歯は上端より下端の方が幅が広い。台部の表面後端と裏面前端に文字様の線刻がある。前壺の左右は摩滅してわずかに窪み、その状態から、主に右足に使用されたものと推定される。材質はスギで柾目材を使用。



第25図　下駄実測図

6も差歯陰卯下駄で枘穴はない。台部後端を焼失する他は良好に遺存する。台部は長円形、舟底状を呈する。前壺は台の中央より左に扁し、後穴も5と同様に前寄りにある。前壺はノミ状工具、後穴は焼箸穿孔。歯は上端より下端が幅広く、高さは前歯が5.2cm、後歯が5.5cmを測る。前壺の位置から考えて右足用か？。材質はスギの柾目材。

第6表　下駄一覧表

	挿図番号	長　さ	台幅	歯幅（下端） 前　歯	歯幅（下端） 後歯	高　さ	枘穴の数 前	枘穴の数 後	形　式	材質	出土地点	備　考
1	第24図-1	(21.0)	9.2	(7.0)	8.7	2.3	—	—	連歯下駄	センダン	C-3-10	遺存不良。2と同材。
2	第24図-2	(22.0)	10.1	—	—	(2.4)	1	1	差歯露卯下駄	〃	C-4-9	遺存不良。材質調査試料No.8。
3	第24図-3	(22.2)	10.5	—	—	(2.2)	1	1	差歯露卯下駄	スギ	C-4-9	遺存やや不良。7と同材。
4	第24図-4	20.5	9.2	—	—	(1.9)	2	2	差歯露卯下駄	〃	B-5-9	左足用か？7と同材。
5	第24図-5	23.0	10.6	11.4	11.3	6.1	—	—	差歯陰卯下駄	〃	C-4-9	遺存不良、右足用か？　7と同材。
6	第25図-6	(19.4)	9.6	(7.8)	9.8	7.6	—	—	差歯陰卯下駄	〃	C-4-9	右足用か？7と同材。
7	第25図-7	15.3	7.0	—	7.1	3.6	—	—	差歯陰卯下駄	〃	C-4-9	小児用、遺存不良、材質調査試料No.1。

備考　1．数値の単位はcm
2．（　　）内数値は現存値

7は小型の小児用下駄。形式は差歯陰卯下駄に属する。前歯を欠失する他、形はほぼ保たれているが、遺存状態は良くない。台部は長円形で、前壺は台の中央、後穴は後歯の前端に接する。歯は上部は厚く、先の方はやや薄く削り込まれている。高さは約 2.0cmを測る。材質はスギで柾目材を使用している。

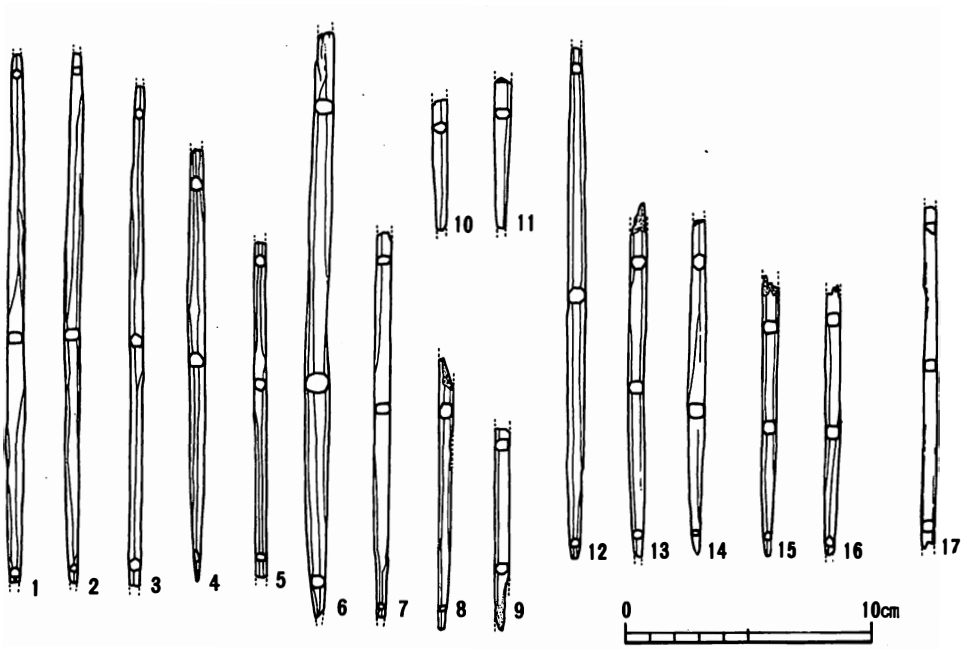
これらの下駄の肉眼的観察によると、1と2が同材質、3～7が同材質である。そこで、2と7の材質調査を実施することとした。2は材質調査試料№8、7は材質調査試料№1である。

箸状木製品（第26図）

完形品がなく、全長を知ることができないが、6などから全長25～30cm前後と推定される。棒状で、両端は尖り気味である。最も幅の広いもので1cm前後である。断面形は多様で、四角形・五角形・六角形を呈するものが多い。同じ個体でも箇所によって断面形が異なる。1～5はC－5－9の上層、6～11はC－4－9の下層、12～17はC－4－9からの出土で、出土地点にかたよりがある。17は形状が異なり、整形されたものではなく、板材が割れた木片であるが、一応ここにあげておく。

肉眼的観察において、すべて同材と判定されたので、図示していない細片を材質調査試料とした。材質調査試料№4である。調査の結果、材質はスギと判定された。

各個の測定値は第7表のとおりである。



第26図　木製品実測図

第7表　箸状木製品一覧表

	挿図番号	長　さ	最大幅	材　質	出土地点	備　　考
1	第26図－1	(21.2)	0.7	ス　ギ	C－5－9上	両端をわずかに欠失
2	〃　－2	(21.3)	0.7	〃	〃	〃
3	〃　－3	(20.1)	0.5	〃	〃	やや細目
4	〃　－4	(17.4)	0.7	〃	〃	一端は遺存
5	〃　－5	(13.5)	0.45	〃	〃	細目
6	〃　－6	(23.5)	1.0	〃	C－4－9下	大型、両端をわずかに欠失
7	〃　－7	(15.5)	0.6	〃	〃	やや扁平
8	〃　－8	(11.0)	0.6	〃	〃	
9	〃　－9	(8.2)	0.6	〃	〃	小破片
10	〃　－10	(5.3)	0.6	〃	〃	〃
11	〃　－11	(6.0)	0.65	〃	〃	〃
12	〃　－12	(20.5)	0.7	〃	C－4－9	一端は遺存
13	〃　－13	(14.3)	0.65	〃	〃	
14	〃　－14	(13.4)	0.7	〃	〃	一端は遺存
15	〃　－15	(11.3)	0.65	〃	〃	
16	〃　－16	(10.6)	0.55	〃	〃	
17	〃　－17	(13.8)	0.55	〃	〃	箸状木製品ではない。

備考1．数値の単位はcm
2．(　)内数値は現存値

椀（第27図1～3）

数個体分が出土したがいずれも細片で、図示できるのは3点である。漆塗りのものもある。

1は底部が円形に突出し、薄い体部は内弯気味に立上がる。内面には漆がわずかに残る。遺存状態は良くない。C－4－9出土。

2も円形の突出した底部であるが、1に比べると薄い。体部の屈曲もわずかで、あるいは皿状の器形になるかもしれない。A－4－9出土。

3は高台を削り出し、体部は内弯しながら立上がる。体部外面には横方向の削り痕が観察される。C－4－9出土。

これらの類はすべて同材質を用いており、3の一部を材質調査試料№3とした。調査の結果はケヤキと判定された。

櫛（第27図4）

横櫛の破片が1点出土した。長さは不明であるが、幅は 2.3cmと推定される。歯は両側から削り込み、断面形は三角形を呈する。堅い緻密な材質であるが、材質調査は未実施。B－4－10出土。

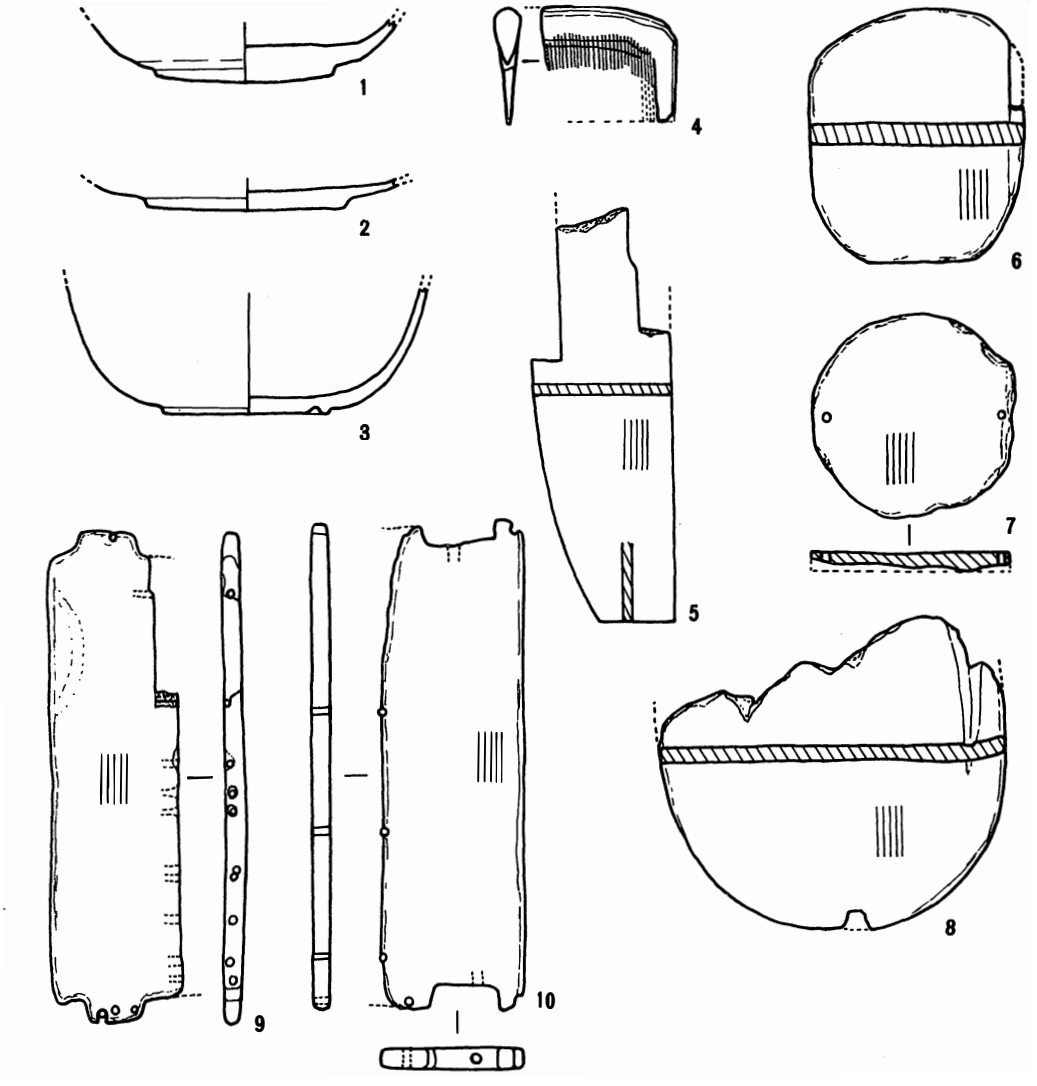
底板（第27図８、第28図13・14）

曲物の底板と考えられるものが出土した。

８は厚さが６㎜前後で幅13.9㎝の楕円形。約$\frac{1}{3}$を欠失し、水分のためかひずみが生じている。柾目材。６（材質調査試料№２）と同材質のスギ。　Ｃ－４－９出土。

13は大型で、残存部から復原すると直径約28㎝の円形となる。厚さは５㎜前後で、表裏面ともきれいに削られている。柾目材を使用し、残存部の遺存状態は良好である。６（材質調査試料№２）と同材質のスギ。　Ｃ－４－９出土。

14は約$\frac{1}{2}$が遺存する。厚さ１㎝前後、復原直径36.2㎝の大型品。図の上端部分は焼けている。



第27図　木製品実測図　　0　10㎝

8・13とは材質が異なるとも考えられたので、この一部を材質調査試料№5とした。材質はスギと判定された。

蓋（第28図11・12）

11は長径約30cm、短径約24cm、中心からやや偏した位置に鈕がある。中心部は約 1.7cmと厚く、周囲は次第に薄くなる。鈕は最大径 3.5cm、高さ 2.4cm、隅丸長方形に近いが不整形。全体の加工は雑で、表裏面とも凹凸がある。周縁部はかなりの熱を受け黒変し、焼けている部分も多い。このことから、いわゆる鍋蓋として使用されたことが窺える。木目の不規則な根材を使用しており、堅い。一部を材質調査試料№6とし、タブノキ属と判定された。C－4－9出土。

12は破損品で全形を知ることができないが、円形のものの両端に抉りを入れたものと考えられる。厚さ 1.2cm前後で表裏とも加工は雑である。焼けておらず、鍋蓋とは限定できないが、広義の蓋としておきたい。下駄の2（材質調査試料№8）と同材質のセンダン。C－4－9出土。

用途不明木製品（第27図5～7、9～10、第28図15～16）

明らかに加工・整形されたもので、用途の不明な木製品を次に述べる。

5は底板状の木製品であるが、図の左上端に切り込みがあり、下端も直線的に削られている。厚さは4mm前後で加工は整美である。6（材質調査試料№2）と同材質のスギ、柾目材。B－6－8出土。貝層の直上からの出土であるが、同一時期のものとみてよかろう。

6は長径10.1cm、短径 8.6cm　厚さは8mm前後。一部をわずかに欠失する他、ほぼ全体が遺存する。隅丸方形に近いが不整形である。表裏面は平滑に削られ、周縁にも削り痕が残る。底板の未完成品かと考える。材質調査試料№2でスギと判定された。柾目材。C－4－9出土。

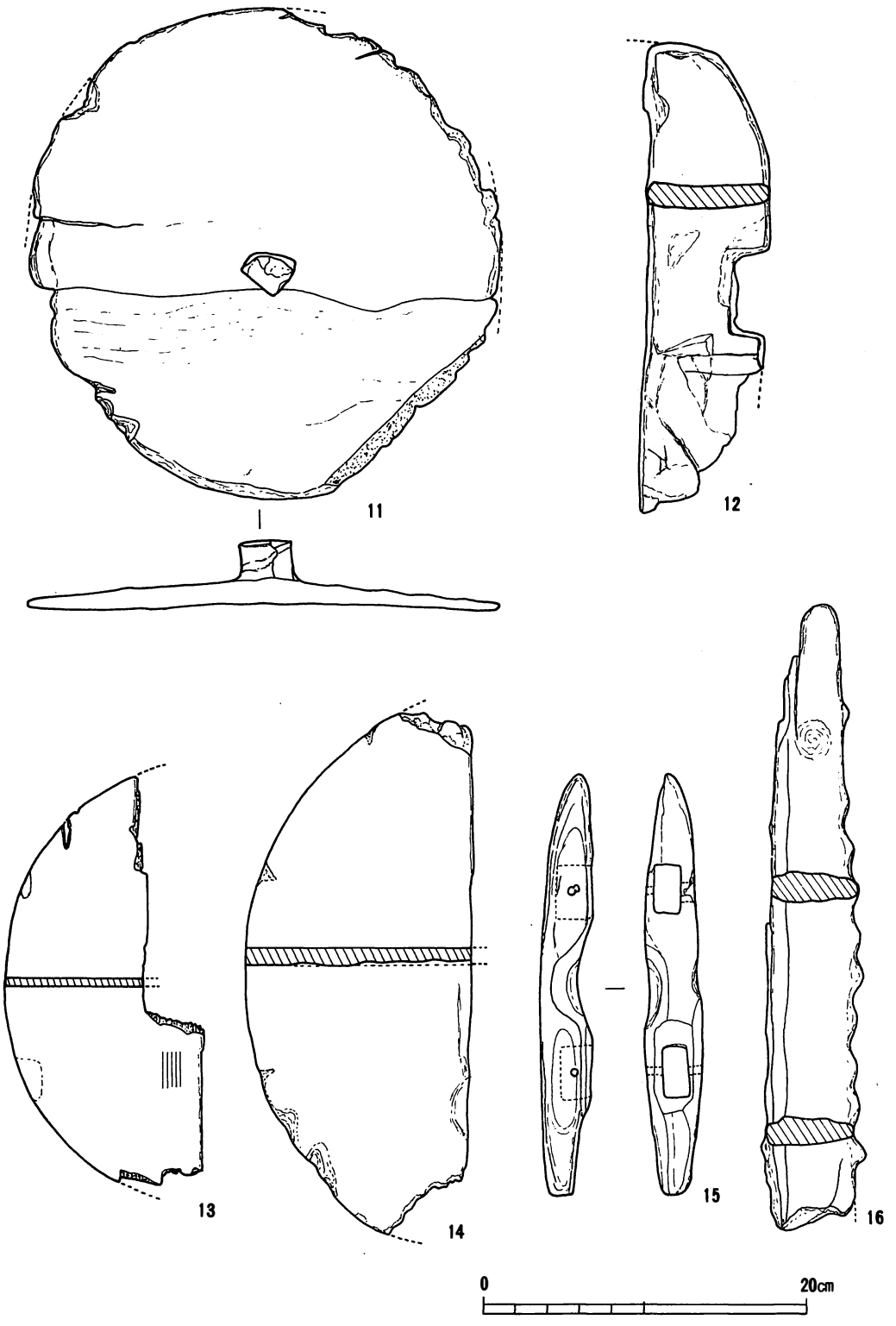
7は直径8cm前後の円形品で、両端の2カ所に小さな円孔を穿つ。正円形ではなく、図の左右周縁部は直線的になる他、全般的にやや不整形。図の裏面は腐触がひどく、薄くなっている。6（材質調査試料№2）と同じスギ、柾目材。B－3－10出土。

9は図の上下端に枘状の突起を削り出し、この突起には1～3個の目釘穴がある。図の右端は折損面で、継手となる目釘が9カ所みられ、さらに右側に接合していたことを示している。長さ19.4cm、現存幅 5.1cm前後。

10は図の上下端に凹部を削り込む。厚さは7mm前後で、7カ所に目釘穴がみられる。最大長19.4cm、現存幅 5.7cm前後。

9・10はともにC－3－9下の出土で一緒に出土した。材質・形状からみても同一製品の部分であるが、組合わせることはできない。材質は6（材質調査試料№2）と同じスギで、ともに柾目材。目釘は遺存するものもあり、それらは竹である。

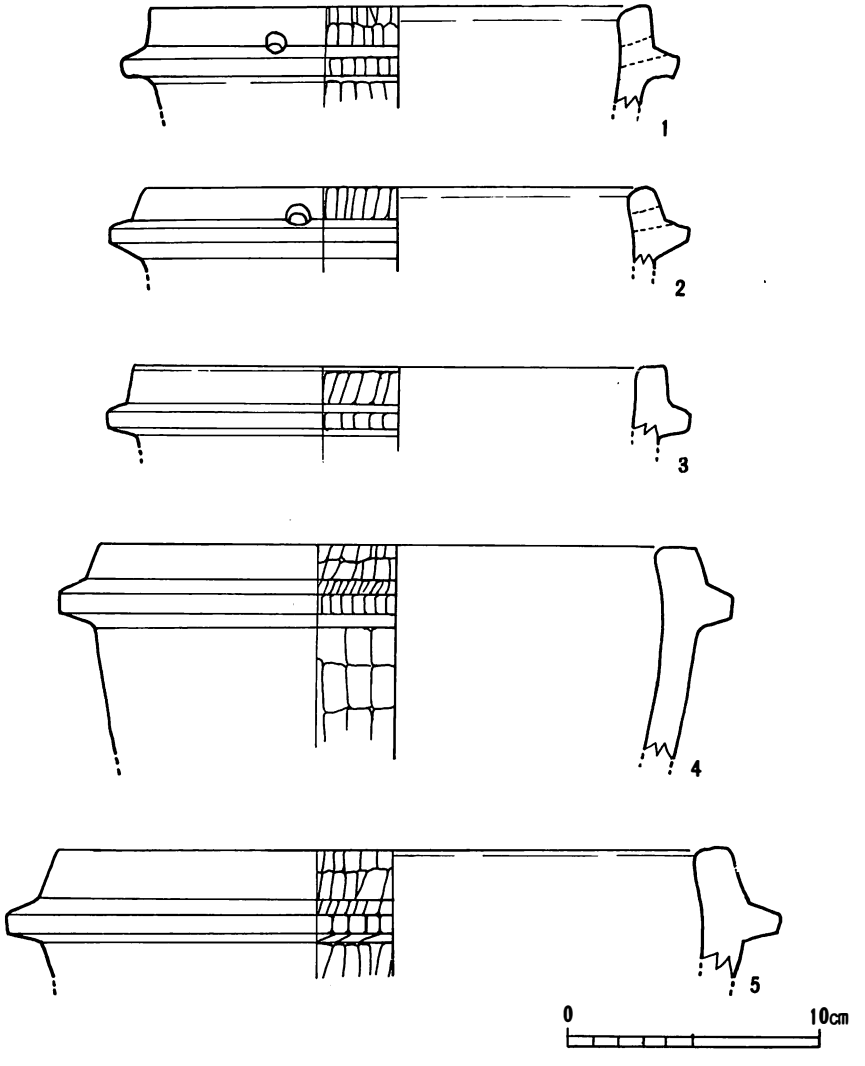
15は長さ25.7cm。2カ所に長方形の枘穴があり、目釘穴を穿つ。図の上端は尖り気味で、下端はわずかに面をもつ。中央部は一方から抉られる。材質は6（材質調査試料№2）と同じスギ。糸車の一部とも考えてみたが適切ではない。何かの把手の部分かとも考えられる。C－4－9



第28図　木製品実測図

出土。

16は現存長38.3cm、最大幅 6.2cm、最も厚い所で 1.8cm。図の右側端には歯状の凹凸がある。表裏面とも雑な加工で、凹凸がみられる。一部を材質調査試料No.7とした。調査の結果、材質はアカガシ亜属と判定された。B－5－9出土。



第29図　滑石製石鍋実測図

(9)石 製 品

滑石製石鍋（第29図）

すべて破片で、20点程出土している。全体に共通した特色として、煤が付着し黒色ないしは黒灰色を呈している。形態的には、上端から1.5~2.0cm下に袴を巡らす。袴の断面形は梯形を呈する。袴より上の器壁はわずかに内弯する。出土した破片からすると底は平底と考えられる。外表には縦あるいはやや斜め方向の削痕が観察されるが、内面は研磨されたのか平滑である。

図示した１～５はいずれも破片からの復原図であるが、最も口径の小さいもの(1)で20.1cm、最も大きいもの(5)は27cmを測る。器高を窺えるものはない。１・２は転用されたものか、袴の上端に穿孔がみられる。

磨製石斧（第30図１～２）

１は蛇紋岩製の磨製石斧で、長さ13.4cm、最大幅 6.1cm、厚さ 2.3cmを測る。刃部は強く弯曲し、上半には研磨されない部分が残る。重量 236.5ｇ。２は小型のノミ形石斧で、刃部は欠失している。現存長 8.5cm、幅 2.8cm、厚さ 1.6cm、重量56.2ｇ。いずれも縄文時代のもので縄文土器とともに、高橋貝塚に関連した遺物である。

砥石（第30図３～６）

総数６点出土したが、いずれも破片で、全形を知ることはできない。４・５・６は攪乱部分からの出土で、年代的には近世の可能性もある。

材質別にみると３は砂岩、５はいわゆる天草砥石、４・６は粘板岩である。３は片面、４～６は表裏両面に使用痕がある。

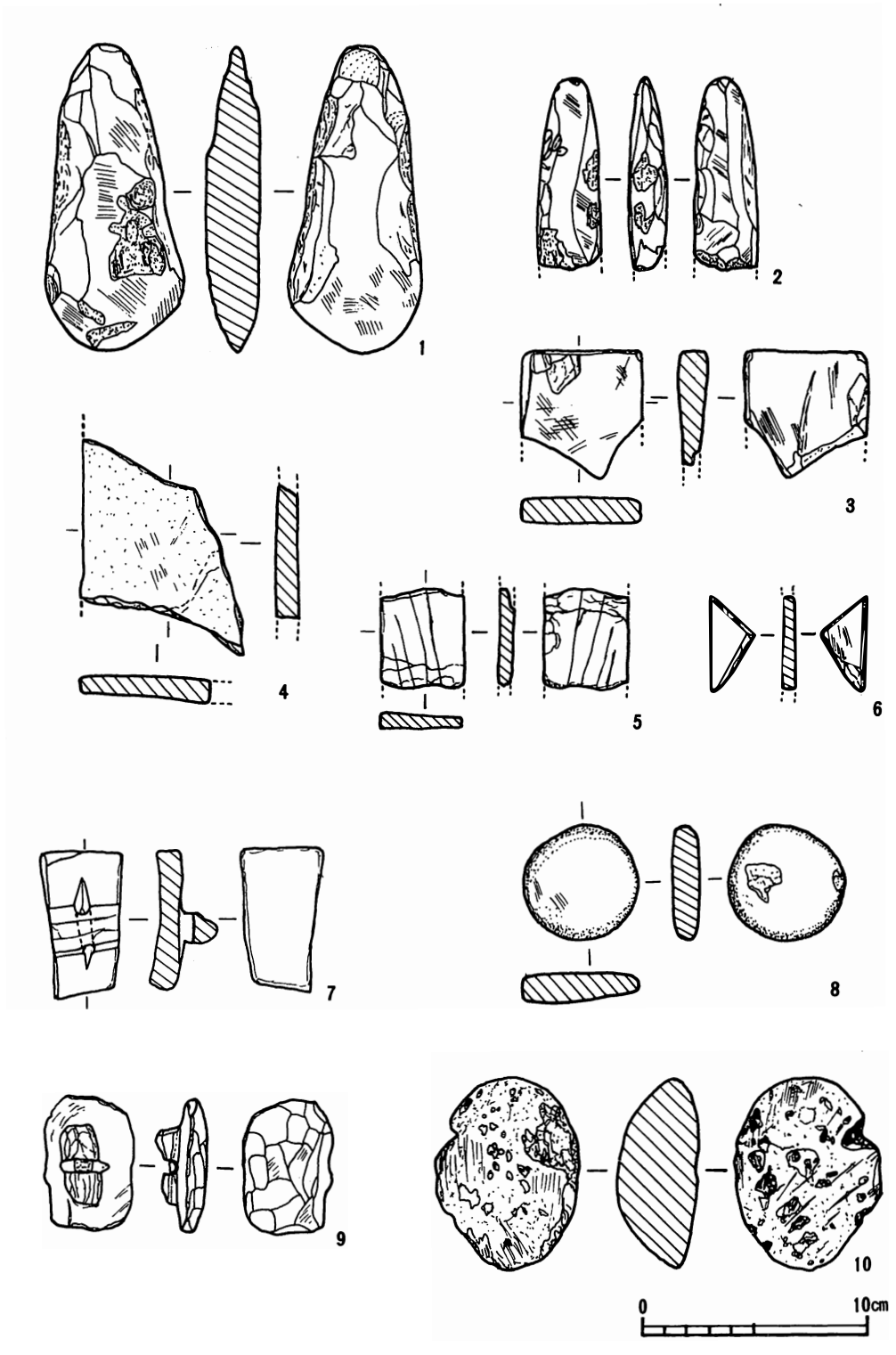
その他の石製品（第30図７～10）

７は滑石製石鍋の転用品である。袴の部分を含めて、全体を梯形に削り、四周は研磨されている。袴の上から下へ貫く穿孔がある。

８も滑石製品である。一方は亀甲状を呈し、他方に鈕状の突起を有する。突起は中程で折損しているが、円孔を有し、孔には鉄芯が遺存している。全体に煤が付着している。本県でも下益城郡小川町・年の神遺跡や球磨郡多良木町・相良頼景館跡、また福岡市・多々良遺跡等からも類似品が出土しているが用途不明である。

９は円盤状の石製品で、直径 5.1～ 5.2cm、厚さ 1.2cm前後である。全体はよく研磨され、周囲の約$\frac{1}{3}$程はとくに強く研磨されている。用途不明。

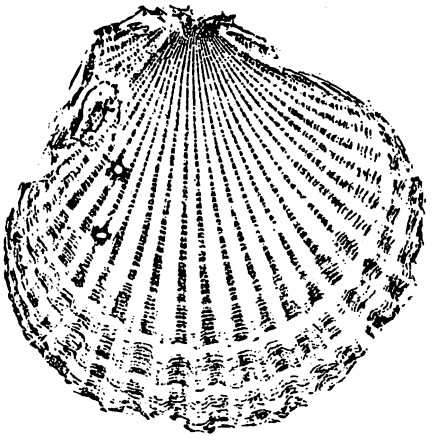
10は軽石で、一面はすり減っている。近年まで使用されていた鍋磨きを連想させる。長さ8.6cm、幅 6.4cm、中心部の厚さ 3.8cm。



第30図　石器・石製品実測図

⑽貝 製 品（第31図）

二枚貝のヒオウギを加工した貝杓子が１点出土した。柄を装着し固定するための小さな穴を２個穿っている。縦10.1cm、横10.3cm、Ｂ－２－10出土。



第31図　貝製品拓影

⑾土 製 品（第32図１～５）

管状土錘が５点出土している。

１は長さ4.0cm、最大径1.1cm、重量3.9g。整形は雑であるが、焼成は良く堅い。暗褐色を呈する。A－５－９出土。

２は長さ4.1cm、最大径0.95cm、重量2.6g。整形は雑である。明褐色を呈する。Ｃ－３－９出土。

３は一端が欠損している。現存長 3.5cm、最大幅 0.8cm、重量 2.1g 。遺存する一端は細くなる。指ナデ痕が残る。暗褐色。Ｃ－３－10出土。

４は現存長 2.6cm、最大幅 1.0cm、重量 2.0g 。表面は摩滅している。Ａ－３－９出土。

５は現存長 2.1cm、最大幅 1.0cm、重量 1.5g 。焼成・色調とも１に類似する。Ａ－３－９出土。

⑿金属製品

耳環（第32図６）

耳環が１点出土した。表面は剝落し、金張りか銀張りか不明。芯は銅で、中空ではない。Ａ－４－９出土。他に須恵器の細片も２～３点出土しており、近くに古墳があり、破壊され混入したものであろう。

鉄器（第32図７・８）

４点出土しているが、２点は細片で、形状・用途等を知ることはできない。

７は角釘の残片。長さ 6.8cm、断面形は1.1×0.8cmの隅丸長方形を呈する。Ｂ－１－10出土。

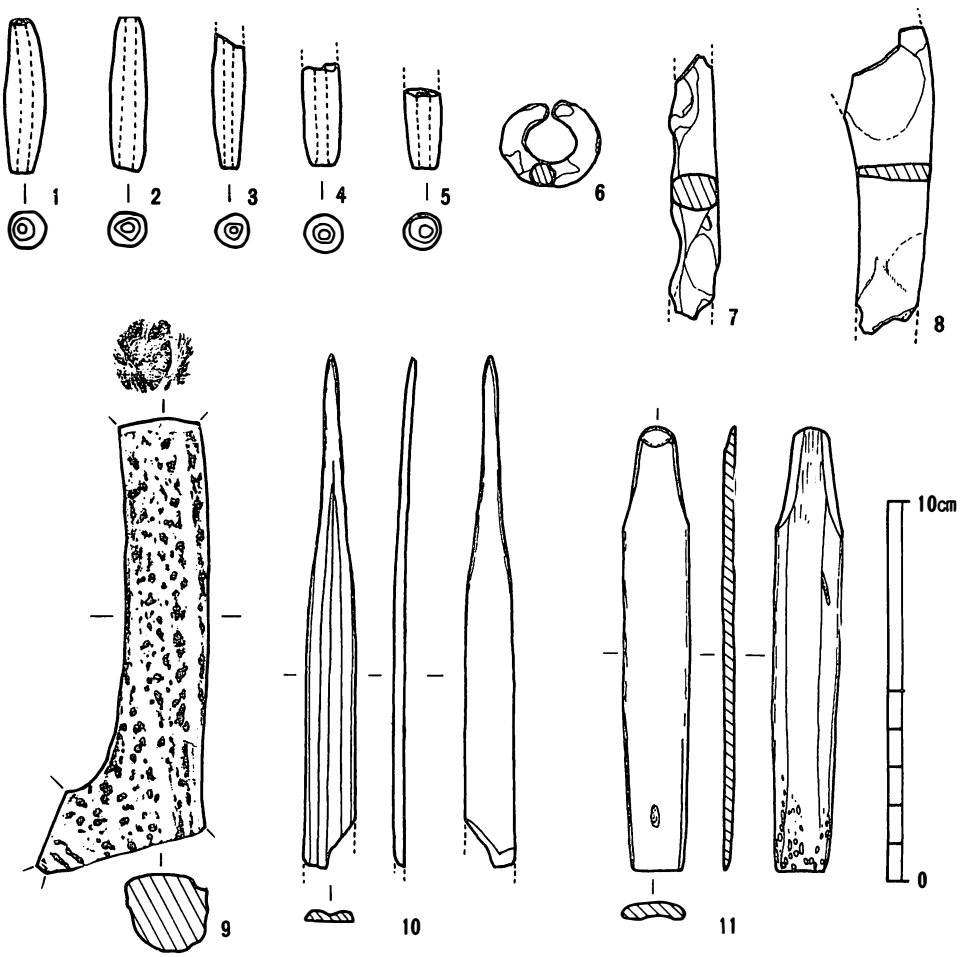
８は利器の茎の部分と考えられる。現存長 8.0cm、幅は 1.6～ 2.3cmで、わずかに反りがある。厚さは３～４mm、目釘穴はない。遺存状態は比較的良好である。鎌の茎と考えられる。Ａ－４－９出土。

⒀骨 角 器（第32図９～11）

９は鹿角の未製品である。第１枝から第２枝の間の部分で、上下端及び第１枝の部分は切断している。上端の切口には荒い削痕が残る。下端と図の左下端の切口は正滑で、削痕からみて鋸による切断と思われる。この３ヵ所の切断の他には加工の跡はみられない。

10は刺突具で下端は欠失する。管骨を用い、一面は自然面を残し、他の面は研磨している。先端は両側から削り込み、磨きをかけて、きわめて鋭く仕上げている。現存長13.5cm、幅 1.4cm、厚さは3mm前後を測る。

11は篦状のもので、長さ11.7cm、最大幅 1.8cm。先端は両側から削り込むが、尖らず丸味をもつ。



第32図　土製品・金属製品・骨角器実測図

⑭古　銭（第33図）

完形品４枚と破損品１枚の計５枚が出土した。撹乱層や石列の南側の砂層からの出土で、直接時期決定の資料とはならない。

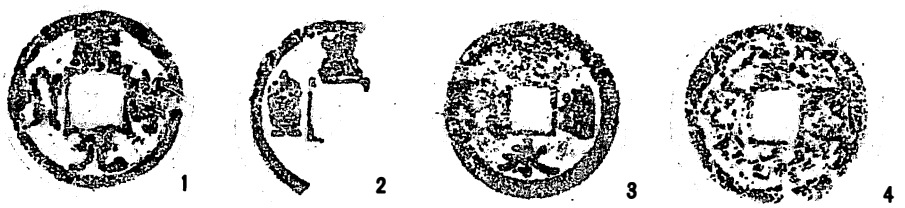
内訳は宋銭２枚、日本銭（寛永通宝）２枚、判読不明１枚である。

１は熙寧元宝（初鋳年1068年）で宋銭である。黄銅色を呈し、遺存状態は良い。やや雑な鋳出しで、文字は本来不鮮明であったと考えられる。

２は破損品で、皇と宝の字がみえる。宋銭の皇宋元宝（初鋳年1039年）か。薄く仕上がっている。

３・４は寛永通宝。３は永通の文字は明瞭であるが、寛はかろうじて読み取れる。宝は錆のため判読不能。４は錆がひどく、全体的に読みづらい。寛永□宝とかろうじて判読される。

他に鉄銭が１枚ある。錆がひどく判読できない。材質からみて寛永通宝と考えられる。



第33図　古銭拓影（実大）

⑮製鉄関係遺物

ふいごの羽口の細片２点と、スラッグが１点出土した。

ふいごの羽口は、５㎝未満の細片で、いずれも強く熱を受けており、１点にはガラス質のスラッグが付着している。

スラッグは長径10㎝、短径９㎝。多孔質で比重は小さい。分析を新日本製鉄八幡製鉄所技術研究室、大澤正己氏に依頼した。分析結果については付論２を参照されたい。

今回の調査は貝塚部分だけであったので、製鉄関係の遺構は検出されていない。

⑯縄文式土器（第34図）

高橋貝塚関係とみられる縄文式土器が７点出土した。層位的な出土ではなく、９・10層への混入である。

１はわずかに外反する口縁部。篦状のもので太目の平行文を描く。胎土・焼成とも良く、赤褐色を呈する。Ａ－１－10出土。

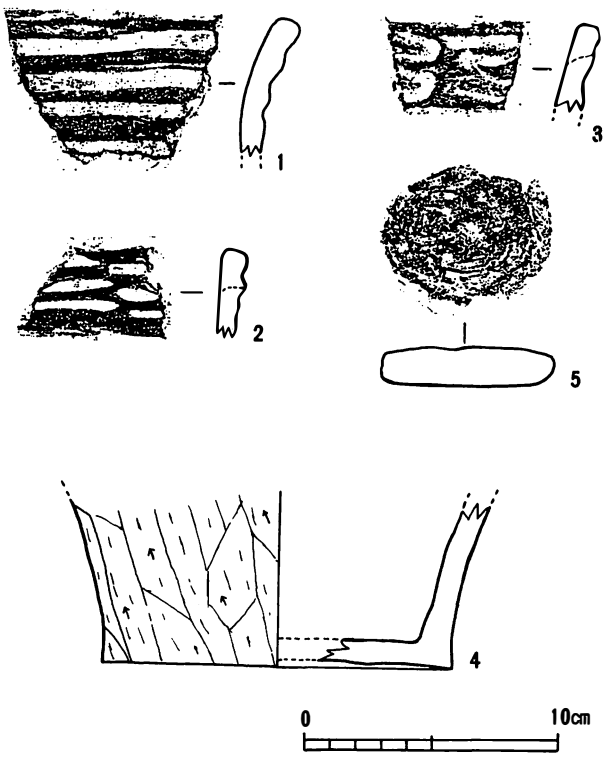
２は口縁部の小破片。篦状のもので平行文を描く。胎土・焼成とも良好で、外面は暗褐色、内

面は赤褐色を呈する。A－4－9出土。

3も口縁部の小破片。篦状のものによる曲線文を描き、口縁部には山形の突起がつく。胎土に砂粒を含み、黒褐色を呈する。A－5－9出土。

4は底部の破片で平底。復原底径14.1cm。内面はナデ。外面は斜め方向に削られている。A－5－9出土。

5は底部を加工した土製品。長径 6.8cm、短径 5.9cmの不整な長円形。厚さは 1.3cm前後を側る。B－4－9出土。



第34図　縄文式土器実測図

(17)自然遺物

自然遺物として、貝類・獣魚骨・植物の種子類がある。

貝類については第Ⅲ章－2及び付論1を、獣魚骨については付論4を参照されたい。

植物の種子については、選別作業等の関係で調査依頼をすることができなかったが、桃（図版25）が最も多く100個以上出土している。他には炭化米やウリ類などがみられる。詳細については後日を期したい。（松本）

第Ⅳ章　調査の成果と問題点

1．出土遺物について

縄文時代

少数ではあるが、縄文時代の土器・石器を出土した。出土状態はプライマリーな状態ではなく、中世の包含層、貝層への混入であるが、隣接する高橋貝塚の年代を示唆するものといえよう。従来高橋貝塚の年代は、縄文中～後期[註1]とされていた。今回の出土土器についてみる限りにおいては後期前半に限定されるようである。今回出土したものは数量的にも少なく、これで決定できるものではないが、今後検討されるべき課題となろう。

古墳時代

やはり混入した状態で金環・須恵器片が出土した。須恵器はいずれも細片で図示不可能であるが、甕の破片でみると6世紀末～7世紀前半頃の年代が考えられる。この一帯に古墳、とくに後期古墳が群在することはすでに述べた（第1章2）が、最も近距離にあるものとして高坊古墳や城山古墳群等がある。ここに出土した遺物は、これら近隣の古墳からの移入であろうが、現存するものでなく、もっと至近に破壊された古墳の存在を考えるのが妥当であろう。

中　　世

本遺跡の主流を占め、量も多い。内容的にも人工遺物・自然遺物ともに豊富である。

これらの中で、瓦器と青・白磁は貝塚形成の年代を知る指標である。

瓦器については福岡県下の資料を中心とした森田勉氏の編年試案[註2]がある。熊本県内においても最近資料[註3]が増加しつつある。しかし、燻しやヘラミガキ・焼成等の細部については若干の相違がみられるようであり、今後の課題となろう。本遺跡出土の瓦器はすべて碗であり、貝塚及び貝層下の包含層から出土しており、その両者に変化は認められない。現状で森田氏の編年に比定すれば、Ⅲ－ｂ～Ⅲ－ｃに最も類似し、その実年代は12世紀末～13世紀初頭に位置づけられている。

青・白磁は量も多く、器形も碗・皿・鉢などがある。表採では、明・16世紀代の高台付皿が1点みられたが、発掘で得られた青磁はすべて13世紀代に属するものと考えられる。所謂猫描文を有する同安窯系青磁（第10図）の他は竜泉窯系の所産である。

白磁の中で、篦描文を有する高台付皿（第6図14）は12世紀代に遡らせることができるが、他は青磁同様13世紀代と考えられる。

次に土師器は、土器類の中では最も量が多い。すべて図示していないが、図化できたものは皿371個、坏145個にのぼり、図化不能の細片は莫大な量にのぼる。熊本県内においては、これら土師器の編年等の研究は未だ進んでおらず、今後資料の蓄積を待って着手しなければならない

問題である。紀年銘のある木札との共伴など、好資料に恵まれている福岡、とくに太宰府周辺の成果を援用し、一応の目安としたい。

御笠川条坊遺跡出土の土師器[註4]は4類に分類されている。各類には各々を特徴づける器種が共伴するという。その中で、Ⅱ－3類には高台付小皿が伴うとされ、その年代は、太宰府町五条の東大溝出土の「貞応三年十一月日」(1224年)銘木札共伴の土師器との関係から、Ⅱ－2類からⅡ－3類への移行期ないしⅡ－3類の初頭がちょうど木札の時期に相当する、と考えられている。

本遺跡出土の土師器には、少数ではあるが明らかに高台付小皿が含まれており、上記の成果からみると、13世紀前半～中葉の年代を暗示している。

須恵質土器は須恵器の系譜と考えられる一群の土器で、こね鉢・擂鉢・甕・壺・土鍋がある。こね鉢は最も多い。完形品はないが、破片の状態からみて、ほとんどが片口をなすものと考えられる。この種の土器は、従来から各地域ごとの生産が想定されていたが、実際の窯跡はほとんど知られておらず、今後の課題である。只、熊本県においては、荒尾市・樺番丈窯[註5]が中世雑器の生産窯として注目されている。須恵器の窯跡群として知られている小代山麓古窯跡群[註6]のなかには、あるいは、中世雑器の生産窯が他にもあるかもしれないと秘かに考えている。

河川敷という立地の特殊性から、木製品の出土が多いのも本遺跡の特色の一つである。下駄や曲物の一部等、当時の生活を如実に示している。木製品のなかには、用途不明のものも少なからずある。 今後、類例の調査や民具との比較等残された課題である。

骨角器は3点が出土している。鹿角の半加工品は、その裁断に鋸状のものを使用していることが切断面により観察され、中世の遺物と考えたい。他の1点の箆状のものにも、鉄器と考えられる鋭い刃物による削痕がみられ、貝塚形成時のものと判断される。

本遺跡でも製鉄関係遺物として、ふいごの羽口2点とスラッグ1点が出土している。中世遺跡における製鉄関係遺物の出土、そこから導き出せる中世遺跡における鉄生産のあり方については、以前述べた[註7]ことがあるので詳述しない。スラッグの分析の結果は多くの問題を提示している。分析結果の詳細については付論を参照されたい。(松本)

註1．今村克彦「高橋貝塚」『熊本市西山地区文化財調査報告書』所収、昭和44年。

註2．森田勉「九州地方の瓦器碗について」『考古学雑誌』第59巻2号、昭和48年。

註3．註2論文では、肥後における出土例を1カ所掲げてあるが、現在10遺跡余が知られている。

註4．前川威洋「土師器」『福岡南バイパス関係埋蔵文化財調査報告書第2集』福岡県教育委員会、昭和50年。

註5．三島格『熊本の歴史』1解説、熊本日日新聞社、昭和33年。
乙益重隆「須恵器と瓦窯跡」『熊本県史 ・総説編』所収、昭和40年。

註6．坂本経堯『小代山麓古窯址群調査報告』 昭和25年。

註7．松本健郎『中世遺跡における製鉄関係遺物について」『蓮花寺跡・相良頼景館跡』熊本県文化財調査報告第22集、昭和52年。

2．貝塚形成の年代と背景

本遺跡における遺物の出土層は、貝層と貝層直下の黒色～黒褐色土の二層に大別される。この二層の出土遺物、とりわけ土器類を比較してみた場合、その間には何ら差異はなく、年代差を見出すことはできない。

遺物の中で、年代の指標となるものについてはすでに前節で述べたが、瓦器、青白磁、土師器から得られる最大公約数的な年代は、12世紀末～13世紀となり、鎌倉時代前半とみて大過なかろう。

その後、室町時代・江戸時代に一部攪乱を受け、それぞれの時代の遺物を若干含む地点も見られた。

貝類の遺棄された方向は、地形・貝層の範囲・貝層の断面等の観察により、北側からであったろうと推定される。次節で述べるとおり、坪井川の流路が現在の如くなったのは近世以降であるが、貝塚形成時の中世においても小河川（池上川）が現流路とほぼ同じく流れていたと考えられる。それは石列の存在やC列、D列における砂層の存在が物語っているといえよう。すなわち、坪井川ほどの大きな河川ではないけれども、やはり河川に向って川岸に遺棄された貝類等が堆積して形成されたと考えられる。

今回の調査は貝塚部分に限定され、その背景となった集落については未調査である。おそらく現在の町並と重複して当時の集落があったものと推測されるが、文献・金石文の面からも当地域の中世の様相については空白となっている。

集落の様相が不明な段階では推測の上の推測となってしまうけれども、中世としては最大級の貝塚を残した要因は何であったのであろうか。鎌倉時代ともなれば荘園制も確立し、荘園内の商業活動も活発化する時期である。これ程大量の貝類も、個人の消費のみならず、専業的に捕獲し、商品として流通した可能性も強いと思われる。出土した貝類には、きわめて小さい稚貝や、食用には不適と思われる貝を含んでいる。このことは、所謂潮干狩的に手で採集したものばかりではなく、器具を用いて大量的に捕獲したものが含まれていると考えられる。さらにイタヤガイ・ヒオウギなどの深海性のものも若干含まれており、専業的な様相が感じられる。これをもって、貝塚形成の背景となった集落が漁業集落であるとするのは短絡的であるが、少なくともその要素はきわめて強いと考える。

なお、当貝塚出土の木炭を試料として、社団法人・日本アイソトープ協会に^{14}C年代測定を依頼した。測定結果は下記のとおりである。

	出土区・層	試料	測定コード	^{14}C　年　代	備　考
1	A－1区10層	木炭	N－2688	1050±80y.B.P(1020±75y.B.P)	貝層下黒褐色土
2	C－4区9層	木炭	N－2689	720±75y.B.P(700±75y.B.P)	貝　層

備考　年代は^{14}Cの半減期5730年（カッコ内はLibbyの値5568年）にもとづいて計算され、西暦1950年よりさかのぼる年数（years B.P）として示されている。

この測定結果は、年代の隔たりを別にすれば、10層の測定値が古く示され、層位的な観察と矛盾しない。ただ、前述したように、考古学的にみれば（とくに出土した土器類）9層と10層の間には大きな年代差はないものと考えられる。（松本）

3．近世の高橋と自然環境の復原

高橋の繁栄　近世における高橋は、熊本・川尻・高瀬・八代とともに五ケ町と称され、特別な取扱いをうけていた。熊本は城下町、高橋には薪炭会所がおかれ、他には藩の米倉があったからである。

高橋町は高橋町奉行の支配下におかれていた。作成年代は不明であるが、「飽託郡高橋町の絵図」（熊本県立図書館蔵）によると、坪井川の川筋に沿って町奉行所や林木方・杣方[註1]がみえ、坪井川を航行する帆船が描かれている（図版26）。このように、高橋町は河港としての機能を発揮し、肥後藩における重要な役割を担い、港町として発達していたのである。

このことは、明治10年代に富岡県令によって計画された坪井川河口近くの熊本港（百貫石港）計画に受継がれたと考えてよかろう。この計画の基礎調査の為に、内務所土木局の技師ムルドルが派遣され、調査活動を行っている。この築港計画は多額の費用を要するということで採用されず、三角が新港の地に選ばれた。これが三角西港である。ムルドルの調査資料の一部は県立図書館に所蔵されている。

河川の変遷　上述したように、近世の高橋は河港としての機能を有し、肥後藩において重要な役割を果していた。

本書で報告する高橋南貝塚は、貝塚部分のみの調査であったが、貝塚の規模、出土遺物の質量から考えて、かなりの規模の集落を背景として形成されたものと考えられる。この集落の性格を考えるうえで、自然環境の復原は有効であり、また必要なことである。ひいてはこのことから河港としての高橋の発達の歴史をも導き出せるからである。

井芹川は比較的新しく、昭和初期に大きな流路の変更がある。井芹川は、坪井川水系では最大の支川であり、現在は熊本市高橋町上高橋、高橋南貝塚の上流約170ｍの地点で坪井川に合流している。この井芹川は、市街地の治水対策として大規模な付替工事が計画され、昭和6年～10年にかけて工事が実施[註2]されている。この工事は、花岡山北西方の戸坂の丘陵を切り割り、独鈷山北方の池上を経て、上述の上高橋で坪井川に合流させるというもので、この付替工事によって現在の流路を流れるようになったものである。

この付替工事以前の流路については、明治時代の地形図等によって窮うことができる。ちな

みに、明治34年発行2万分の1「川尻」でみると、井芹川は花岡山の東を流れ、鹿児島本線と交叉するあたりで坪井川に合流している。

坪井川もまた大きく流路を変えている。坪井川はもと白川に合流し、その上流の市街地における流路も現在とは異っていた。この坪井川の流路改変は、加藤清正の隈本城築城によるものである。

加藤清正の隈本城築城の時期には諸説があるが、一般的には慶長6年に着手し、慶長12年に落成[註3]したといわれている。これにあたり加藤清正は、隈本城の防備と治水対策の為坪井川の付替を実施したと伝えている。これ以前の坪井川は現河道より東側を流れ、現在の長六橋付近で白川に合流していた。この坪井川の河道を改め、隈本城の外周沿いに曲流せしめ、北岡の丘陵の東側へ導き、石塘を築いて白川と分流し、西へ流し、高橋・小島を通して有明海へと流した。これによって坪井川は、隈本城の東・西面の外濠としての機能を果し、さらに石塘による白川との分水によって治水をも果し、さらに清正は坪井川の舟運をも意図したことが『藤公遺業記』[註4]に次の様に記載されている。

一. 坪井川之末白河に入来りし所(今の古川町也)塞き唐人町の裏を堀通三町目の橋に至り夫より下井芹川に会し高橋町を経て海に入比川堀替の子細は第一御城御要害の為其国家府中便利を兼又其次には池田横手両手永水引の為也御城の要害は目前に見ゆれ共慶長年に堀替成たる新川の訳不知人多しとなん其次国家府中の便利は白川は砂河にて後年海口高くなり通船の便りを失ひ府中より積下の品を始海中より積登す品々不通に成ん事を慮り給ひて坪井川井芹川を会せ給ひしとなん今白河の海に入所を見るに荷を積たる船の通路絶たり加之高橋川の様に白河の砂流入る故高橋川の水尾竹洞梅洞方へ流其未放島に寄(近津村の島一名は盗島と云ふ)維善寛政の昔松下久兵衛大夫の命を奉じ白河の海口の砂高橋川に入通船の障に成を見其害を除仕法を見計けるに平水にも砂流れ下り増水毎に砂を置揚る事如何ともする事不能なり依之(維善)存奇は白河砂置揚るに従い新地開き其租を普請料に備え床海際迄新地にて砂留仕外無之段申達松下太夫被感其通の仕法最上ならんと被仰其後小山門善に松下太夫の時白川口の事を語る小山門善同意有て白河砂留(高橋川不入砂留なり)の為新地築立に成是を砂新地と云於是名将の数百年の後を慮り給ひ高橋川口の船府中に通船永代無窮に伝へ給ひける故しらすしらす其沢を蒙らさるものなかりき又其次池田横手両手永田水引の事は慶長以前は石塘の所白川の塘危く洪水毎に其塘破壊して小川井芹川の末に流入砂突埋横手池田の田水懸り兼旱田に及ける故塘底より石を以て築立白川塘の不崩様比処に水取礒を営み給ひける故両手永の田地四百壱町五畝廿七歩 (弐百八十町壱反池田百廿町廿七歩横手) 白河塘不破様に石塘にて堅固に成し故小川突埋る害を免る比時杉島新川新御城台一同之経営ありける由毎日朝五時夕七時二度宛御出馬にて御覧有し也(以下略)

井芹川、坪井川の流路の変遷を総合すると、加藤清正の隈本城築城以前においては、坪井川・井芹川ともそれぞれ別個に白川に流入していたことになる。すなわち、貝塚の所在する高橋を坪井川が流れるようになったのは隈本城築城以後であるということができる。このことは、河港としての高橋の発達は隈本城築城以後であることを示している。

熊本県立図書館に所蔵される肥後藩絵図[註5]で最古のものは、慶長12年(1607)～寛永13年(1636)の間に作成されたと考えられる「肥後国の絵図」であるが、糊が離れてばらばらになっていて閲覧不能となっている。さらに細川綱利時代の作とされる「肥後国の絵図」は17世紀中葉～後半のものであるが、高橋川口（坪井川口）のところに、

比河口より高橋町迄壱里、比間の深潮時には七八尺、かれ潮には三尺、四尺の間

と注記されており、17世紀中葉前後の高橋の自然的条件を知ることができる。

このように、近世における高橋付近の自然的条件については大略を知ることができるが、中世になると資料が皆無に等しい。将来、発掘等による面的な資料の蓄積がなされれば、この問題も解決できるであろうが、これまでの作業を通して最低限言えることは、中世の高橋には大きな河川はなかったということであり、ひいては港としての機能は果し得なかったということである。只、「飽託郡高橋町の絵図」に、現在の井芹川河道の部分に小さい川が描かれており、これは池上方面から流れる池上川と考えられるところから、遺跡の近傍を小川が流れていたことは間違いなかろう。

さらに、遺跡との直接的な関わりはないが、白川の流路について略述する。

現在の白川は、熊本駅の南方でほぼ直角に折れ、坪井川と並行して西流し有明海に注いでいる。

古代・中世における白川は、西に曲流せず、南に流れて緑川と合流していた。それを示す資料として、熊本平野における条里制施行状態と大慈禅寺の「寒巌義尹文書」がある。また白川以南の鹿児島本線沿いの遺跡の分布・立地もそのことを暗示している。

熊本県教育委員会が実施した県下の条里制調査[註6]によると、熊本駅の南側の国道３号線付近を境にして、その東側と西側とでは条里の施行方向に差異があり、その間を白川が南流していたことを示している。

重要文化財に指定されている「寒巌義尹文書」[註7]のうち、「大渡橋幹縁疏」は建治２年（1276）のものであるが、白川が緑川に合流していたことを次のように記している。

鎮西肥後州大渡者九州第一難處他　尋其源流者　遠出阿蘇神池之南北　激浪如漿　謂之白河也　遠廻甲佐靈嶽之西東而碧潭似藍　謂之緑河也　終其雙流一合　今見海陸都津而已　貴賤襞集両岸　喧諍前後　人馬競上　扁舟没　失身命　（以下略）

このように、鎌倉時代までは白川と緑川が合流していたことは明らかである。白川、緑川が何時、どのように分流したのか、資料的には知ることができなかった。記して今後の課題としたい。（斉藤林次・松本）

註1．杣方（そまかた）。

註2．熊本県土木部河川課の資料による。

註3．森下 功「加藤氏の肥後一円領国体制」『熊本県史・総説編』所収、昭和40年。

註4．『肥後文献叢書』第2巻。

註5．圭室諦成「肥後藩絵図について」『熊本県古地図目録』所収、昭和29年。

註6．島津義昭・牧野洋一・日野尚志・規工川宏輔「熊本県の条里」熊本県文化財調査報告第25集、昭和52年。

註7．下田曲水「大慈寺の寒巌義尹文書」熊本県文化財調査報告第3集、昭和37年。

〔付　記〕

本項に述べた河川流路の変遷について、当初地形・地質的な観点から専門調査員・斉藤林次氏が指摘された。その後文献的な資料調査の成果を含めて本項を執筆した。斉藤専門調査員からは「高橋南貝塚地質調査報告」を提出していただき、本来ならば付論とするべきところを、このような形での発表にも快く応じていただいた。記して謝意を表する。

付　　論

目　　次

1　高橋南貝塚出土の貝類について……菊　池　泰　二
2　高橋南貝塚出土の鉄滓……大　澤　正　己
3　高橋南貝塚出土木製品の樹種鑑定……大　迫　靖　雄
4　高橋南貝塚出土の動物遺存体……木　村　幾多郎

付論１．高橋南貝塚出土の貝類について

菊池泰二（九州大学理学部）

はじめに

坪井川河床泥地の調査現場において、Ｂ－２西壁、Ｂ－５南壁、Ｃ－３東壁の三箇所のグリットの貝殻堆積の集中した場所をえらび、それぞれから30㎝立方の貝殻含有土のサンプルを採取し出現する種とその量的構成を検討した。二枚貝の場合は左殻と右殻をそれぞれ別に計数し、破損標本も殻頂部が保存されているものは１箇として扱った。マガキの場合は量がおびただしい上に殻質がもろく、殊に扁平な右殻（遊離殻）は食用に供する際にもまた堆積中、発掘時にも破損し易く個体数の計数は不可能に近い。そこで今回は岩礁に固着する盃状の左殻のみを計数した。また同じ固着性二枚貝でもナミマガシワでは右殻（遊離殻）のみが保存され薄質の左殻はまったく出現しなかった。

ブロックサンプリングの貝類

定量サンプルの分析結果を第１表に掲げる。出土貝類のうち明らかに食用として積極的に採取され利用されたものと、多分食用に供されたと推測されるが量的に少なく混獲物として持ち帰られたと考えられるもの、非食用混獲種、貝塚形成後現場付近に生息し自然に混入したと考えられるものを区別し、表中の各種名の後に記号で記してある。

３箇所の共通性としてハイガイ、マガキ、シオフキの３種の二枚貝が量的に大部分を占め、それよりやや少ないがハマグリも各サンプルに共通して出土する。その他カガミガイ、オキシジミ、ナミマガシワが少数出現している。これは食用に供されたものではあろうが、カガミガイはシオフキ、ハマグリと、オキシジミはハイガイと、ナミマガシワはマガキとそれぞれ生息場所を同じくしており、前記主要種を採取する際混獲されたものと考えられる。同じマガキの混獲物でもウネナシトマヤガイ、アオカリガネエガイは食用に供されたとは考え難い。巻貝は出現種類に比べて各種とも個体数が小さく、その大きさからも積極的に採集されたものは少なく、現在でも日常的におこなわれているように主要二枚貝採取の際眼についたものだけがついでに採られ利用されるか、あるいは混入していたものがそのまま遺棄されたもの、さらに堆積過程で周辺に生息する河口性貝類の自然混入が加わってこのような構成を示すに至ったものと推測する。スガイ、コシダカガンガラ、イシダタミ、イボニシなどは潮間帯転石地にマガキと同所的に出現するし、カワアイ、ヘナタリはハイガイと同じく軟泥質干潟に、イボウミニナ、アカニシ、ハナツメタはシオフキなどと同じ砂泥質干潟に発見されるものである。フトヘナタリは大きさからみればウミニナ類のうちもっとも大きく食用価値もないとはいえまいが現代ではまったく食用とされていないし、オカミミガイ、クリイロコミミガイ、クリイロカワザンショウガイなどと共に塩分が薄い河口芦原の代表的貝類であり、これらの諸種は自然混入したも

のと判断される。

3箇所から出土した貝類の量的構成の差についてみるとハイガイはB－2・B－5の両サンプルに多く、C－3でやや少ないのに対し、マガキはB－2でもっとも少なくB－5、C－3の両サンプルの方が多い。シオフキではB－2、C－3の両サンプルの方が多い。シオフキではB－2、C－3の両サンプルがほぼ同量でB－5がもっとも多い。要するにその偏りはまちまちで採集物に共通した類似や差異は認め難い。本来これらの貝は自然での生息場所が異なるので、現在でも人により日によりこのような偏りを生じる可能性があり、これだけから意味を求めるわけにはいかない。堆積層の上下差はこの遺跡の場合、問題にならない。オカミミガイ以下の自然混入とみられる小巻貝がB－2にはほとんどなくB－5、C－3に多く出土することは、河川敷内のこれらの貝がすめるような環境の分布にわずかな差があったことを示唆しているかも知れない。

任意採集の貝類

上記の定量サンプルのほか、発掘現場での任意採集による貝類標本の査定を依頼された。大部分は定量サンプル中に出現した種と同じであったが、重複しない種、大型種について言及すると、アカニシ老成殻、テングニシ老成殻、ツメタガイ成殻など殻質重厚な大型貝が少数採集されているがいずれも殻の体層あるいは殻頂近くを破壊されており食用に供されたことを示していた。バイも1箇だけ成貝が得られている。二枚貝では泥質干潟にすむアゲマキの殻片数箇と、大型のイタヤガイ、ヒオウギ、イタボガキ各2～3箇があったが、後の3種は低潮線下に産するもので殊にイタヤガイ、ヒオウギは外洋水が影響する10m以深の砂底に分布する。またハマグリも充分老成した大型貝が少数混じっていた。

〔付　記〕

現地調査の折、足を伸ばして現在の坪井川尻の海岸にすむ貝類を調べた。海岸の転石にはマガキがごく普通であり、それにまじってウネナシトマヤガイ、イボニシ、オガイ、ムシロガイ、イボウニミナなどが生息する。岸に近い軟泥質干潟にはハイガイが多産するほか、サルボウ、イチョウシラトリ、カワアイ、サキグロツメタ、ゴマフタマガイなどを産することを直接観察および打上げ貝類の採集によって確かめ得た。緑川河口方面にかけて広がる広大な干潟の低潮帯砂泥地にはアサリとシオフキが、砂地にはハマグリが生息し現在も盛んに利用されている。高橋貝塚は成立も新しく多少海岸線の移動はあっても生物相とその分布環境は現在と大差ないとすると、出土貝類は低潮線下にすむ少数の大型種を除いてはいずれもきわめて容易に採集可能であったと判断される。

付1-第1表　高橋南貝塚出土貝類の量的構成

	記号	B－2 西壁	B－5 南壁	C－3 東壁
二枚貝				
ハイガイ	◎	右殻135　双殻1 左殻124	右殻342　双殻2 左殻327	右殻59　双殻2 左殻69 右殻1　双殻1 左殻1
サルボウ	○	右殻 2　左殻2	0	
ハマグリ	◎	右殻23　左殻16	右殻 12　左殻14	右殻 7　左殻8
カガミガイ	○	右殻 1　左殻2	0	0
マガキ（左殻）	◎	84	179	266
シオフキ	◎	右殻 25　左殻30	右殻 67　左殻74	右殻 23　左殻27
ナミマガシワ（右殻）	○	2	4	0
イタボガキ	○	0	1	0
オキシジミ	○	0	右殻 2　左殻3	右殻 1　左殻1
フジナミ（破片）	○	0	0	1
ウネナシトマヤガイ	×	右殻 1	右殻 2　双殻1 左殻 6	右殻 3
アオカリガネエガイ	×	右殻 1	0	右殻 3
小計		449	1.036	473
巻貝				
イボウミニナ	○	31	1	12
カワアイ	△	9	4	3
フトヘナタリ	△×	44	3	12
ヘナタリ	△	1	0	0
シマヘナタリ	△	0	1	0
スガイ	○	7	1	9
コシダカガンガラ	○	3	0	0
イボニシ	○	1	0	0
イシダタミ	○	1	0	2
アカニシ	○	1	0	0
ハナツメタ	○	1	0	0
ゴマフタマガイ	○	1	0	0
ウミニナ	△	0	1	0
イボキサゴ	△	16	3	6
ムギガイ	×	1	0	0
アラムシロ	×	3	0	0
アマガイ	×	1	0	0
オカミミガイ	×	1	6	3
クリイロコミミガイ	×	0	7	38
クリイロカワザンショウ	×	0	44	71
ワカウラツボ	×	0	5	6
カワグチツボ	×	0	0	2
マルウズラタマキビ	×	0	0	3
タマキビ	×	0	0	1
小計		122	76	168
合計		571	1.112	641

註1．表中、種名の記号は次のとおり。
◎主要な食用種　　○食用ではあるが附随的に採取されたもの
△実際に食用に供せられたかどうか不明のもの
×利用価値のない混入種及び堆積後自然混入したもの

註2．個体数合計の項では、二枚貝の左殻、右殻は別個体として、双殻のものは1個体としてとり扱った。個体としての評価にはいずれか多い殻の殻数を用いるのが正しいようでもあるが、左右対合しないものが多い。

付論２　高橋南貝塚出土の鉄滓

大澤　正己　（北九州郷土史研究会）

１　はじめに

熊本県熊本市高橋町に所在する高橋南貝塚出土の鉄滓１個について、鉱物組成と化学組成を検討したので報告する。

当貝塚は、坪井川の河川敷の一部に築かれた中世(鎌倉時代)の遺跡であり、河川改修事業に伴ない熊本県教委によって昭和51年３月から６月にかけて発掘調査され、中世遺物に共伴して鉄滓１点と、ガラス質スラグの溶着した羽口小片(３～４㎝)２点が発見されている。発掘調査区域が貝塚に限定されたためか、製鉄遺構の発見はなかったが、周辺は遺構検出の可能性が考えられるので、今後は十分な注意が必要であろう。

２　調査方法

試料及び調査項目

供試鉄滓は、調査区Ｃ－３区、第９層(貝層)から採取されたものである。この鉄滓を水道水で十分に洗滌した後、検鏡用と分析用に二分割した。検鏡試料は、鉄滓中央部から採取してベークライト樹脂に埋込み、エメリーペーパーの＃150, ＃240, ＃320, ＃600, ＃1000で荒研磨し、仕上げに酸化クロム，アルミナを用いている。また、分析は湿式法の定量分析を行った。

３　調査結果

鉄滓の外観と鉱物組成は図版１に、また化学組成を第１表に示す。

a) 肉眼観察

表皮は赤褐色と灰色の中間色を呈し、比較的なめらかである。裏面に木炭の噛み込みと貝がらの付着が認められる。破面は気孔多く比重は軽い部類に層する。10×50×90㎜、90g。

b) 顕微鏡組織

鉱物組成はガラス質の地に樹枝状のマグネタイト(Magnetite：Fe_3O_4)微結晶と金属鉄(Metallic Fe)の錆化したゲーサイト(Goethite：$Fe_2O_3 \cdot H_2O$)によって占められている。この鉄滓は羽口付近で生成された為、かなりの高温に達し、その冷却過程で晶出したマグネタイトが存在している。

c) 化学組成

分析結果を第１表に示す。全鉄分(Total Fe)は36.87%残留し、造滓成分(SiO_2＋Al_2O_3

＋CaO ＋MgO）は 35.75％で、顕微鏡組織で観察した鉱物組成とは若干ズレが認められる。すなわち、鉱物組成から考えてガラス質が主体をなしているので、全鉄分（Total Fe ）は10％前後、造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO ＋MgO ）が70～80％程度を指す筈であり、斯様な結果が出たのは成分偏析のせいであろうか。化学分析値のみで鉄滓の性状推定を行う場合は慎重を期する必要がある。

また、この種のガラス質鉄滓から、製錬滓か鍛冶滓かを区別して製錬条件の過程を追求するには不適当な試料である。製錬滓は、製鉄原料中の不純物成分と炉材粘土等の造滓剤の混融物であるため、二酸化硅素（SiO_2）、酸化アルミニウム（Al_2O_3）、酸化カルシウム（CaO）、酸化マグネシウム（MgO）等造滓成分が鍛冶滓に比べて高目になる。この時、鉄鉱石を使用しておればマンガン（Mn）、銅（Cu）、硫黄（S）、燐（P）等有害微量元素は高目になり、砂鉄であれば逆に有害微量元素は低目で、二酸化チタン（TiO_2）やバナジウム（V）が高目になる。

しかし、羽口周辺部の高温に上昇する鉄滓は、一般的鉄滓の構成成分とはやゝ異なった挙動を示すので、一基の製鉄炉の代表試料にするには不適当である。

次に鍛冶滓であれば、酸化鉄と混入金属鉄に原料中の鉄中の夾雑スラグが絞り出されてきて混じたもので、造滓成分（SiO_2＋Al_2O_3＋CaO ＋Mgo）の多くは製錬時に喰われているので、製錬滓に比べて少なくなる。以上の事を念頭において、強いて結論を出すなら、二酸化チタン（TiO_2）が 0.33％、 バナジウム（V）はTrace （痕跡）で両者とも低目なので、これが製錬滓であれば鉱石使用の成分系とみなされ、砂鉄使用であれば鍛冶滓であろうが、現時点ではその決定は困難であるといった程度で留めたい。

もともと、古代製鉄炉は、炉容量が小さく温度分布も不均一で成分偏析もかなり大きなものとみなされるなかで、１塊の鉄滓だけで結論を出すのは無理であり、今回は古代製鉄技術の発展過程の手掛かりを得るための資料として掌握し、今後の発掘調査を待つべきと考える。

尚、現在熊本県下では鉄滓の分析資料が少ないので、参考のためにデータを第１表の参考欄に記載しておく。高橋南貝塚出土鉄滓は、蓮花寺跡・頼景館①、浜の館②出土の各鉄滓に近似した成分構成であり、又、柳迫③や蛇ケ谷④の製錬滓とは二酸化チタンで大差があるのが判るであろう。この様に高橋南貝塚出土の鉄滓は顕微鏡観察による鉱物組成を無視すれば鍛冶滓タイプに位置づけられる。

４　まとめ

今回調査した南高橋貝塚出土の鉄滓は、製錬滓か鍛冶滓か判定に苦しむタイプの鉄滓である。すなわち、鉱物組成からは製錬滓に多くみられるガラス質の地に冷却過程で晶出した樹枝状マグネタイト（Magnetite）の微結晶とゲーサイト（Goethite）が認められる。又、化学組成は二酸化チタン（TiO_2） 0.33％，バナジウム（V）Traceと低目で鉱物組織に対応させて製錬滓と仮定す

ると、鉄鉱石を用いた生成物の構成成分とみなされる。しかし、現時点で熊本県下のたたら滓に鉱石使用の先例がなく⑤、鍛治滓と考えれば砂鉄使用と見なすべきであり、最終的には他日に別鉄滓を採取して再分析を行うか、遺構の検出を待って結論を出すべきと考える。

〔付記〕

本稿作成に当って分析関係のDataは清水峯男氏(元新日鉄生産技術研究所部長、現在九州大学工学部治金学教室教授）の御尽力で揃ったことを銘記して感謝の意を表しておきます。

〔註〕

①大澤正己「蓮花寺跡出土鉄滓の調査」「相良頼景館跡出土鉄滓の調査」『蓮花寺跡・相良頼景館跡』所収。熊本県教育委員会。1977。

②大澤正己「浜の館遺跡出土の鉄滓分折」『浜乃館』所収。熊本県教育委員会。1977。

③湊秀雄、佐々木稔「タタラ製錬滓の鉱物組成と製錬条件」『たたら研究』第14号。1968。

④窪田蔵郎「鉄の考古学」雄山閣。1972。194頁。

⑤熊本県教育委員会文化課松本健郎氏の採取による鉄滓６個所分の検鏡及び分析結果による。

ⓐ荒尾市竜光寺製鉄址。

ⓑ荒尾市平山薬師上古城谷製鉄址。

ⓒ荒尾市たたらもと製鉄址。

ⓓ荒尾市観音寺製鉄址。

ⓔ荒尾市椛金塚製鉄址(金くそ天神)。

ⓕ玉名郡玉東町むくろじ製鉄址。

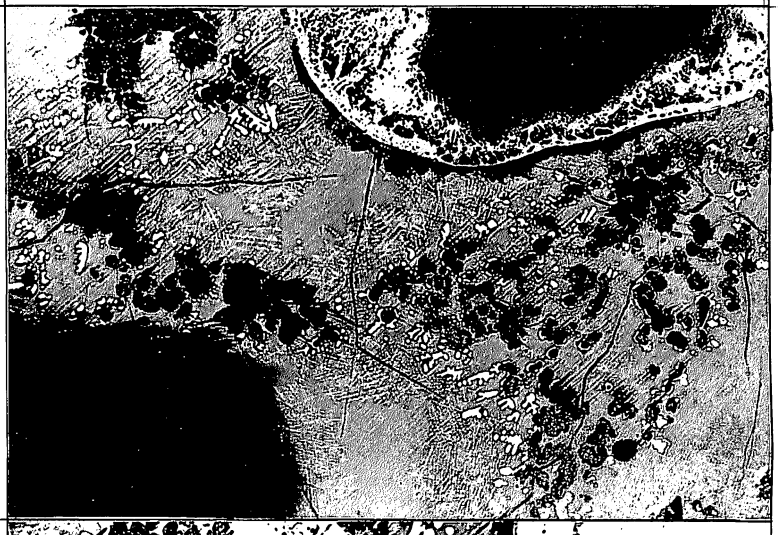
付2-第1表　鉄滓の化学組成（%）

符号		試料履歴	全鉄 Total Fe	金属鉄 Metallic Fe	酸化第1鉄 FeO	酸化第2鉄 Fe_2O_3
3 J－6		高橋南貝塚TSS，C－3－9出土鉄滓	36.87	0.28	20.20	29.87
参考値	3 L-6A	蓮花寺A－B_3，第2層 出土鉄滓(鎌倉)	67.02	0.05	62.39	24.61
	3 M-6A	頼景館 A区西外堀 Ⅴ層出土鉄滓(鎌倉)	48.69	0.11	48.86	15.16
	3 K－6	浜の館庭園部池底出土鉄滓(室町)	67.20	0.06	64.19	24.66
		宇土郡三角町中村柳迫出土製錬滓(古代)	21.22	0.14	9.05	20.07
		玉名市立願寺蛇ケ谷出土製錬滓(平安)	33.19	2.09	38.26	1.94

二酸化硅素 SiO_2	酸化アルミニウム Al_2O_3	酸化カルシウム CaO	酸化マグネシウム MgO	酸化マンガン MnO	二酸化チタン TiO_2	酸化クロム Cr_2O_3	硫黄 S
22.55	4.48	7.20	1.52	0.12	0.33	0.011	0.358
5.25	1.97	1.07	0.34	0.09	0.09	0.011	0.032
24.80	4.54	1.77	0.78	0.12	0.30	0.015	0.023
5.75	2.18	1.01	0.34	0.05	0.13	0.011	0.040
36.30	12.75	3.15	1.86	0.8	8.16	0.13	0.07
22.64	8.15	3.22	4.41	1.28	12.97		SO_3 0.197

五酸化燐 P_2O_5	炭素 C	バナジウム V	銅 Cu	造滓成分	造滓成分 / Total Fe	TiO_2 / Total Fe	註
1.150	1.86	Trace	0.009	35.75	0.970	0.008	
0.149	0.137	0.020	0.005	8.63	0.129	0.001	①
0.252	0.118	Trace	0.004	31.89	0.655	0.006	①
0.245	0.113	0.008	0.004	9.28	0.138	0.002	②
0.5				54.06	2.54	0.38	③
0.275				38.42	1.16	0.39	④

分析は新日鉄八幡製鉄所で行った。　造滓成分：$SiO_2+Al_2O_3+CaO+MgO$

鉄 滓 外 観 ×½	
鉱 物 組 成 ×100	
鉱 物 組 成 ×200	

付 2 -図版 1　高橋南貝塚出土鉄滓の顕微鏡組織

付論３．高橋南貝塚出土木製品の樹種鑑定

大迫靖雄（熊本大学教育学部）

高橋南貝塚出土木製品は下駄、漆器、底板、櫛、鍋蓋等である。このうち８点について樹種鑑定を行った。出土木製品は貴重な資料であるため、原形を損なわぬよう充分注意しなければならない。したがって、試料としては微小な、しかもできるだけ劣化のはげしい部分を使用せざるをえない場合が多い。本鑑定に使用する試料は上記のような試料が多かったため、パラフィン包埋を行った後ミクロトーム切片を作製して検鏡した。

鑑定結果

試料：試料№.４および試料№.２（第27図６）

本試料中試料№.４は箸状の細い棒、試料№.２は円状の加工物で、底板として使用されたものと思われ、木材は柾目板として使用されている。この両試料はともに保存は良好であり、材色、年輪等巨視的な特徴もかなり明白であった。また木材の強固性も保たれていた。したがって、この二つの試料については、処理なしに直接ミクロトーム切片を作製した。

巨視的な特徴として、試料№.４は淡紅色の心材色を示し、年輪界が明瞭であった。また試料№.２は色は黒づみ、辺、心材等の特性は不明であったが、年輪界は明瞭で、年輪幅は２～３㎜を示した。両試料は巨視的な特徴から針葉樹で同一樹種であることが推定された。

樹種を決定するため、両試料の顕微鏡写真をPhoto.１～６に示す。本図から、両試料とも木口面（Photo.1, 2, 5）、柾目面（Photo.３）で年輪界が明瞭であることがわかる。また柾目面において、放射組織には放射仮道管は存在せず、放射柔細胞のみからなりたつ。また、木口面の夏材部および板目面に黒褐色の樹脂様物質を含む樹脂細胞がみられる（Photo.１, ３, ５）。分野壁孔はPhoto.4, 6であきらかなようにスギ型で各２個づつ存在する。なお、樹脂道、仮道管壁のらせん肥厚は存在しない。

以上の特徴から、スギ（*Cryptomeria japonica* D. Don）と鑑定した。

試料：試料№.１（第25図７）

本試料は高下駄である。巨視的には年輪等の判別が可能で、色も木材色を残している。しかし強度は低く、軟かくなり、組織的にかなり劣化していた。本試料の場合、台部と歯はさしかえることができるようになっていた。そして、巨視的に台と歯は同一樹種と思われるので原形保存のために最も影響が少ないと思われる歯の一部を試料とした。本部分はとくに劣化が著しいため、パラフィン包埋をして顕微鏡切片を作製した。劣化がはげしいため試片作製は困難であった。Photo.７～10に木口面、柾目面、板目面の顕微鏡写真を示す。木口面（Photo.７）から年輪界が明瞭である。また組織は大部分が仮道管からなりたち、針葉樹であることが判明する。

木口面の夏材部に所々樹脂細胞があらわれている(Photo. 7)。また柾目面の観察から、放射組織は放射柔組織のみからなり立っている(Photo. 8, 10)。分野壁孔は、前述二つの試料ほどあきらかでないがPhoto. 10からスギ型を示している。

以上の特徴から、本試料はスギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)と鑑定した。なお他の下駄の材質も試料No. 8と第24図2を除いて、本試料と同一樹種と考えられた。

試料：試料No. 8（第24図1）

出土した下駄のうち、本試料ともう1点(第24図2)だけが、樹種が異なっていた。本試料の場合色がやや黒化しているが、素材を推定できる色が残っていた。また巨視的には大きな管孔が年輪界に沿って存在している。このことから広葉樹で、環孔材であることがわかる。この試料の年輪幅はかなり広い。ただ保存状態は悪く、わずかな外力によって破壊する状態で軟くなっていた。本試料もパラフィン包埋して顕微鏡切片を作製した。Photo. 11～14に結果を示す。木口面の状態から、環孔材で、孔圏管孔は大きく、1～3 列ならんでおり、孔圏外の管孔は径が小さいものが、孤立もしくは半径方向に2個ほど複合した状態で散在している(Photo. 11, 12)。さらに、大道管にゴム様物質が観察されるものがあり(Photo. 13)、小道管にはらせん紋がみられた。また板目で放射組織は単列放射組織もしくは2～4細胞幅の多列放射組織からなり立っている。単列放射組織は1～4細胞高、多列放射組織は9～25細胞高を示した。おおむね同性であるが、上下両縁または辺縁に直立もしくは方形細胞を持つ異性放射組織がみられた（Photo. 15, 16)。

以上の特徴から本試料はセンダン(*Melia Azedarach* L. var. *subtripinnata* Miq.)と鑑定した。

試料：試料No. 5（第28図14）

本試料は底板として使用されていたもので、木材は柾目板として使用されている。保存はやや良好であったが鑑定用試料は原形を損なわないために端部を採集したため、試料作製は困難であった。巨視的には試料No. 2にきわめてよく類似し、しかも用途も同じと思われた。パラフィン包埋によって切片を作製したが劣化がはげしく、パラフィンを溶かすと分散するため、写真撮影は困難であった。そこで写真撮影が可能であった柾目面、板目面の顕微鏡写真を Photo. 17～19に示す。特徴は試料No. 2と同じでスギ(*Cryptomeria japonica* D. Don)と鑑定した。

試料：試料No. 3（第27図3）

本試料はくり抜きによって作製された容器で、漆器木地と思われる。したがって、表面に木口面があらわれている。試料作製部は器具の上部であるため薄い。色はわずかに素材色を残し

ているが、全体的に黒褐色を示す。木口上では春材部に大管孔があらわれ明白な環孔材の特性をあらわしている。ただ、本試料も組織的にはかなり劣化しており、軟く素材のままの試料作製は困難であった。そこで、本試料もパラフィン包埋し、プレパラートを作製した。Photo. 20～25に顕微鏡写真を示す。木口面のPhoto. 20は春材部に150μ以上の径を有する大管孔がほぼ一列にならび孔圏外道管はその径が急に小さくなり、その小道管は集合して接線状に分岐していることを示す。また、小道管にはらせん紋があらわれる(Photo. 23, 25)。また放射組織は単列放射組織の場合2～4細胞高であるが、数は少なく大部分が多列放射組織で4～6細胞幅、11～32細胞高を示した(Photo. 23, 24)。また辺縁、上下縁に直立もしくは方形細胞、さらに放射組織内部に方形細胞が含まれる場合もある(Photo. 21～24)。また、このような直立もしくは方形細胞には結晶が含まれることが多い(Photo. 21～24)。なお、放射組織は異性放射組織が多いが同性放射組織も多い。

以上の特徴から、本試料はケヤキ(*Zelkova serrata* MAKINO)と鑑定した。

試料：試料No. 7 (第28図16)

本試料は用途不明の木製品で、素材の状態で試料採集時にすでに散在してしまうほど劣化がはげしく、材色もほとんど黒色を呈していた。したがって本試料は本鑑定材中最も試料作製が困難であった。本試料もパラフィン包埋でミクロトーム切片を作製したが、試料作製の段階で分離して小さな試料しか得られなかった。Photo. 26～28に顕微鏡写真を示す。木口面のPhoto. 26から道管のならびは放射方向に配列している。したがって本試料は放射孔材である。また柾目面について、Photo. 27はパラフィンの溶解が不充分であるが中央部の道管は壁が厚く、単穿孔の穿孔板をもつことが示され、その周囲に柔細胞ストランドがみられる。Photo. 28は放射組織は大部分が単列放射組織もしくは広放射組織からなり、広放射組織は複合放射組織であることを示している。また単列放射組織は平伏細胞からなりたっている。

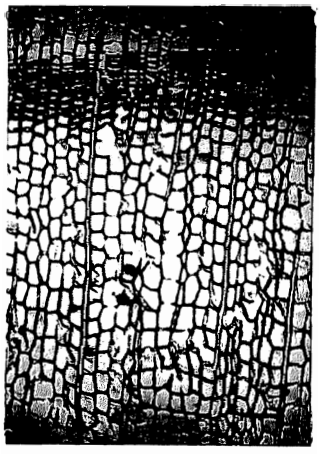
以上の特徴から本試料はブナ科(*Fagaceae*)のアカガシ亜属(*Cyclobalanopsis* Prantl)に属する樹種と鑑定されるが、樹種を決定することはできない。

試料：試料No. 6 (第28図11)

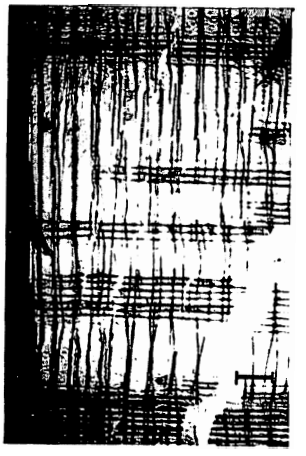
本試料は鍋蓋状のものである。本試料も劣化がはげしく、黒色を呈し、巨視的には本試料の特徴は見出し難かった。本試料は板としては繊維方向45°方向のものである。しかし、木理の方向が一定せず不規則であった。本試料もパラフィン包埋し、顕微鏡切片を作製した。Photo. 29～32に顕微鏡写真を示す。Photo. 29から道管は均等に分布し、直径は半径方向で70～120μ、管孔は孤立もしくは半径方向に2～3個接合するものがある。道管の数は1 mm^{2}で20前後、Photo. 30であきらかなように周囲柔細胞が発達し鞘状をなしている。板目面(Photo. 31)は試料の劣

化がはげしいため、放射組織が消失したものもあるがその他に大きな空間がみられ、柾目面(Photo. 32) からも油細胞が多数存在していることを示している。放射組織はおおむね3,4細胞幅、8～13細胞高で上、下縁に直立細胞がみられ異性放射組織を示す。

以上の特徴から本試料はクス科(*Lauraceae*) に属しており、放射組織の形状等からタブノキ属(*Machilus* sp.) に属する樹種と鑑定した。



1　試料No. 4 木口面

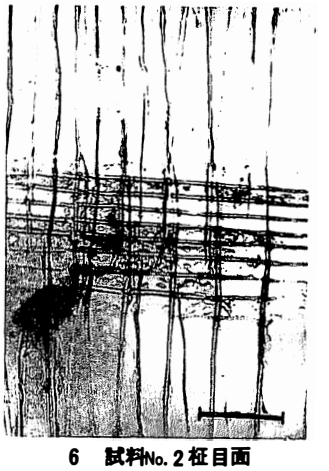


2　試料No. 4 柾目面

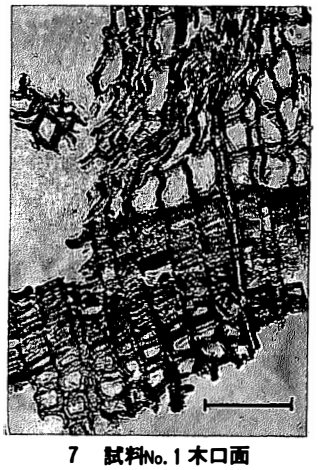
3　試料No. 4 板目面

4　試料No. 4 柾目面

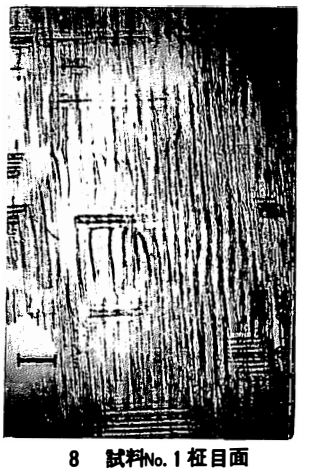
5　試料No. 2 木口面



6　試料No. 2 柾目面



7　試料No. 1 木口面



8　試料No. 1 柾目面

9　試料No. 1 板目面

付 3－図版 1

10　試料No. 1 柾目面

11　試料No. 8 木口面

12　試料No. 8 木口面

13　試料No. 8 木口面

14　試料No. 8 柾目面

15　試料No. 8 板目面

16　試料No. 8 板目面

17　試料No. 5 柾目面

18　試料No. 5 柾目面

付 3 －図版 2

19　試料No. 5 板目面

20　試料No. 3 木口面

21　試料No. 3 柾目面

22　試料No. 3 柾目面

23　試料No. 3 板目面

24　試料No. 3 板目面

25　試料No. 3 板目面

26　試料No. 7 木口面

27　試料No. 7 柾目面

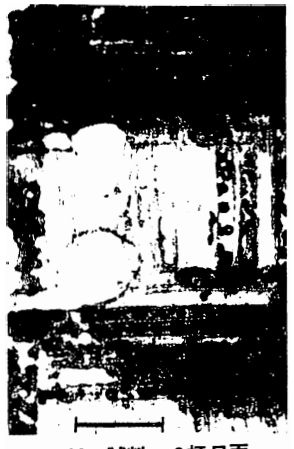
付 3 －図版 3

28　試料No. 7 板目面

29　試料No. 6 木口面

30　試料No. 6 木口面

31　試料No. 6 板目面



32　試料No. 6 柾目面

付 3 －図版 4

※photo　中 スケールはすべて100μ をあらわす。

付論４．高橋南貝塚出土の動物遺存体

木村　幾多郎（九州大学医学部）

本遺跡より、３綱15種の動物遺存体が確認された。同定されたものは次の通りである。

魚　綱　*Class Pisces*

1．サメ類　*Lamina fami*

2．マダイ　*Chrysophrys major* TEMMINCK & SCHLEGEL

3．クロダイ　*Mylio macrocephalus*（BASILEWSKY）

4．タマミ　*Lethrinus haematopterus* TEMMINCK & SCHLEGEL

5．イシダイ　*Oplegnathus fasciatus*（TEMMINCK & SCHLEGEL）

6．タチウオ　*Trichiurus lepturus* LINNE

爬虫綱　*Class Peptilia*

7．スッポン　*Trionyx sinensis japonicus* TEMMINCK & SCHLEGEL

哺乳綱　*Class Mammalia*

8．イノシシ　*Sus scrofa leucomystax* TEMMINCK

9．シ　カ　*Cervus nippon* TEMMINCK

10．イ　ヌ　*Canis familiaris*

11．タヌキ　*Nyctereutes procyonoides* GRAY

12．ドブネズミ　*Rattus norvegicus* BERKENHOUT

13．ニホンザル　*Macaca fuscata* BLYTH

14．ウマ類　*Equus caballus*

15．バンドウイルカ　*Tursiops truncatus*（MONTAGUE）

同定された上記の各々について以下若干の所見をのべる。

魚　綱

サメ類

歯牙・脊椎骨が検出されているが、個々の種の同定はできなかった。歯牙のうち(A－2－9, 10) より採集されたものは「三角形で鋭く尖り、鋸歯縁がなく、両側に小さい１基底尖頭」(松原1965）があり、ネズミザメ　*Lamnia ditropis* HUBBS & FOLLETTと推定される。歯牙全高は、それぞれ21.3㎜・22.5㎜である。

脊椎骨は多数採集されており、その形態より、(a)椎体上下に２つづつ、それぞれ神経弓門と

側突起のつく凹があり、まわりがなめらかなもの、(b)上下2つづつの凹があり、まわりにスジの入っているものがあり、さらに前者には(a′)椎体が強くくびれて木臼型になるものがある。(a)が一番多く採集され、椎体径が37～9㎜まで各種ある。5㎜毎の階級に分けた時の各層よりの出土個体数は次表の通りである。それによれば、25㎜以上の比較的大きな椎体が多い。(a)は、ドヂザメなど、(b)はモウガサメなど、(a′)はホシザメなどの脊椎骨とされているが、確認しておらず不明である。他にC－3－10より、歯牙全高9.2㎜の歯牙が検出されている。

サメ類脊椎骨層位別出土個体数

層位＼大きさ	10㎜以下	10—15	15—20	20—25	25—30	30—35	35㎜以上
9層	1	3 (1—b)	1	2	2	4	1 (b)
9層下	0	0	0	0	2	1	0
10層	0	0	2	0	3	1	1
その他	0	1 (a′)	0	0	0	0	2
総数	1	4	3	2	7	6	4

( ) 印のないものは(a)類

マダイ

前上顎骨、主上顎骨が多く検出され、他に歯骨、主鰓蓋骨、方骨、脊椎骨が採集されている。赤沢(1977)によれば、前上顎骨長(PML)と、体長とは相関関係を示し、有意な係数も得られるということである。計測可能であった2点のPML(＝57.6㎜, 31.4㎜)よりすれば、約67㎝、36㎝前後の体長を持つ個体となる。主上顎骨にも大小あり、それぞれに応じているようである。脊椎骨は椎高14.5㎜の個体が採集されている。マダイは、本遺跡でクロダイについで多く採集された硬骨魚類で、岩礁性の近海魚であり縄文時代以来の主要漁撈対象魚である。

マダイ　層位別出土個体数

部位＼層位	前上顎骨		主上顎骨		歯骨		方骨		主鰓蓋骨		脊椎骨
	r	l	r	l	r	l	r	l	r	l	
9層	2	1	1				1				1
9層下			1								
10層	1			1	2					1	1
P－5					1						

クロダイ

前上顎骨、歯骨が検出された。沿岸性の魚で内湾にも多く、本遺跡では魚類の中で一番多く捕獲されていたようである（前上顎骨の出土点数から)。前上顎骨長の計測可能なものは2点あり、赤沢(1977)によれば、それぞれ体長約30㎝前後(PML＝30.8㎜)、約34㎝前後（PML＝36.0㎜）と推定される。他のPMLも似たような値を示すと思われる。クロダイは、大きくて体長60㎝程、普通で40㎝程であるから、大きな個体とはいえないが、捕獲対象としてはこの程度のものが多かったのであろうか。

クロダイ　層位別出土個体数

部位 / 層位	前上顎骨		歯骨	
	r	l	r	l
9　層	0	7	1	0
10　層	0	1	1	1

タマミ

右側上顎骨(A－6－9)と、左側歯骨(B－2－10)が検出された。岩礁性の浅海に棲む近海魚で、フエフキダイという。本来体長60㎝におよぶ魚であるが、本標本は若干の欠損があるがPML＝27.5㎜で、大きな個体とはいえない。

イシダイ

右側歯骨(C－4－9)が検出された。岩礁性の沿岸魚である。本標本は大きく、老性化している。

タチウオ

鋭い歯を持つ左側前上顎骨(B－4－9)が検出されている。水深100m程の泥底に棲む魚であるが、産卵期(8、9月頃)には、内湾、浅海に寄せてくるといわれ、その時捕獲したものであろう。

爬虫綱

スッポン

C－5－9より、頭骨・前腕骨・背甲中央板・指骨・脊椎骨の一部を欠く、ほぼ一体分の標本が検出された。背甲板の全長141.5㎜である。他にもB－6－8より、同一個体のものと思われる背甲左側第三肋骨板・大腿骨(R.)、鳥喙骨(L.)が検出されており、C－5－9の個体より大きい。スッポンは完全な淡水性で、現在も食用に供されている。

哺乳綱

イノシシ

全体量としては多くない。C－5－9の肩甲骨や、B－2－10の上顎骨吻部先端のように大きく成獣とみられるものもあるが、全体的には生後12ケ月前後と思われる個体が多い。B－3－10の下顎骨(L.)は生後4～5ケ月、B－4－10の肩甲骨(R.)は極めて小さく骨端が完全に分離しており、生後まもないと考えられるものがある。縄文時代貝塚ではあまり見られない傾向である。性別では、B－3－10より雄獣の犬歯(L.)が検出･確認されているだけであるが、A－4－9の頭骨片、C－5－9の肩甲骨(R.)、B－2－10の上顎骨(R.)、A－1－10の下顎骨(R.)は比較的大きく雄獣と推定されるものがある。C－3－9の肩甲骨(R.)や、B－4－9の下顎

骨(R.,L.)のように成獣でもやや小形で雌獣と考えられるものもあるが、残りは幼獣と思われる小形のものが多い。

イノシシ　層位別出土個体数

部位 / 層位	頭骨片	脊椎骨	肩甲骨		尺骨		踵骨		指骨
			r	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	
8　層							1		
9　層	2		2		1				1
10　層		C¹	1			1			
表　採		Th²							

イノシシ　歯牙

出土区・層	残存歯牙
B－4－9	$\overline{(M_3)\ M_2\ M_1\ (P_4)}\ \vert\ \overline{(P_4)\ M_1\ M_2\ (M_3)}$
C－3－9	$\underline{P^4}\rceil$
C－4－9	$\overline{(M^2)M^1\ m^3\ m^2\ m^1\ \overset{\times}{P^1}\ \overset{\times}{C}}\dagger$
A－1－10	$\overline{(M^3)\ M^2}\rceil$
B－2－10	$\overset{\times}{I^3}\ \overset{\times}{I^2}\ I^1\rceil$
B－3－10	$\lceil\overline{m_3\ M_1}$
B－3－10	$\lceil\overline{C}\ \updownarrow$

〔備考〕　×印は、歯槽があり、歯牙が欠失しているもの。
（ ）印は、萌出中及び、骨体内に歯牙が埋没しているもの。

シ　カ

採集量はきわめて少なく、橈骨(L.)が2点(C－4－8，A－5－9)と、中足骨小片（A－5－9)が検出されているのみである。橈骨片よりすれば、成獣であったと推定される。

イ　ヌ

四肢骨のみが採集され、頭骨・歯牙等は検出されなかった。したがって性別・年令等明確にしえないが、C－5－9より採集された大腿骨は両骨端が完全に分離して欠失しており、幼獣であったと思われる。四肢骨最大長よりすれば、いずれも長谷部(1952)のいう、中小犬に属する。幼獣の大腿骨を除いて、上腕骨(B－3－9)、尺骨(A－6－9)、脛骨(B－3－9)は、同一個体のものとしてさしつかえない大きさをしているが、脛骨は出土層位・区を異にし、保存状態も違い別個体のものと考えられる。他に寛骨(L.)破片(B－2－10)、胸椎(B－3－10)が採集されている。各骨は、それぞれ分散して採集されており、遺跡の状態からしても埋葬されていたとは考えにくい。

	尺骨(L.)	上腕骨(R.)	脛骨(R.)
最大骨長	150.0	126.4	143.9

(単位：mm)

タヌキ

B—4—9の下顎骨(R.)は、犬歯が残存植立しており、それからすれば雄獣である。$\overline{M_3}$ は未崩出である。P_1—M_2歯列長39.7mm。C—3—9の下顎骨(R.)のP_1—M_3歯列長42.1mmである。下顎骨全長は後者の方が短い(完形でないため下顎結合部後端から下顎角までの長さを比較した)。後者は、P_1～M_3まで萌出しているが、犬歯が残存しておらず性別は不明である。しかし、前者より下顎骨が小さいことを考えれば、雌獣と推定される。歯の咬耗はほとんど認められない。他にC—3—9下より脛骨(R.)が検出されている。

ドブネズミ

右側下顎骨(A—4—9)1点が検出された。下顎枝を欠く。食用にしたものというより、貝塚形成時に混入したものであろうか。

下顎高　8.0mm　　下顎臼歯列長　7.6mm

ニホンザル

右側上顎歯2本が検出された。$\underline{P^2}$(B—2—10) は象牙質がわずかに各咬頭の部分だけに露出し、$\underline{M^1}$(B—5—9) は、象牙質が二咬頭を通絡するように露出している。M¹の崩出が2才頃、P²の崩出が3.5才頃(雌獣の方が若干崩出時期が早い)で、崩出時期が異なるので、2歯の咬耗度の差は当然起りうることで、同一個体のものといえないこともないが、区・層とも異なり、保存状態も違うので、別個体のものであろう。咬耗度よりすれば、P²は10才以下(6～7才程)、M¹は10才以上(13～14才程)と推定される(桐野・佐伯1964)。 M¹には齲歯が近側に認められる。

	歯冠長	歯冠幅	歯冠高(頬側)
$\underline{P^2}$	9.8	10.1	6.5
$\underline{M^1}$	10.2	11.0	6.0

(単位：mm)

ウ　マ

主に四肢骨・歯牙が検出された。完全な四肢骨の最大長よりする林田・山内(1957)の体高推定式よりすれば、平均体高124.5cmとなり、先史時代の小形馬と、中形馬の中間に属する。林田(1957)によれば、鎌倉材木座の中世馬は、平均体高129.5cmで中形馬が主体を占めており、軍馬のため比較的大形の馬が選択されたのであろうとしている。又多々良中世馬(林田1972)は、歯牙よりして小形であるとしている。本遺跡出土の馬歯よりしても、多々良中世馬より大きく、中形馬に属する御崎馬に類似した値を示している。A—5—9より検出された歯は、同一個体

のものと思われる。咬耗が少なく若い個体のものであろう。ただ$\underline{M^3}$ だけは、舌頬側方向に咬耗が進んでおり(より早く崩出したはずのM^1よりもかなり進んでいる) 別個体のものであろうか。B－3－9より検出された$\underline{M^3}$ は咬耗が歯頚部まで及んでおり、老齢馬と思われる。尺骨は橈骨遠位端まで達せず、その最大長比は59%で、前述の鎌倉馬の平均64%に近値であり、日本先史時代馬、日本在来馬に類似し、蒙古馬とは異なる(林田1957)。各四肢骨は、人為的に打割られたと思われるものはない。

ウマ　層位別出土個体数

部位 / 層位	頭骨片		上腕骨		橈骨・尺骨		大腿骨		脛骨	
	r	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*	*r*	*l*
2　層			1							
8　層								1		
9　層	2	1								2
9 層 下						1				
10　層								1		

ウマ　四肢骨計測表

計測部位 / 部位	最大長	推定体高 (cm)	近位部幅	近位部前後径	中央部幅	中央部前後径	遠位部幅	遠位部前後径	$\frac{\text{中央幅}}{\text{最大長}}\times 100$
橈　骨(L.) (B－5－9下)	307.9	121.4	72.0	35.0	31.8	23.3	65+α	40.8	10.32
脛　骨(L.) (B－6－9)	355.5	127.5	74.0+α	—	35.2	30.0	63.6	34.3	
脛　骨(L.) (B－6－9)	—	—	—	—	30.0	28.5	—	—	

計測部位 / 部位	最大長	三角筋粗面における幅	骨体最小幅	骨体最小前後径
上腕骨(R.) (D－3－8)	—	52.5+α	28.8	36.9

※計測点はDuerust (1926) による。
(単位：mm)

ウマ　歯牙計測表

項目 / 部位	歯冠長	歯冠幅	現高
$\underline{P^2}$	36.4	21.75	
$\underline{P^3}$	29.2	25.1	72.9
$\underline{P^4}$	28.3	25.8	73.0
$\underline{M^1}$	24.8	25.3	67.3
$\underline{M^3}$	25.9	21.2	66.7
$\overline{P^3}$	28.8	26.6	71.0
$\overline{P^4}$	29.3	26.4	71.6

(単位：mm)

イルカ科

イルカ科動物の骨は、その形が大きいので採集獣骨標本の中で量的な割合が多い。イルカ科動物のうち同定されたものは、バンドウイルカだけである。(西脇1965)

バンドウイルカ *Tursiops truncatus*(MONTAGUE) C—4—10より、下顎骨 (R.,L.)、上顎骨(L.)、頭骨片が採集されており同一個体のものと思われる。右側下顎骨は、吻部先端を若干欠くが、ほぼ復元でき、下顎長は40.4cmである。歯槽は22個(＋1～2)認められ、各歯槽は径6～9mmと大きい。遊離した歯が19個採集されており、径6.5×6mm、歯高28mm前後で、歯冠先端がやや曲りとがる。大きさからいって同一個体から遊離したものと考えられる。脊椎骨は、A—6—9より胸椎4個、腰椎1個が採集されている。

A—6—9より検出された下顎骨(R.)は、下顎枝部分の破片であるが、前記のものに較べてかなり大きく、大きさとしてはゴンドウクジラに似るも、それより頑丈な感じがするが、シャチの下顎骨の大きさ、頑丈さにはとても及ばない。肋骨も、バンドウイルカのものとしては大きすぎるものが2点(C—5—9、B—6—8)採集されており、胸椎の棘突起部分、腰椎肋骨突起部分破片は大きく、同一個体か、同種類のものであろう。

バンドウイルカは、全長2.7m内外で、沿岸性であり群をなし、時々湾内にまよい込んだりすることがあり、現代でも追い込み漁法で捕獲することがある。採集された各骨には、刃物によるキズが多数みられ、下顎骨・頭骨など明らかに刃物でタタキ割られたあとを示している。脊椎骨・肋骨にもキズは認められ、骨より肉を取る時についたキズと思われる。

イルカ　層位別出土個体数

層位＼部位	頭骨片	上顎骨		下顎骨		舌骨	脊椎骨		肋骨		
		r	*l*	*r*	*l*		大	小	大	中	小
2　層											1
8　層	1		1				1		1	2	
9　層	1			1			1	6	2	1	
10　層	4(同一個体)			1	1	1					

以上の動物遺存体の他に、魚類では2～3種同定できなかった骨片があり、他に軟体動物こういかの甲(C—5—8)、節足動物カニの鋏(B—3—10、A—5—9)、鳥綱の上腕骨 (L.)(A—2—9)が採集されているが種名は同定できなかった。

これら動物遺存体は、すべてが食用に供されたとは思えず、ドブネズミは食料残滓に寄ってきたものであろうし、イヌ・ウマは家畜とされていたものであろう。特にウマは、本遺跡が中世集落に付属する貝塚であり、体高も小形馬であるより中形馬に近く、農耕馬というより、日常の乗用馬として使用されていたものであろうか。

イノシシの遺存骨に幼若獣の占める率が高いことは養猪の存在を推定させるものがある。金子浩昌氏は、遺跡で幼獣(一才前後)の比率が高い(50%以上)ことは、養猪の存在を推定させる根拠の一つになるとしている(金子1975)。イノシシ・シカの遺存骨が全体的に少量であるとはいっても、シカに較べイノシシの占める率が高く、 シカの遺存骨が少いことは、 本貝塚形成

者が狩猟民とは考えられないことからすれば(社会的・地理的条件等から)うなずけることであるが、養猪の存在を推定すればより考えやすいことになる。

イルカは、天草近海を群遊し、時々天草の湾内にも押し寄せてくることがあり、有明海にも入ることがあったと思われる。サメは、天草富岡では、古くから年中行事の一つとして「鱶狩」が行われており、大正13年には126頭の漁獲があったということである。(大島1929)

本貝塚形成者は脊椎動物遺存骨からいっても、水産動物に対する依存の比率は大きかったといえよう。

なお、本報告にあたっては、主に九州大学医学部解剖学教室の各種骨格標本を参考にし、九大農学部高原齊助教授、医学部永井昌文教授の教示を得た。付載の写真は、医学部解剖学教室助手那須哲夫氏によるものである。

参考文献

赤沢威, 1978：貝塚産魚種の体長組成の復原. 自然科学の手法による遺跡・古文化財等の研究; 144—150。

大島広, 1929：天草雑俎(その二), 動物学雑誌, 41：21—26。

金子浩昌, 1975：対馬・住吉平貝塚出土の脊椎動物遺存体, 対馬の遺跡：149—150。

桐野忠太・佐伯政友, 1964：高崎山野生ニホンザルの口腔内諸形態—歯の加齢的変化(崩出・咬耗)—。高崎山の野生ニホンザル—餌さづけ10年目の総合調査報告：124-135。

西脇　昌治, 1965：鯨類・鰭脚類, 東京。

長谷部言人, 1952：犬骨, 吉胡貝塚：146—150。

林田重幸, 1957：中世日本の馬について, 日本畜産学会報, 28— 5 ：301—306。

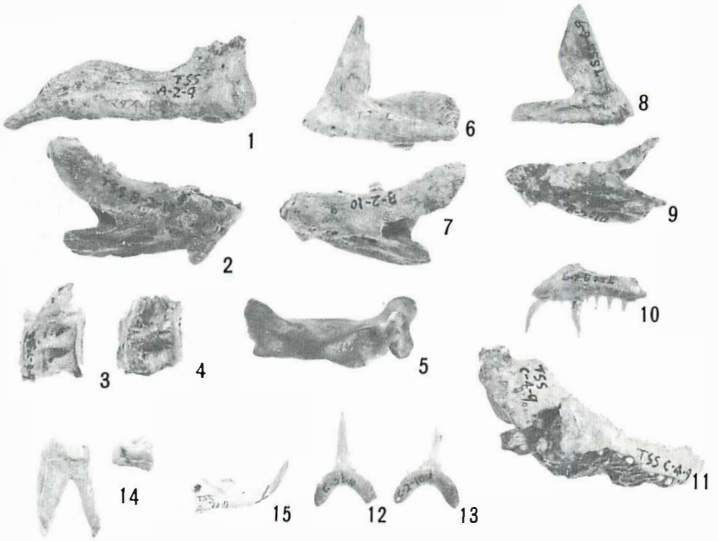
林田重幸・山内忠平, 1957：馬における骨長より体高の推定法, 鹿児島大学農学部学術報告, 6 ：146—156。

林田重幸, 1957：中世馬—多々良遺跡出土の馬歯を中心に, 多々良遺跡調査報告書：81—89。

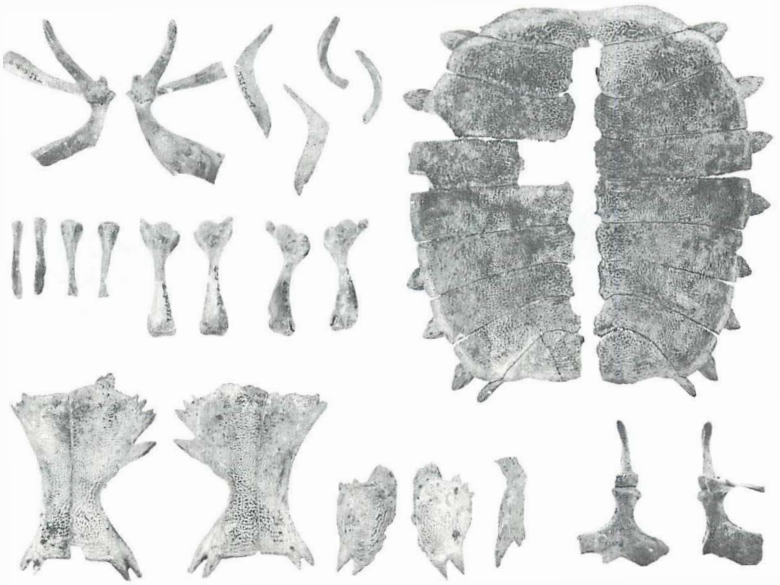
松原喜代松, 1963：動物系統分類学, 9 上・中。

松原喜代松, 1965：軟骨魚綱, 新日本動物図鑑, 下：142—169。

Duerst, 1926：Vergleichende Untersuchungsmethoden am Skelett bei Säugern.

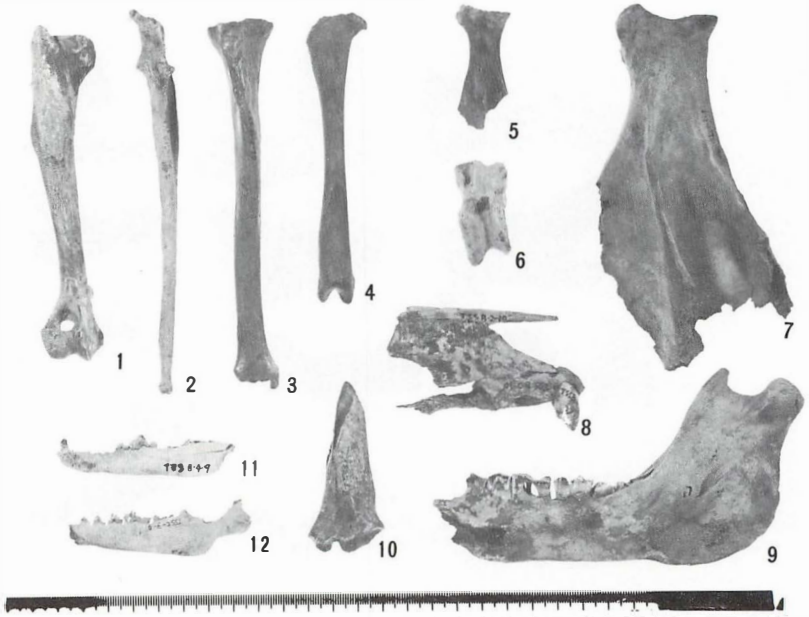


1～5 マダイ，6～7 クロダイ，8～9 タマミ，10 タチウオ，11 イシダイ，
12～13 サメ，14 サル，15 ドブネズミ

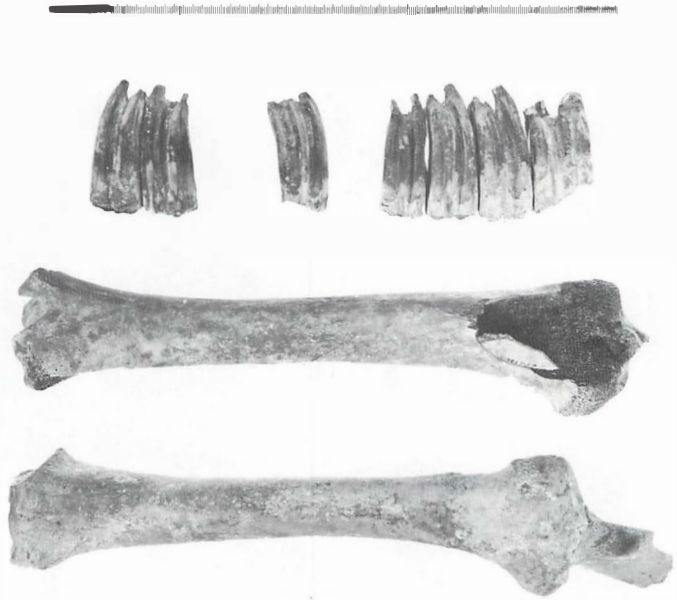


スッポン

付4-図版 1　動物遺存体

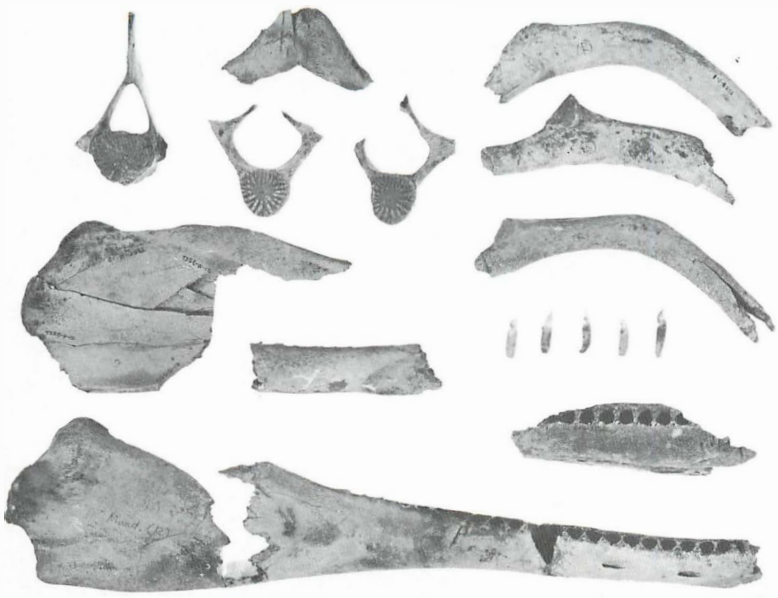


1～4 イヌ，5～9 イノシシ．10 シカ，11～12 タヌキ



ウマ（歯・四肢骨）

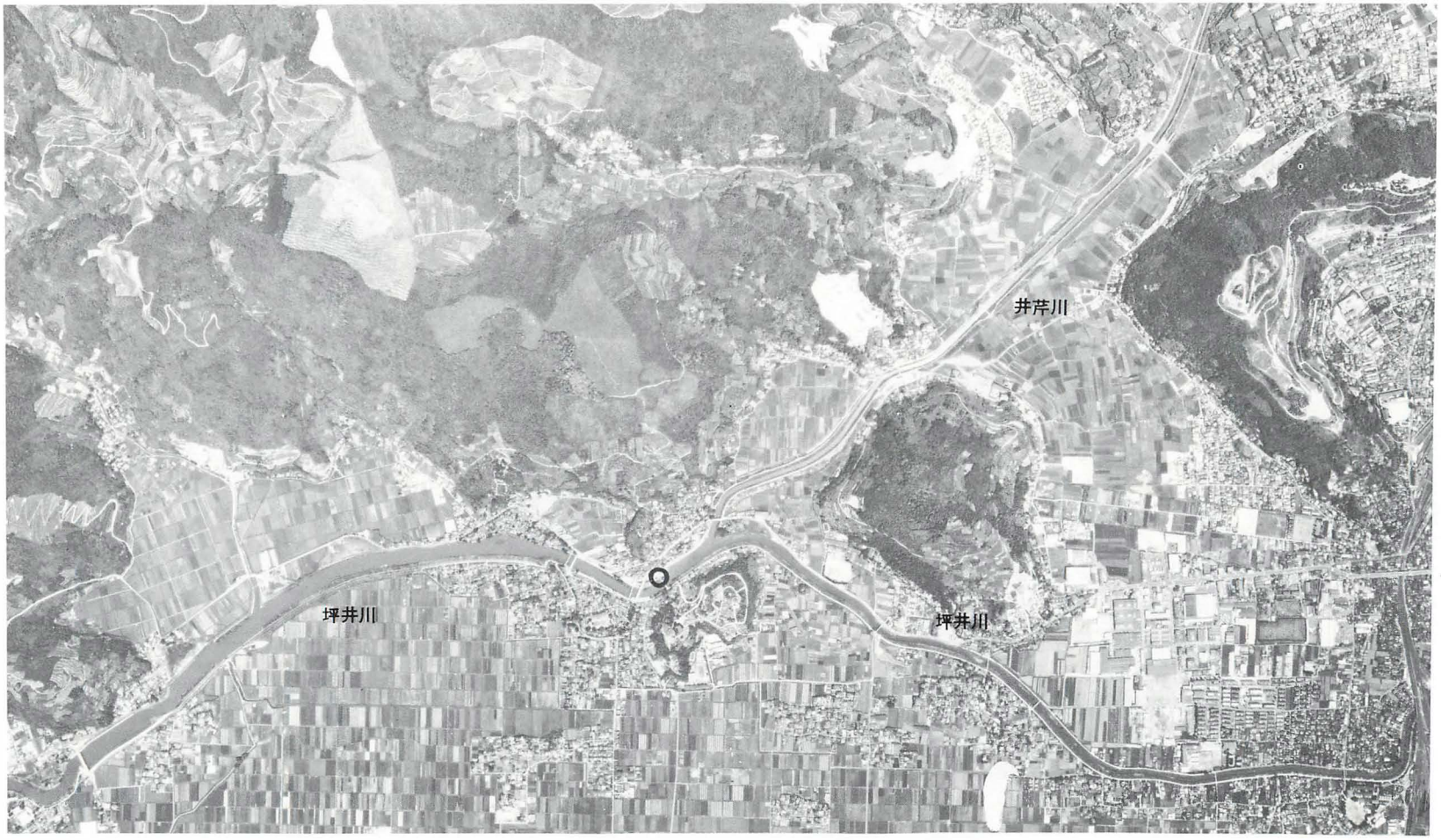
付4-図版2　動物遺存体



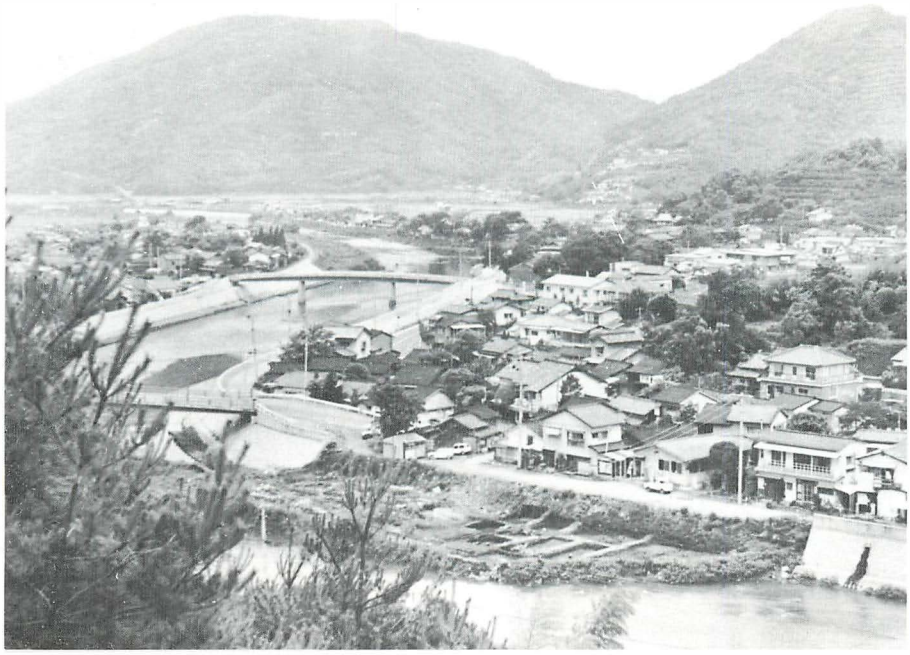
バンドウイルカ

イルカ類

付4-図版 3　動物遺存体



図版１　遺跡周辺空中写真　○印が高橋南貝塚

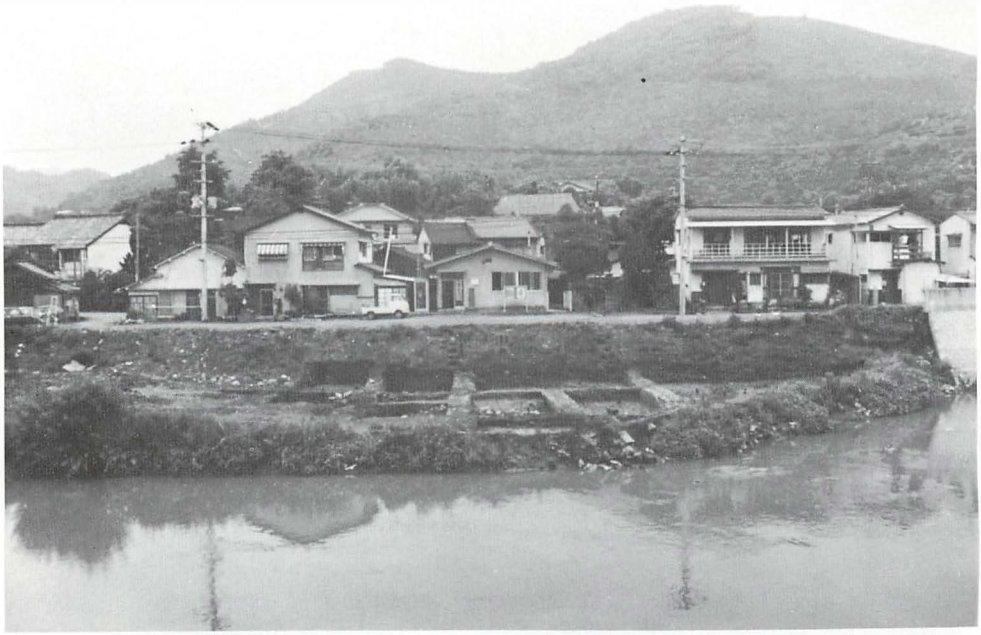


(1)　遺跡の遠景

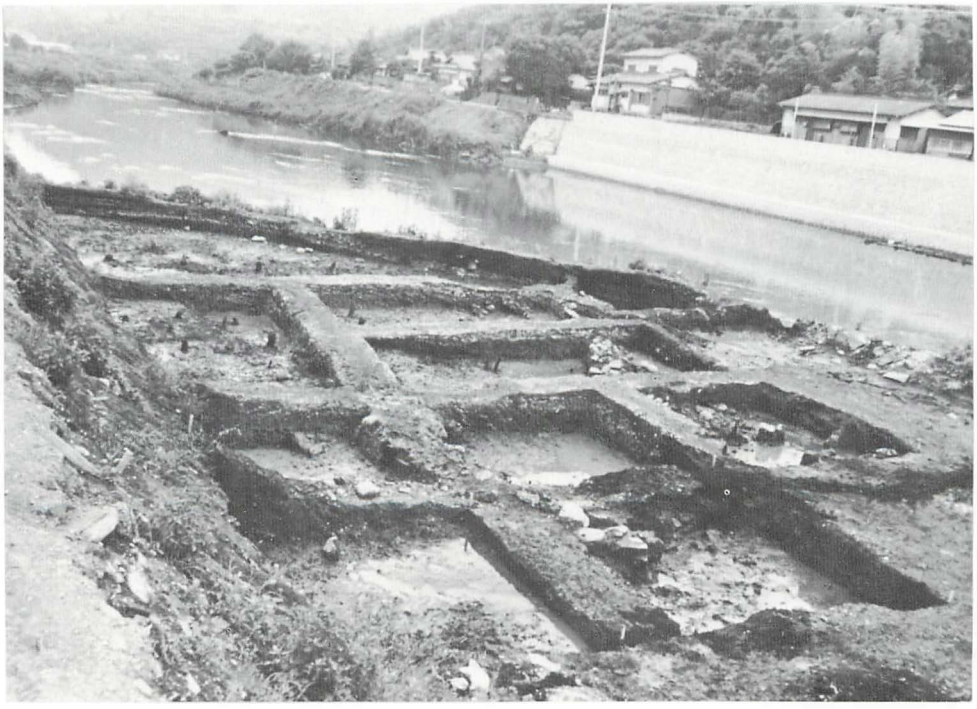
(2)　遺跡の遠景

(3)　調査前の状況

図版 2

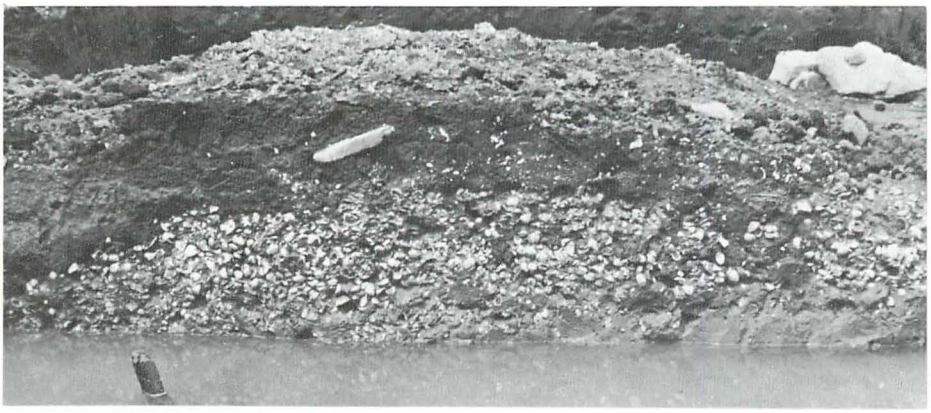


(1) 調査地全景

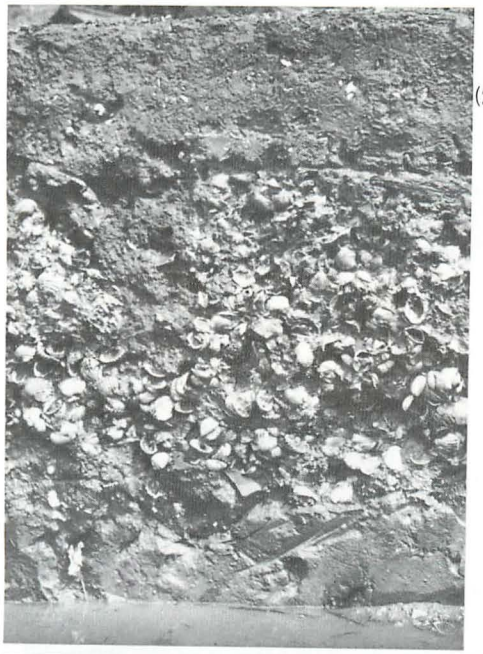


(2) 調査地全景

図版 3



(1) 貝層の状況



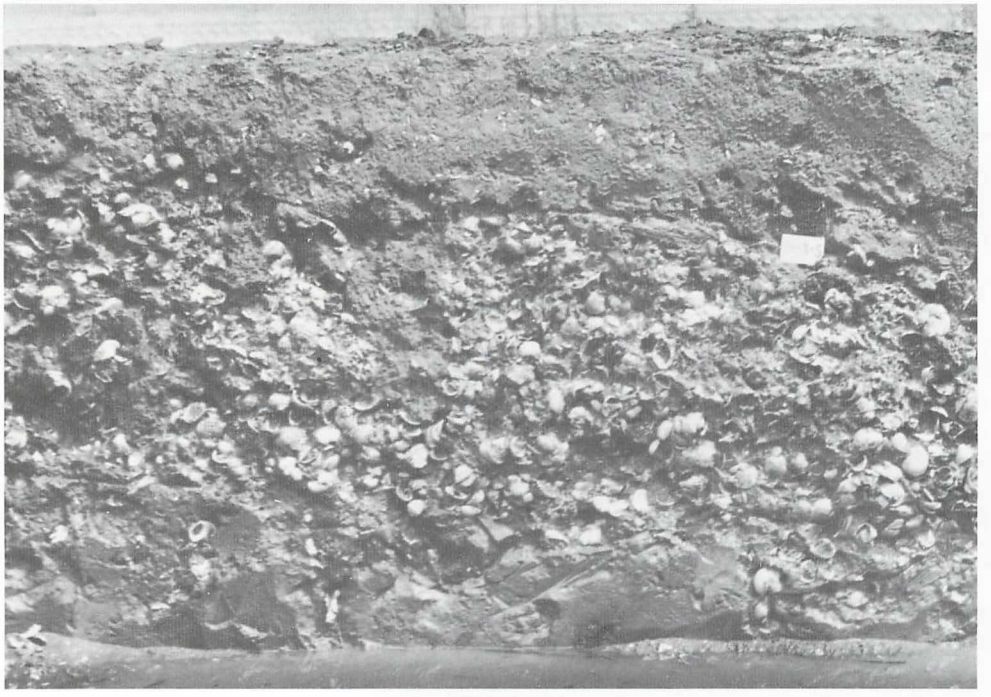
(2) 貝層の状況

(3) 遺物出土状態

(4) 遺物出土状態

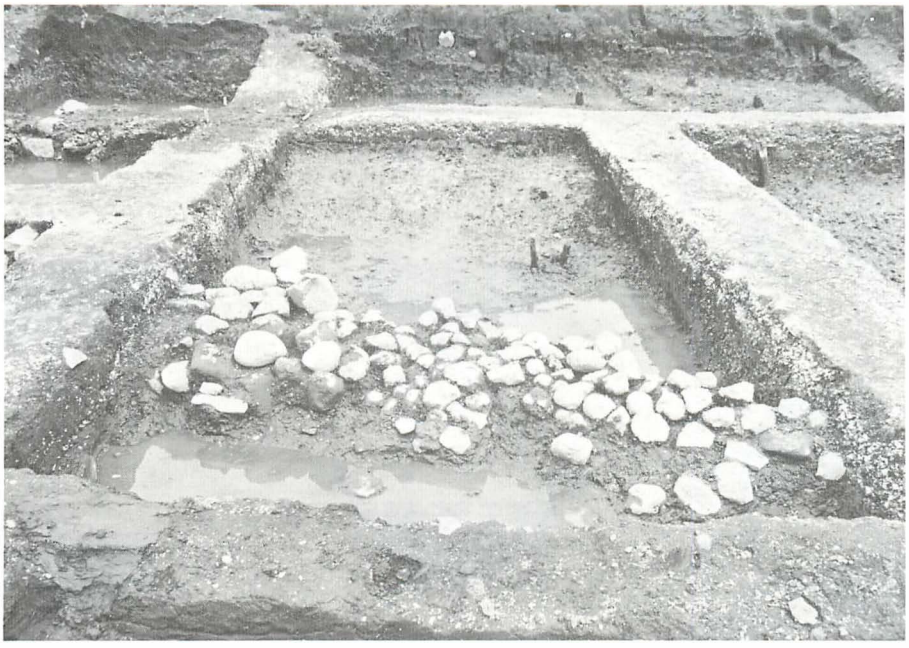
図版 4

(1) 大潮満潮時の調査区

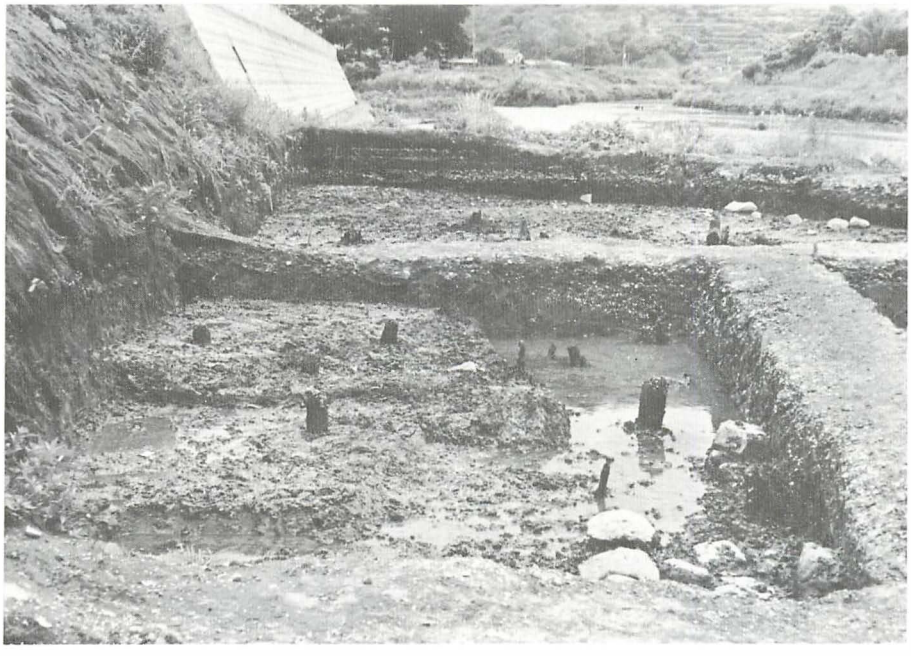


(2) 貝層の状況

図版 5



(1) 石列



(2) 杭列

図版 6

5－1

5－4

5－6

5－2

5－5

5－7

5－3

5－10

5－12

5－8

5－11

5－18

5－9

5－17

5－14

5－15

5－16

図版 7　白磁（$\frac{1}{3}$）

7－1

7－5

7－6

7－7

7－19

7－39

7－40

8－2

8－23

8－24

9－32

9－30

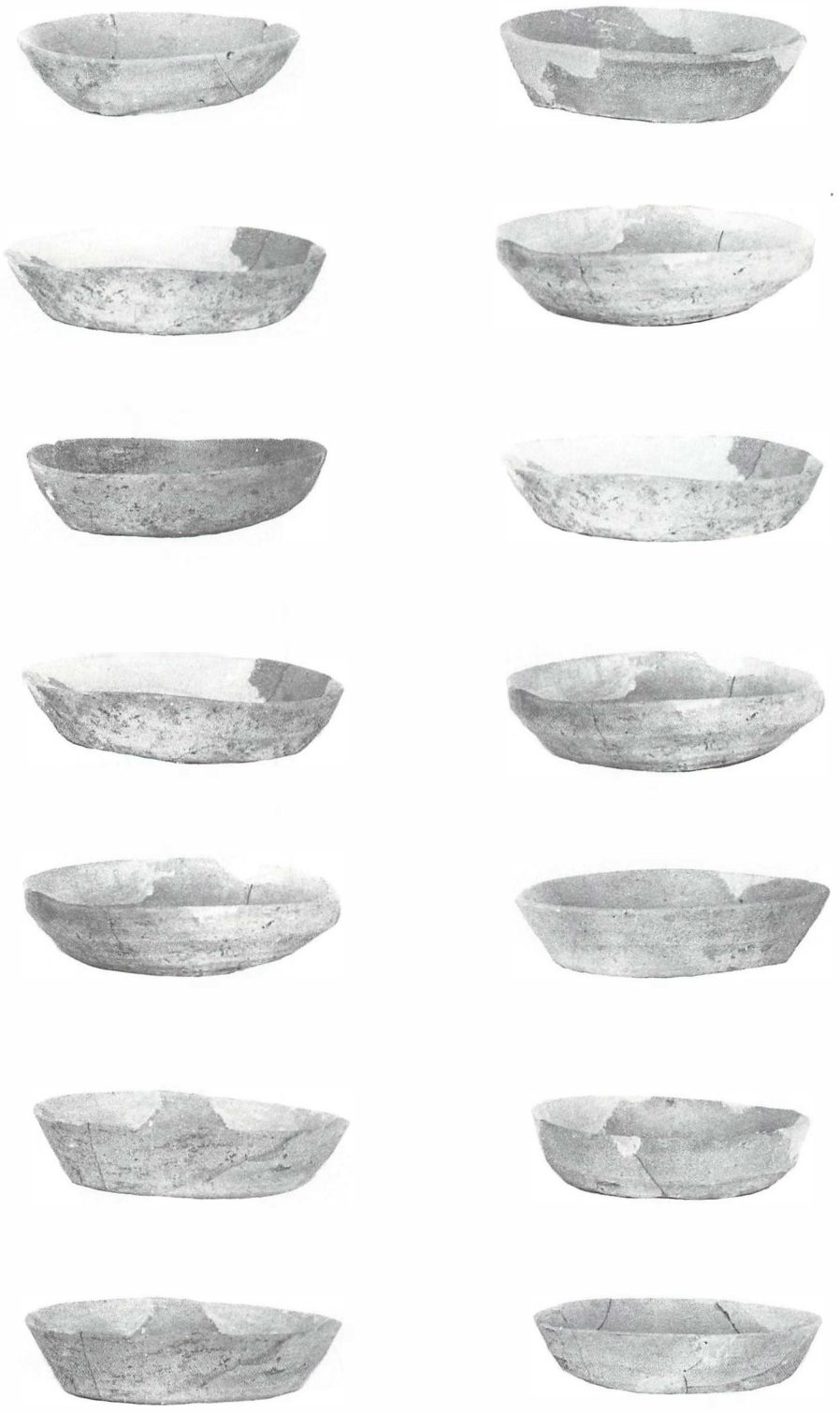
10－42

10－44

10－43

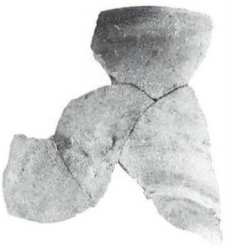
10－46

図版 8　青磁（$\frac{1}{3}$）



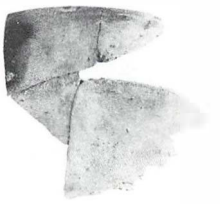
図版 9　土師器(坏)(1/3)

図版10　土師器(坏・皿)(1/3)

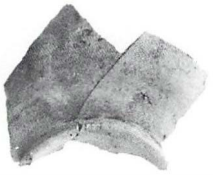


18－1

18－2



18－3



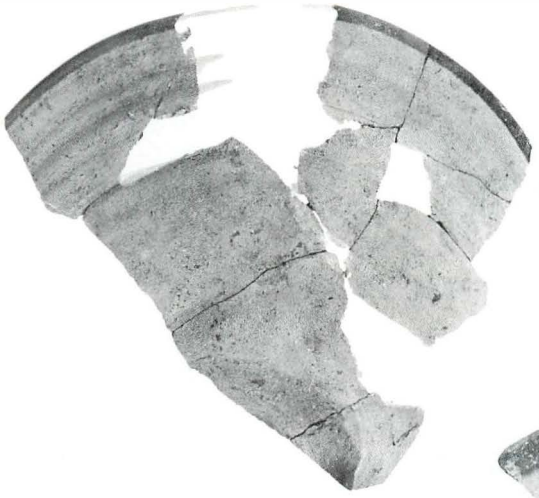
18－4

18－5

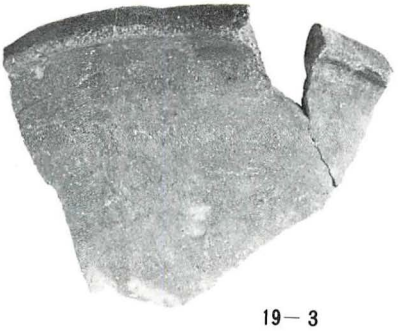
18－6

19－1

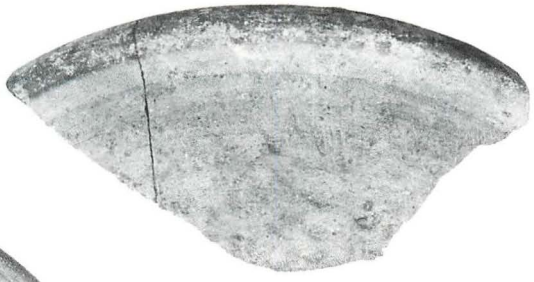
図版11　土師器(皿)・瓦器・須恵質土器($\frac{1}{3}$)



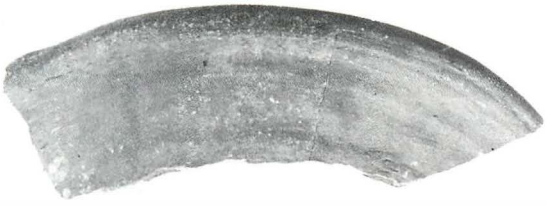
19－2



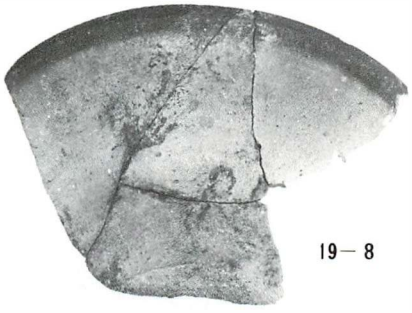
19－3



19－7

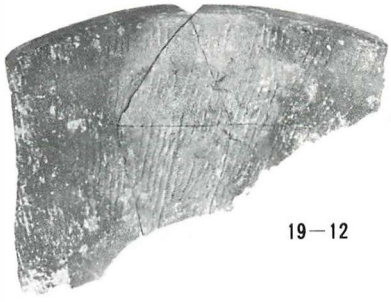


19－4

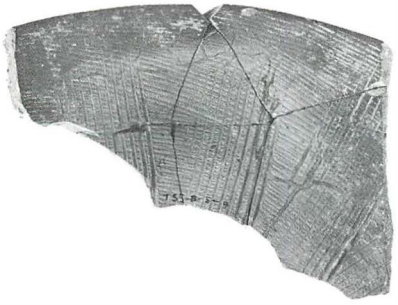


19－8

19－11



19－12



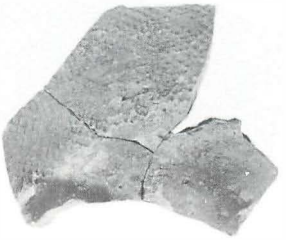
図版12　須恵質土器(1/3)

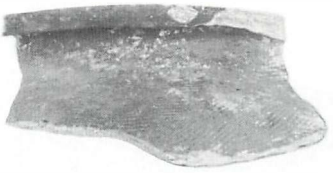
20－1

20－6

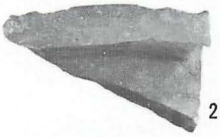
20－2

21－11

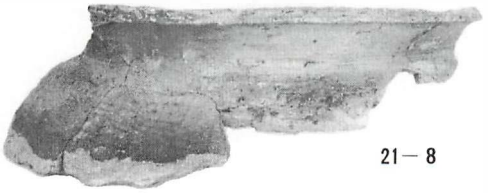




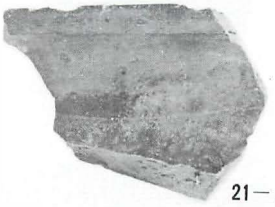
21－7



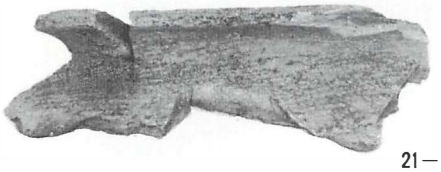
21－1



21－8



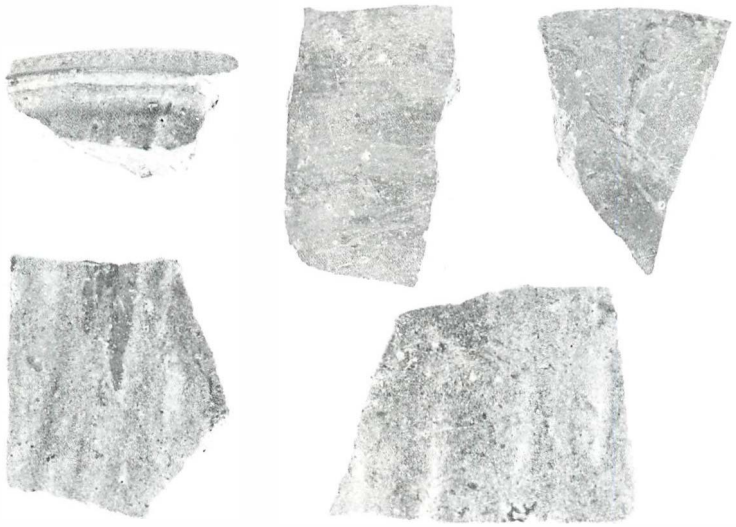
21－2



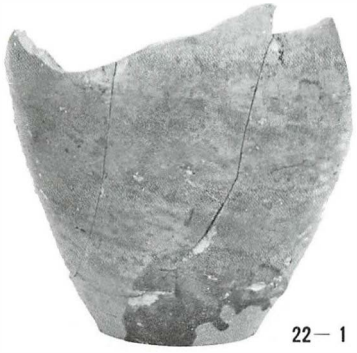
21－9

21－3

図版13　須恵質土器・陶器(常滑焼)($\frac{1}{4}$)



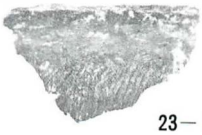
常滑焼破片



22－1

23－1

23－2

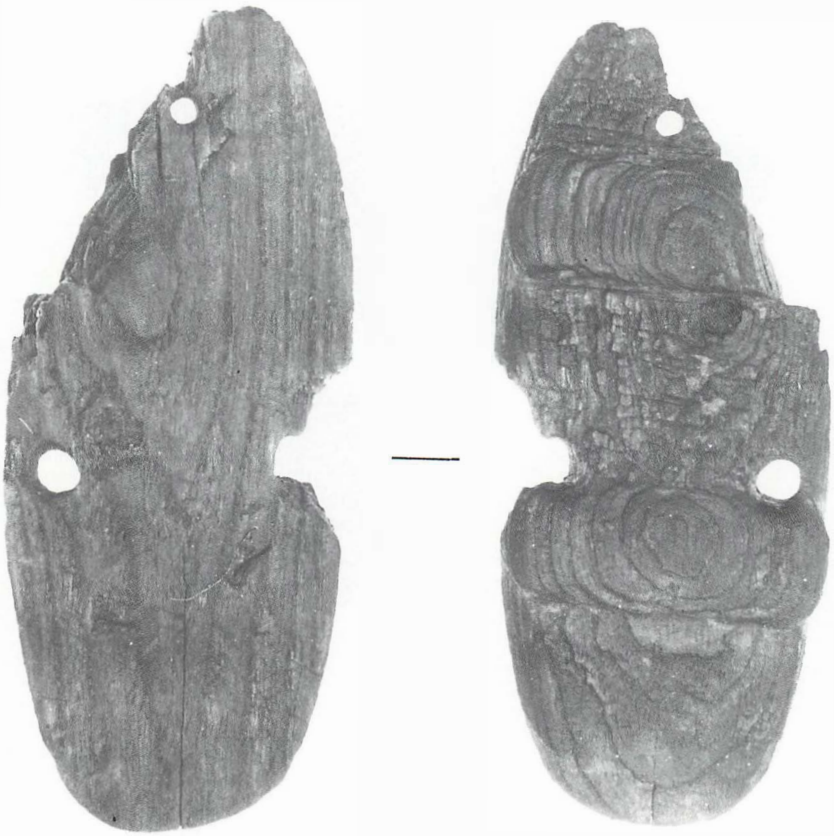


23－3

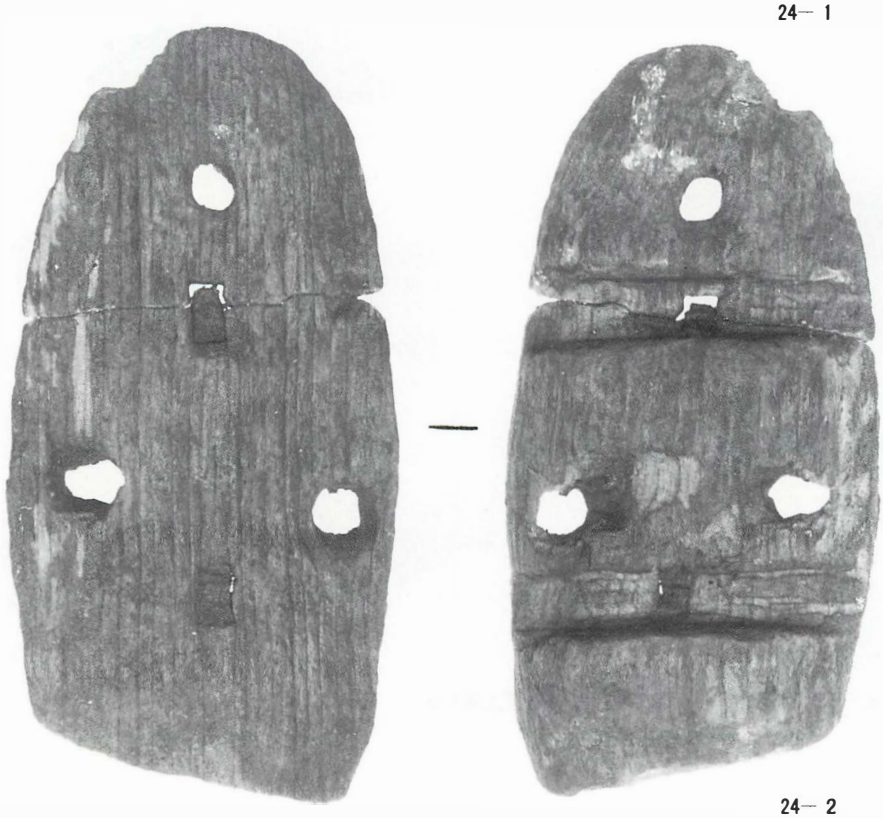
23－4

23－5

図版14　陶器(常滑焼)・褐釉陶器・土師質土器($\frac{1}{3}$)

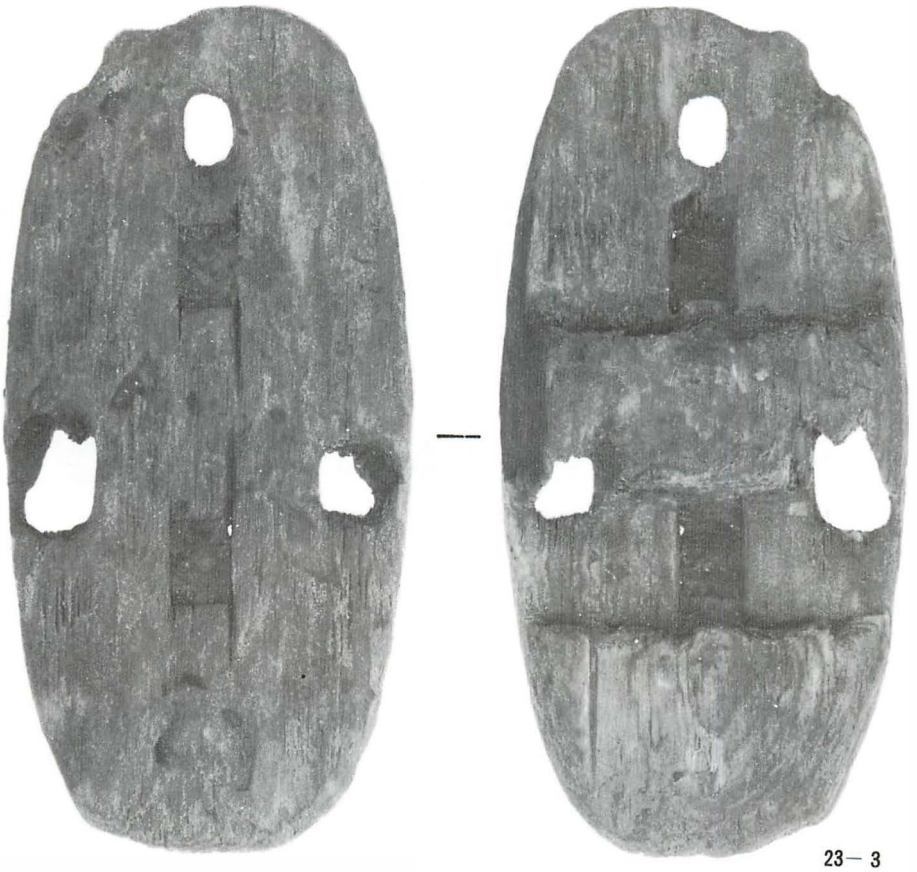


24－1

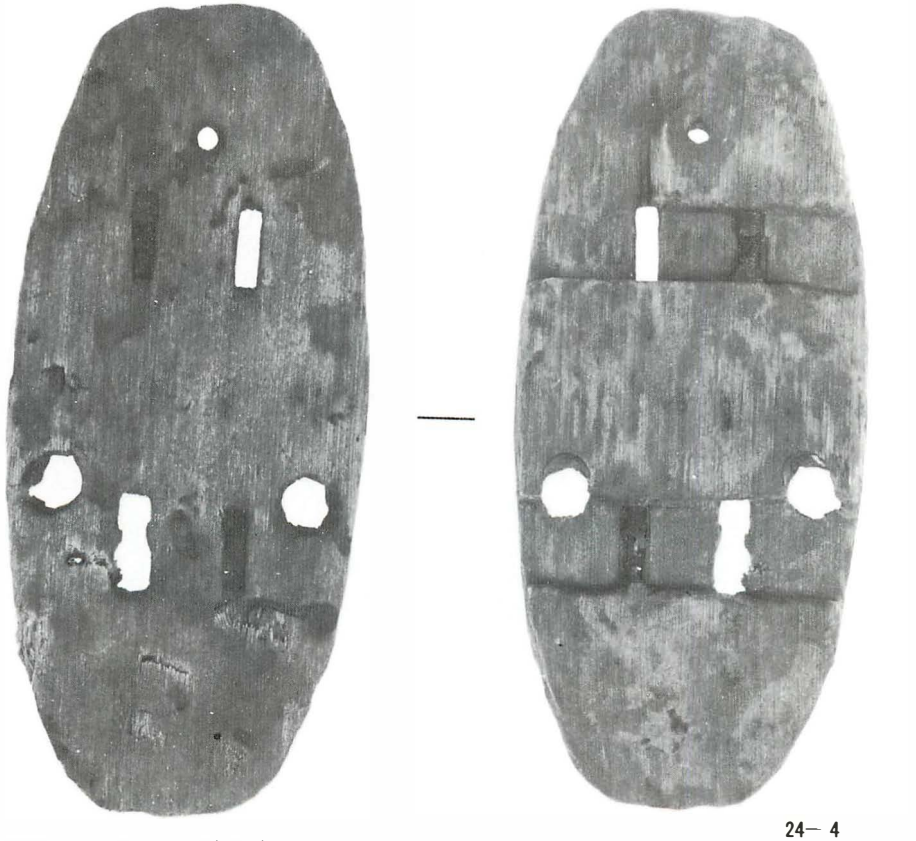


24－2

図版15　木製品(下駄)(1/2)

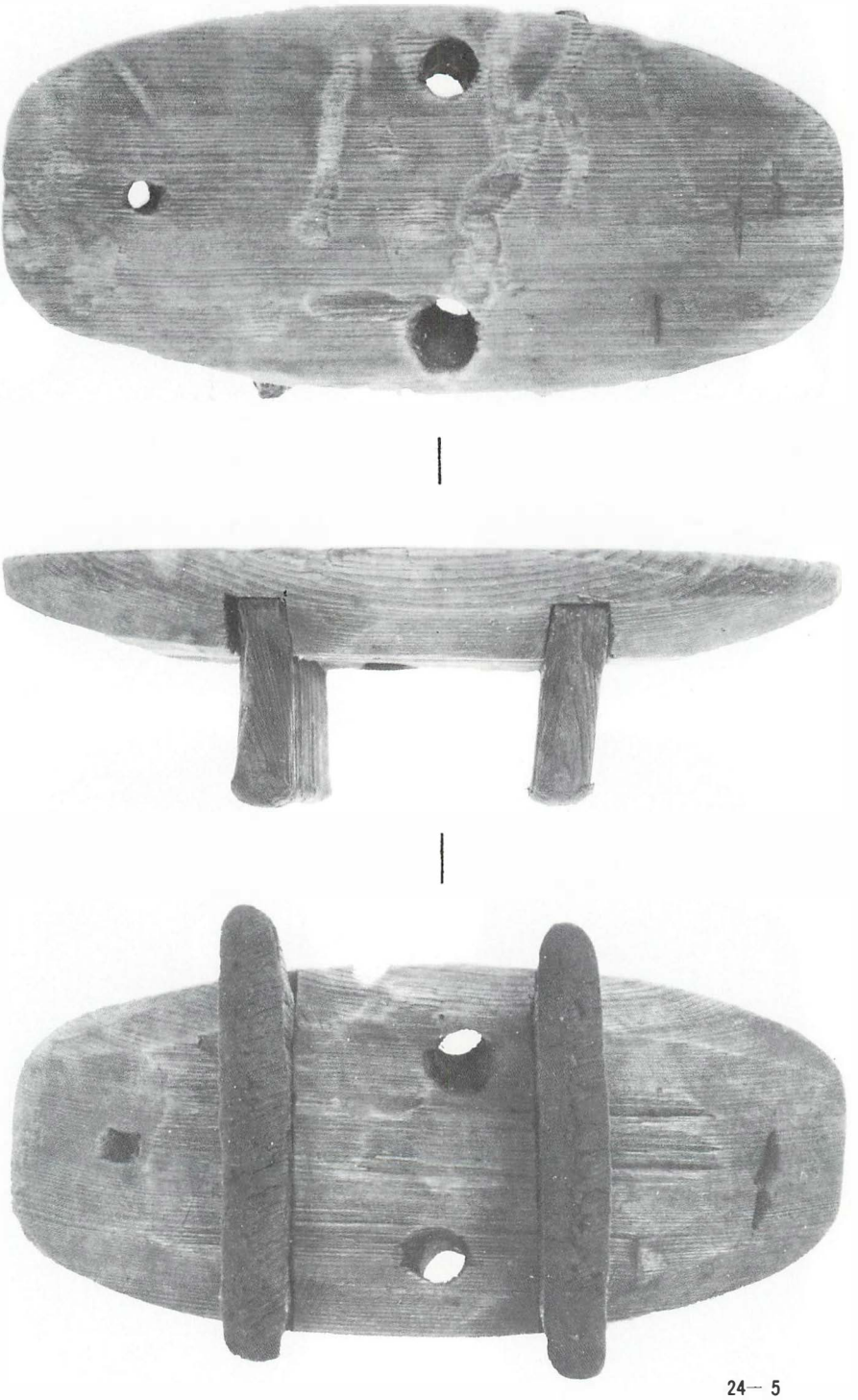


23－3

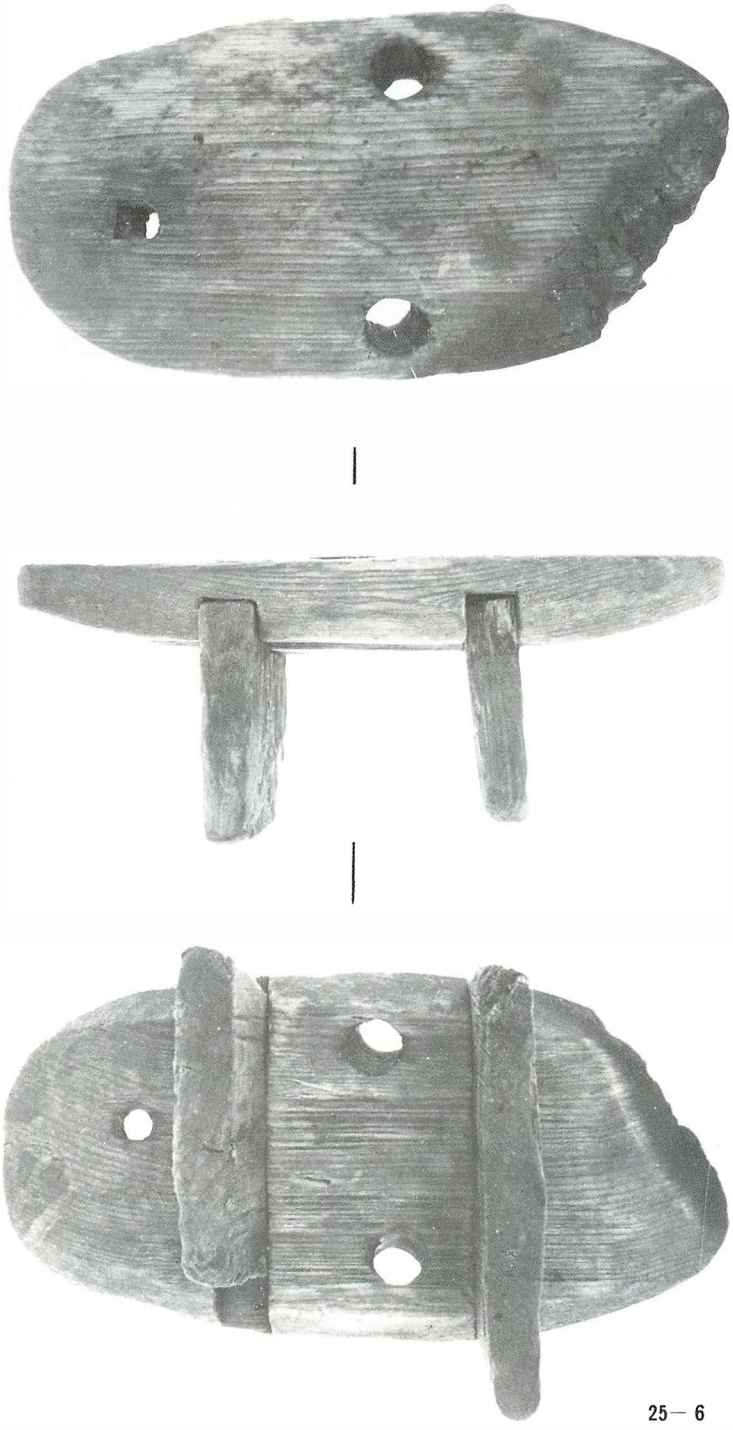


24－4

図版16　木製品(下駄)(1/2)

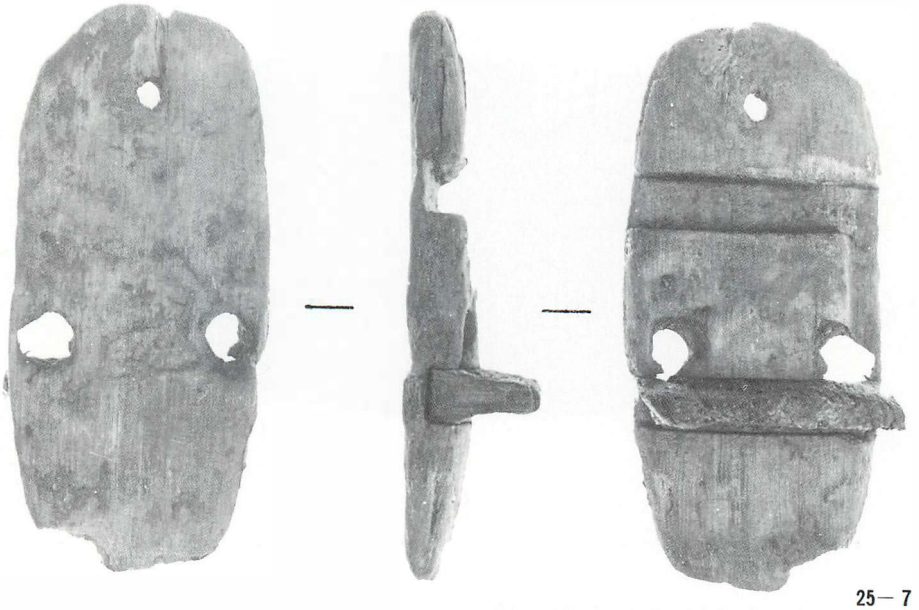


図版17　木製品(下駄)(½)

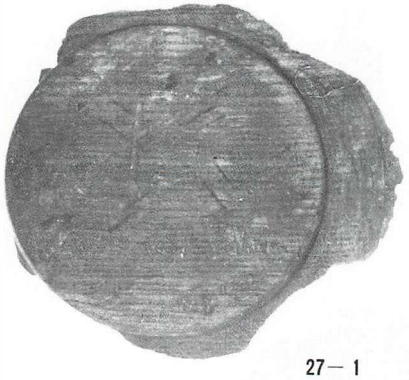


25－6

図版18　木製品(下駄)(1/2)



25－7



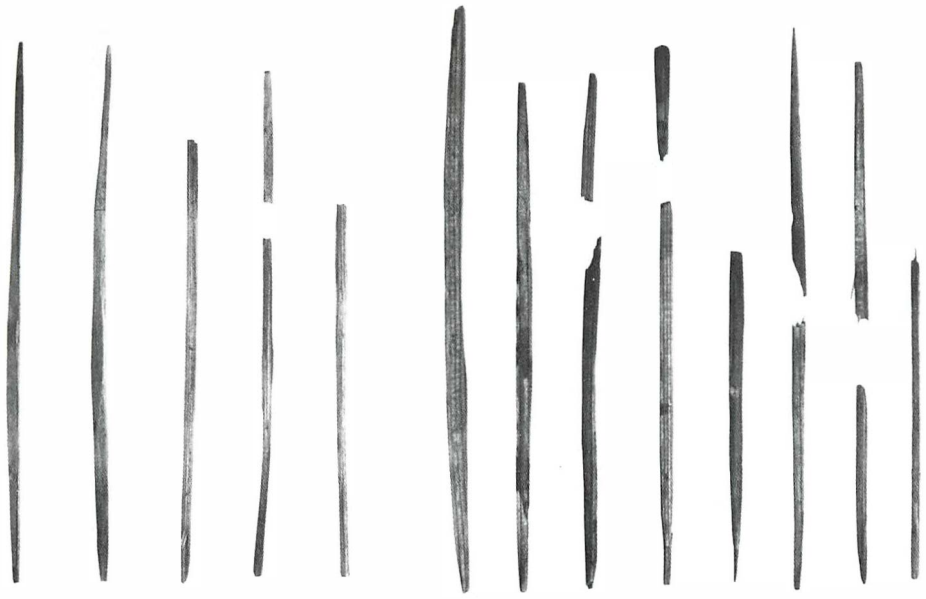
27－1

27－2

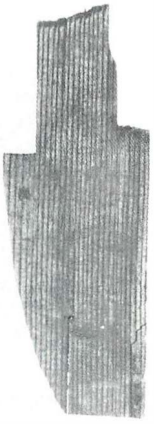
27－3

27－4

図版19　木製品（下駄・椀・櫛）（$\frac{1}{2}$）

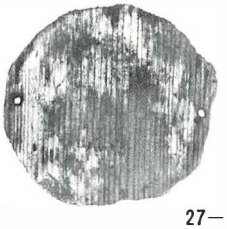


26－1～17



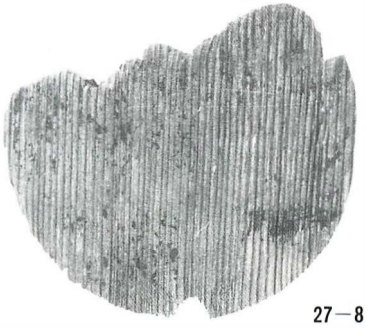
27－5

27－6

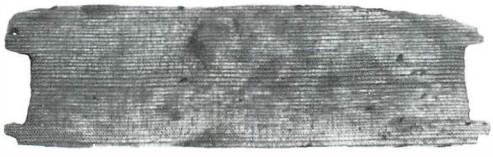


27－7

27－9

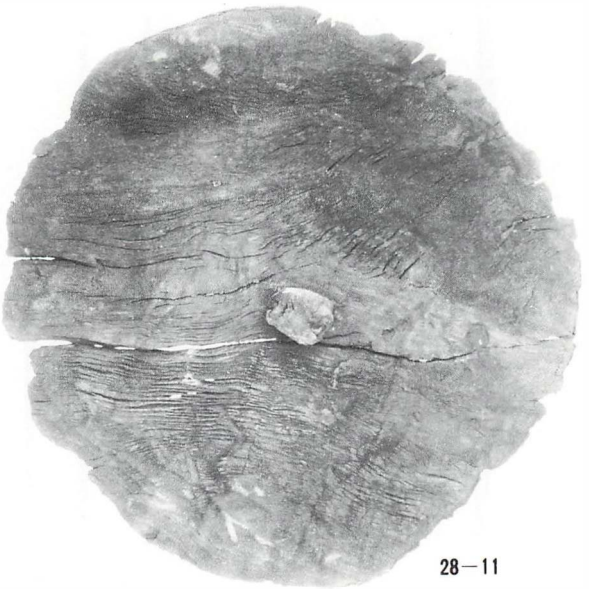


27－8



27－10

図版20　木製品(箸状木製品・底板・用途不明木製品)(1/3)



28－11

28－12

28－13

28－14

28－15

28－16

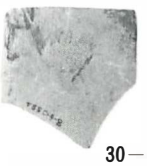
図版21　木製品(蓋・底板・用途不明木製品)($\frac{1}{4}$)

29— 1 ～ 5

30— 1

30— 2

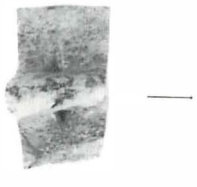
30— 3



30— 4

30— 5

30— 6



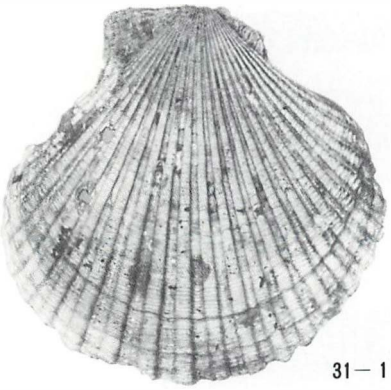
30— 7

30— 8

30— 9

30—10

図版22　石製品(滑石製石鍋・磨製石斧・砥石・用途不明石製品)(1/3)



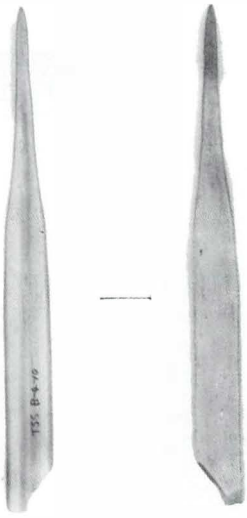
31－1

32－1～5

32－6

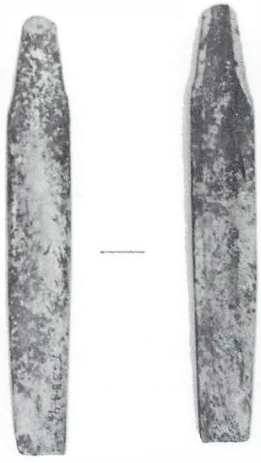
32－7

32－8



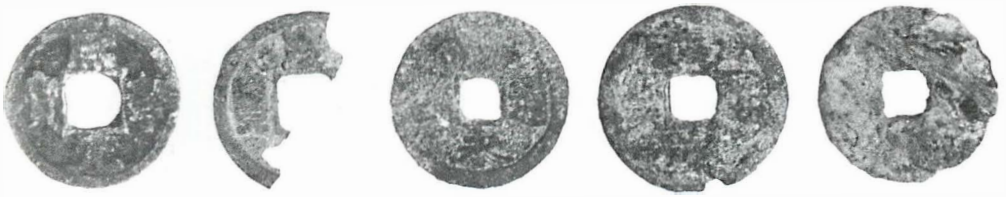
32－10

32－9

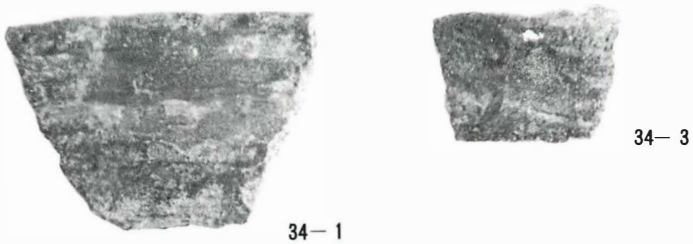


32－11

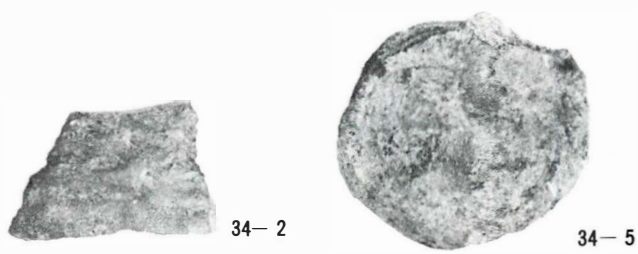
図版23　貝製品・土製品・金属製品・骨角器（$\frac{1}{2}$）



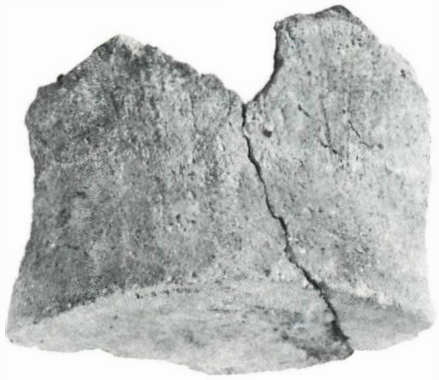
33— 1　33— 2　33— 3　33— 4



34— 1　34— 3



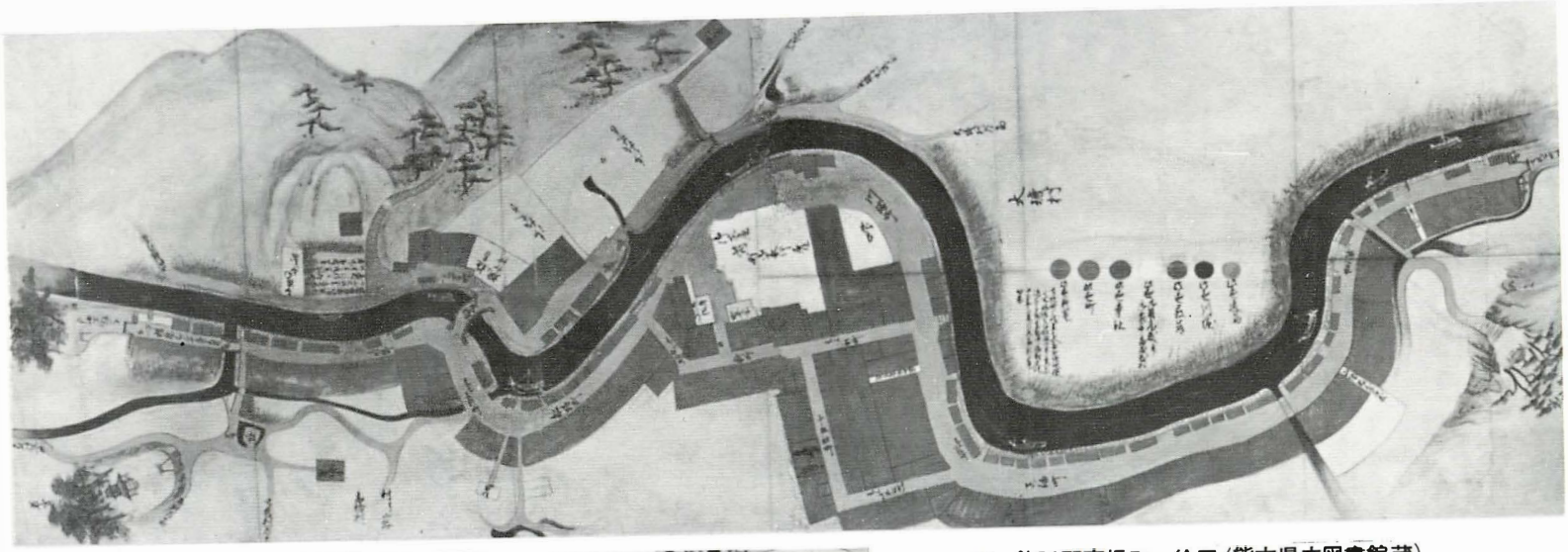
34— 2　34— 5



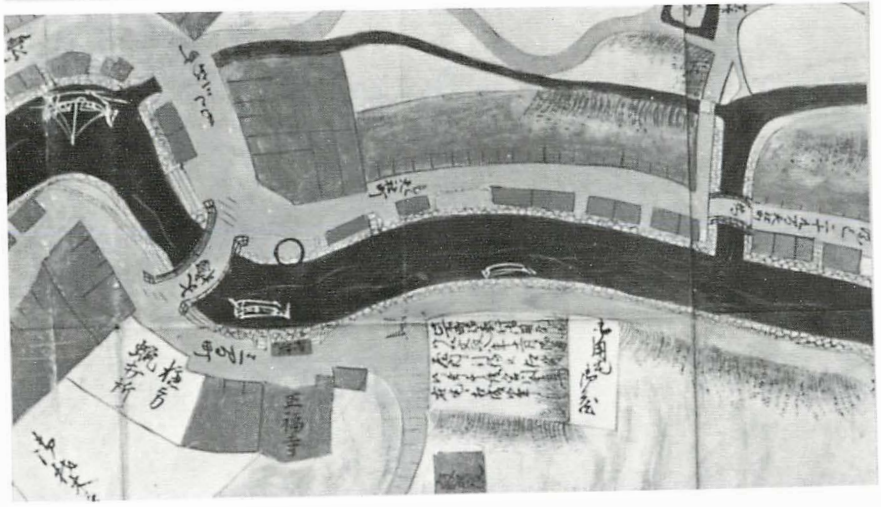
34— 4

図版24　古銭(1/1)・縄文式土器(1/2)

図版25　自然遺物(貝類・桃実)



(1) 飽託郡高橋町の絵図（熊本県立図書館蔵）



(2) 同上拡大
○印が調査地点

図版26

熊本県文化財調査報告　第28集

高　橋　南　貝　塚

昭和53年3月31日

発　行　　熊本県教育委員会
熊本市水前寺6丁目18番1号

印　刷　　城野印刷所
熊本市琴平1丁目4番1号
電話(代)㊹5181

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 28 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：高橋南貝塚
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日